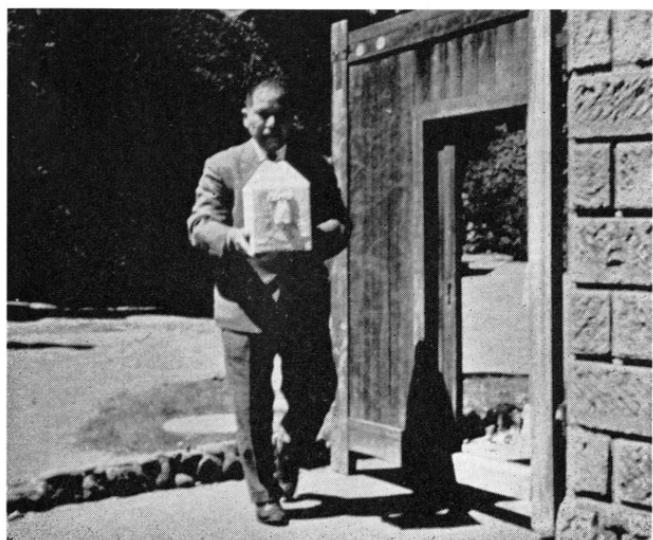
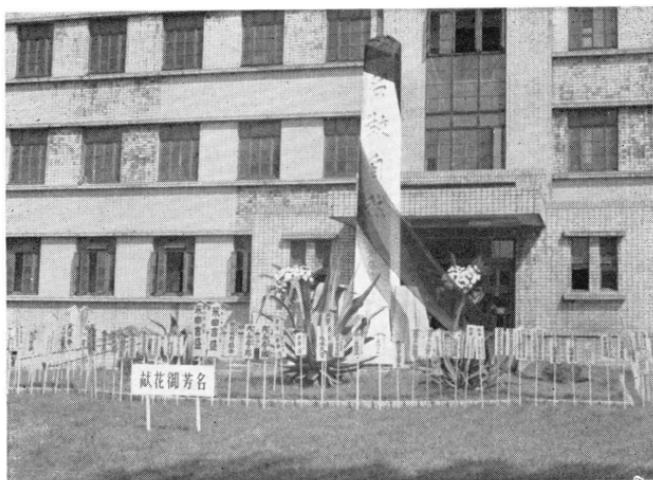


名教  
自然





米寿の祝 鈴木先生



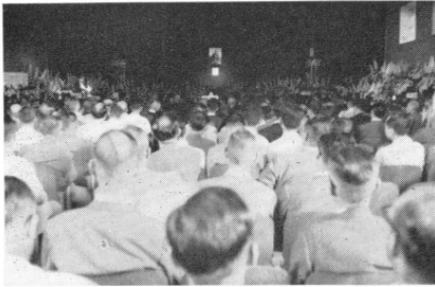
前頁上 名教碑

下 小汀氏に抱かれて学部葬に向ふ  
御遺骨





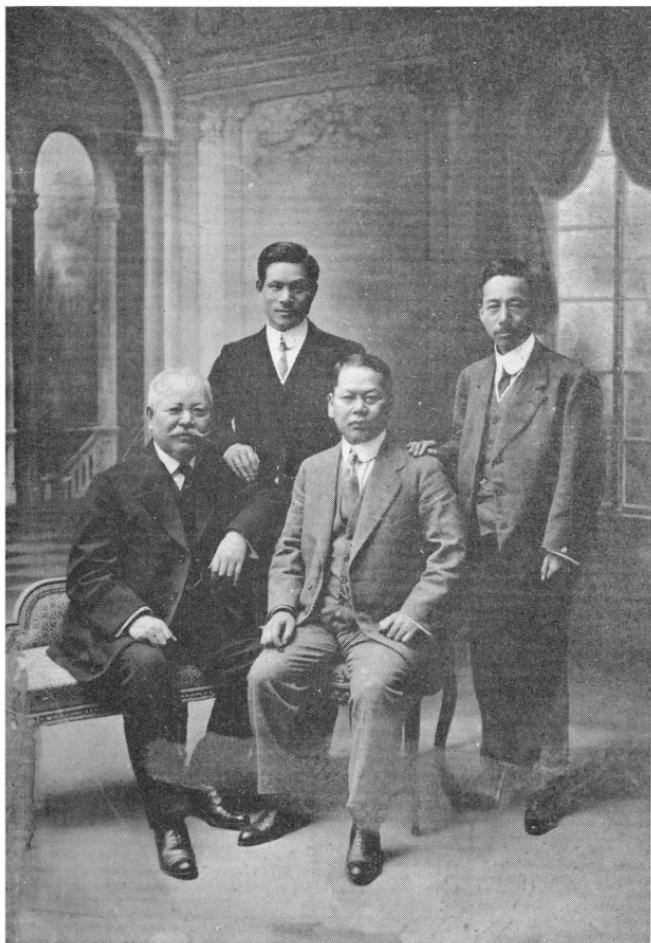
右頁 卒業生の肩により山をおりる先生  
の御柩



左 学部葬

下御墓(日野公園墓地)





パリーでのめぐりあひ

左より高峯博士、今津氏、鈴木先生、近藤氏



蘇峰先生と共に

愛孫と共に



34年 9月11日



32年春



35年9月11日 (90才誕生日)





上及び次頁上

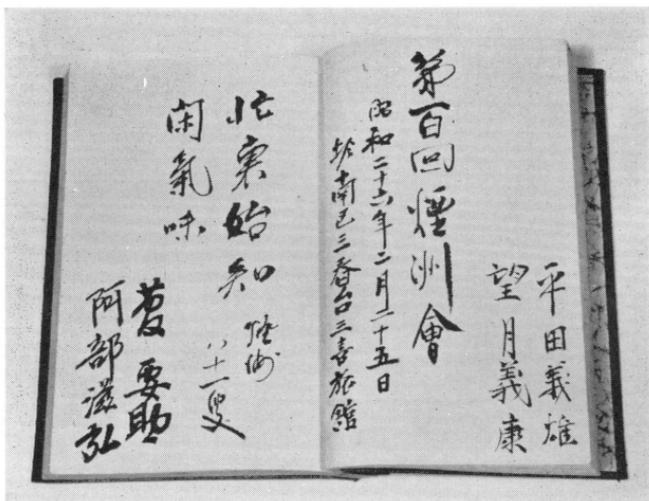
米寿の祝の際ニューグランドホテルにて野村、富山両氏と





下 煙洲会歴代幹事と共に(第二百零回煙洲会)





昭和26年 2月25日 煙洲會 第百回祝賀會

第一百回煙洲會

昭和二十六年二月二十五日

於南區三春台三喜旅館

忙裏始知

陸海

二十一

閑氣味

若 要助

阿部滋弘

矢野初彦榮

伴蘇洋

大谷源進

平岡義雄

田村健信

大垣梅雄

松原表

岡本達

石井欣之助

仲田旭

曾根科

河村文一

永田鏡一

杉山秀清

望月義康

水部俊基

邦之雄

吉田正兵

柴垣信次

落合英一

林正義

赤藤輝治

山口辰男

加山崑彦

小汀浩一郎

後藤西夫

村松四郎



# 快晴

午前十工日伴園主町の玉手讀ニ申さん宅へ  
 行くが即種を物着す  
 伴路偏然詩ニ申さんと同室二人に去合す  
 其一人は西郷南洲の親戚西郷達親君を  
 あつた 其より尾の江町に買物をして西郷宅  
 午後三時頃相也留字中ハパー之内下宿した互  
 人徳生博中澤長治君来訪約五十年前目り  
 再会何君の三十年前台博の豊子流野史ニ  
 便り現今は大坂北田製菓の顧問懐旧談功  
 二時五十分女特許去去と山崎手釋ニ至す  
 夜鈴不底君来り御生手と七廿ワ年交  
 鍋の干物と物手車

流 興 上 り 二 十 日 光 山 湖 寺 山 崎 吉 盛 村 子

稱許平素は其無礼たる禮は宥免  
祈る備り患送之れ煙洲漫筆  
其後少采を得て祥見讀破を  
に及て種々意外の事多く今の  
世に老先りの如き人物が健全せらるや  
と感ふもたから其禮を觀せり  
禮考一書を呈す甲

先老頭より有吉知事が花柳界は  
教育上面白からも他所へ追放  
移轉せしめたの打ふらも附近の料  
亭に奉仕する女性を年々立て  
制限を加へた云々とあり今の教育  
者が之を見ても何と云いか

私は無賞四訓無試験無採点  
の三無主義を忒辞として宜言は  
したる老生自らの實行に依り  
慶應義塾出身の安實業に永に  
して名声をばせた人物は多くは在  
る甲 試験成績不良も也

和田豊治 武藤山治 藤山雷太  
たれめ斯く甲も拙者を甲に不及  
久原房之助 本山彦一 等……

凡そ落弟組なり、学校の成績とか  
卒業の前後など、依り人間の價  
値を去るもの今日、制度もえ唯  
醫士の外なし

中村房次郎 君は老生親しく  
交際致さんとてまたか取引はあり  
あふれから多かれ兼知りて居り

またた立派な人ねてあり事業も  
今日に至り大成現実、惜ふ(キ)  
極てありませ

原三溪氏は老生も茶道の上り園氏の

關係にして極めては近しく致して

當世稀此見の傑出せる人相

は拙云の後に至りて其先を放

た、此能眼堪さるる名文を拜讀

是は否是も老先の心血より出

た一字一文讀者を以て涙なく

と、讀能はさるものと感激せしめ

あらん

最後、先生の回顧八十年、對そ

の批評、赤面、志縮、切、は厚

情、は同情を深謝致す

先生五月十七日を以満八十二才

とふりまて、不幸に至り、頑健一

週、一面宛、郊外散步、寒中

と雖も、欠乏たり、事おし、赤考

持系堤ふふ、一日約三里を目

標として、自然の風景を樂み

左人知已、悦み、ふくふり、死後、此

少、叙え、き、感、め、此、と、今、は、先

大先の、漫筆の如く、教育

面白きもの、ふく、餘生を、慶應

工學部、に、さ、り、少、仕、肩、を、三、の、ぐ

健康、有、之、何、卒、乍、他、事

々、安、意、斯、界、の、大、先、此、筆

時に、三、無、主義、戒、は、先、生、備、に、日

感、推、服、の、至、は、今、後、の、指、導

切、祈、り

固、う、有、り、が、ら、い、長、先、大、先、此、に、ふ、ら、う

は、一、笑、ら、る、度

早、新、具

五月十七日、藤原

鈴木先生

書



横濱市南正区町

横濱国立大学文学部

横濱工業會出煙洲層元付

鈴木達治様

東京港日白金今里町

藤原銀次郎

昭和六年

五月十七日

# 序 文

煙 洲 会 菅 要 助

古い話で、昭和十四年の六月二十九日と覚えて居りますが、当時川崎市在勤の母校卒業生が煙洲先生を招いて先生の御話をお聞きする集いが最初で、爾来毎月第四水曜日に先生を中心として、卒業生拾数名の会合を煙洲会と云ふ名のもとに開かれたのであります。

毎月一回欠かさずに開催された煙洲会は先生のお亡くなりになる二ヶ月前まで催され此の最後の煙洲会が第二一九回になりました。

此の様な性質の会合がかくも長年に亘つて継続されたことは、外にあまり例

が無いことと思ひます。先生もこの煙洲会を非常に喜んで居られ、又随分と楽しみにして居られた様です。「わしが長生きできたのは全く煙洲会のおかげだ」と云はれたのであります。私達教子も毎月第四水曜日には老師に御会いして御話を聞くのが非常に楽しみでした。煙洲会のことについては本文中に会の幹事を長年つとめられた小汀浩一郎氏が詳しく書いてありますので省略致しますが、先生が御亡くなりになる数年前から六ツ川の御宅で煙洲会を開く様になつて居りました。門下生十数名が先生の御宅の日本間に先生を取囲み教育問題、政治問題、經濟問題、日教組問題等多種、多方面に亘る話題で先生の御話を伺つて居つたのもつい先だつての様に思ひます。月日の立つのは早いものでもう先生の一周忌を御迎へしようとして居ります。

先生は米寿の御祝をすまされてからも、づうつとお元気で居られましたが、昨夏九十才にて遂に起たれず天寿を完うされるに至りました。我々門下生は先生

の百才の御祝を期待し御祈して居りましたが遂に空しくなつてしまひました。

### 巨星落ち行くては暗し秋の道

一門下生

先生は京都同志社に学び、東京帝大を卒へられ、広島高師、仙台二高、東京高工等に教鞭をとられる間に、或は新島先生、或は手島先生を始め幾多の諸先輩に接せられて、先生の天与の人格に増々磨きがかけられ、その光を増すに至つたものと思ひます。特に先生が初代校長として横浜高等工業学校に赴任されますや、その卓越せる教育方針と非凡な学校経営とが忽ちにして斯界に頭角を現はし、横浜高工の名声を高からしむるに至りました。

先生は我々学生の教育指導には特に意を用いられ、或は毎週一回の学生との面会日の設定、或は毎月全校学生に対する講演や夏期休暇中に全学生に校長先生よりの御手紙等、常に学生の中に在つて、その人格の陶冶に心を尽されていきました。特に「名教自然」の四文字に結集された先生の教育方針は我々母校卒

業生の終生の処世訓であり座右銘でもあります。

先生は学内ばかりでなく、横浜市及び市民に対する愛情の深さも亦格別のもので、古くは関東大震災後の母校名古屋への移転問題、商工実習学校、横浜工業専修学校の創立、建築、造船、航空学科の増設、工業懇話会の主催、毎年の学校創立記念祭、高工高商の野球定期戦、或は戦争中の必勝懇談会に老軀をかつての御活躍等、学校学生と市民との親愛な接触と、市民の工業立国への啓蒙は横浜市民の胸にも永く残つて居ることです。

自ら後継者として御選びになられた富山先生に後事を託して校長をおやめになられてから、一切の公職に就かれることをなさらず、常に学校と卒業生の将来を暖かいまなざしで見守つて下さいました。六ッ川の丘に先生が居られるといふその一事が、いかばかり我々卒業生の心より所となり、その励ましとなつたか、はかり知れぬものがあります。

昨夏あの丘を先生の樞が私達門下生の肩によつて静かに下つて行きました。併し先生の残された煙洲精神は、我々全卒業生の一人一人の胸の中に脈々として生きて居ります。先生が我々の胸の中に蒔かれた種子は、夫々立派に成長し繁茂して先生の御期待に報いる事を、我々はあの時涙の中で心に誓ひました。

先生の一週忌を迎へるに当り、先生の追悼録を出版して、関係方面に御配りしたいとの議が、煙洲会同人及び御遺族から起り、先生の想ひ出を集録出版する運びとなりました。

御多忙中にも拘らず、ころよく玉稿を御寄せ頂きました名士各位、諸先生、並びに校友諸兄に心から感謝致します。尚本追悼録の出版に当り、煙洲会幹事の小汀浩一郎氏及編輯を一手に御引受になられた会員の村松四郎氏の献身的な御骨折に対し謝意を表します。

学校創立以来戦前戦後を通じて、先生の御執筆になる書物を、私達は各々心

の糧として、或は処世の訓として、沢山読ませて頂きました。此の度は私達の先生への想ひ出を、先生の墓前にお供へしようと思ひます。此の企てに對して先生はあの温顔に微笑を浮べながら「わっしやうれしいよ」と喜んで下さることと思ひます。又校友諸兄も本書によつて先生を偲び、その御高德の一端にふれるよすがともなれば、「名教自然」の子として我々煙洲会同人の喜び、これにすぎるものではありません。

尚、煙洲会は先生亡きあともその御遺志を体して毎月第四水曜日に、母校其他から講師を招いて、煙洲思想をもとにした御互の勉強になる会合をやつて居ります、誰方でも御遠慮なく御参加下さい。

昭和三十七年七月二十九日

(東京芝浦電気KK 常務取締役)

## 煙洲先生の雅号の由来記

元茨城大学々長

鈴 木 京 平

信念の人、異色ある教育家として広く世に知られた先生は、また数々の逸話の持主でもあられた。煙洲という雅号は、勿論、先生がお若い時分から非常な煙草好きで大の愛煙家であるところから来たものであるが、これにも一つの逸話がある。先生が東京蔵前で、まだ薄給の教授時代のことであるが、世の常の煙草好きなら大抵は、先づ安煙草を沢山買つて喫いたいものであるのに、煙洲先生は、その時代から学校で毎日、葉巻煙草を燻らして、恰も大実業会社の重役然として、すまして居られた。一体、どこから、その煙草代が来るもの

か、いや、世間では、経済的余裕のある人ほど却つて安物を買いたがるものであるのに、先生のこの行為は、普通人の出来る業ではなく、当時の若い教授連には、とても真似も出来ることではなかつた。私は、或時、不躰であつたが、先生に向つて、世間には偉いと思われる長所を有する人は沢山あるが、先生くらしい安月給の時代に年中、葉巻煙草をくわえて平気で居る方は、恐らく日本中には先生ただ一人あるのみと思います。この外に長所があらうと無からうと、それは問題ではない。先生の偉さは、この一事だけで充分であると私は強く申上げた。先生笑つて、ただ一言、「これも道楽さ」と申された。

先生の雅号は、昭和の初め頃までは天羊であつた。私が書いて頂いた「一君万民」、「晴耕雨読」の二面の額には共に天羊とある。昭和の初め横浜の学校に武道館が新築され、新たに先生の、御自筆の額がかかげられることになつた際に雅号には何か自分の特徴を表現したいと言われて考えられた末、日頃、偉大の人

物として崇敬して居る明治維新の元勳大西郷南洲翁に因んで、その雅号を煙洲と改められたのである。その際、私は先生の雅号の一部を頂戴することにしたが、天の字は私には余り物体なさ過ぎる感があるばかりでなく、その構造が大の字の頭を一本の棒で押さえつけられて居る形で私の性格に合わないから、その押さえて居る一本を取り除いて大の字にして頂き、天羊の羊は先生が羊歳生れであられたからであり、私は丁度その一廻り下の羊歳生れであるので、羊はそのままに、私の雅号を大羊としたいと、申上げたところ、先生も大いに喜ばれた。爾後、先生は煙洲、私は大羊を称することになったのである。その際、先生は私に対し、将来、特に公式の場合は別として、私の場合には位階勲等など決して用いてくれるな、煙洲鈴木達治で通したいものである、と言われたことがある。まことに、平民の方であつた。

第二次世界大戦の最中には、実に煙草が払底となり、私などは一時、禁煙し

たくらいである。ところが、煙洲先生の許には、知人、友人、或は旧門下生達  
が、この煙草の欠乏には流石の煙洲先生も定めしお困りであろうと、大いに心  
配して方々から同情の煙草が送り届けられたので、あの大戦争中でも、ふだん  
の通り愛用の煙草にはことかかさず、葉巻を喫み通したばかりでなく、時には  
その幾分を節約して、煙草が無くて非常に困つて居る人達に余徳を福分けされ  
たと言う逸話さえもある。

嗚呼、どこまでも脱俗有徳の士煙洲先生、長い御生涯に亘つて、折々発表さ  
れた種々の論文や談話を通じて、或は直接教を受けた多数の門下生達を通じ  
て、夫れから夫れと、その感化の力は永く後世に及んで、世道人心に裨益する  
所多からんことを深く信じて疑わぬものである。一周忌に当り、茲にその御遺  
徳を偲び、謹んで御尊靈の御冥福を祈り奉ると共に御遺族、御一門の皆様や後  
進者のために広大の御加護を垂れたまわんことを祈念申上ぐる次第である。

# 目次

写真

第百回煙洲会署名

煙洲先生日記

藤原銀次郎氏書翰（折込）

序文……………菅要助

煙洲先生の雅号の由来記……………鈴木京平

徳富蘇峯氏序文（折込）

甲 辞……………米田吉盛……………一

甲 詞……………山口辰男……………四

甲 辭……………大須賀与喜三……………九

鈴木先生の思い出……………山川一郎……………一三

鈴木達治先生の思い出	三宅驥一	一九
先生の教育の要諦	大塚節治	二二
鈴木達治先生の追憶	田畑忍	二六
名教自然の鈴木先生	石橋湛山	三一
煙洲先生のこと	半井清	三六
玉川堂の慈父	玉川覚平	三八
煙洲先生を憶う	富山保	四一
鈴木達治先生	川上刀根五郎	五〇
煙洲先生の思ひ出	石毛郁治	五三
歳前時代の先生の思ひ出	平林憲一	六一
先生と私	渾大防小平	六七
煙洲先生を懐う	竹内秀雄	八三
先生と塩務局の思ひ出	加藤竹藏	八八

煙洲先生の思ひ出	.....	桜井春雄	九一
野村洋三氏との座談	.....	煙洲会	九四
校風徐興	.....	阿部滋弘	一二八
どうしても届かぬ煙洲先生	.....	広部俊十郎	一三〇
私の中に生きてゐる「人間鈴木達治」	.....	石井欣之助	一三三
追想夜話	.....	山本栄治	一四五
煙洲先生の想ひ出の一端を語る	.....	山田功	一五六
不敵而整	.....	数原三郎	一五九
恩師の思ひ出	.....	田村文雄	一六〇
思ひ出	.....	荒木義雄	一六七
先生と私	.....	加山寅吉	一七二
メキシコより鈴木先生へ	.....	平田義雄	一七六
鈴木達治先生を偲ぶ	.....	上条勉	一八一

鈴木先生……………	大垣梅雄……………	一八八
追悼のことばに代えて……………	佐藤喜雄……………	一九一
温故知新……………	西尾清治……………	二〇〇
煙洲先生と私……………	田辺謙輔……………	二〇七
煙洲先生の思い出の中から……………	河村剛男……………	二一六
故煙洲先生を憶ふ……………	小貫隆治……………	二一九
煙洲先生と私……………	吉原謙二郎……………	二二二
煙洲会……………	小汀浩一郎……………	二二九
回 想……………	荒井文治……………	二三六
威あつて猛からず……………	阿部元吾……………	二四一
思無邪念……………	溝口哲夫……………	二四五
先生を偲びて……………	長谷川光次……………	二四七
不滅の名教自然……………	川村秀義……………	二五二

先生の思想を継承する系譜の一員として……………	田中三郎……………	二五六
思ひ出すまゝ……………	村松四郎……………	二六二
葬儀前後の思ひ出……………	永田行夫……………	二七二
出版に際して……………	鈴木博人……………	二七六
編集後記……………		二八四
煙洲会記録……………		二八八

（装幀は昭和十年発行「六ッ川夜話」  
 による表紙背文字は富山保先生）

缶竹堂

教育師道ヲ以テ  
 始メテ  
 録ス

先生現存ノ見テ師道實踐者也

其門弟ノ先生ヲ愛慕尊視ス

偶然ノ事ニ先生信天多地獨造ナル語

男兒思所カ言言ノ所カ行カ隨

缶竹用筆

其  
 雷同也予ノ莫逆ノ友誼彌久シテ在

厚サ加ヒテ其ノ甚シク相許ル所カカ為

耶否耶ノ如書テ謹ク君子中ノ一ノ語也

昭和十七年二月十八日於熱海楽園社

厚知 花峰ハノ堂



## 弔 辞

神奈川大学々長 米 田 吉 盛

昭和三十六年八月二十九日朝、元横浜高等工業学校長鈴木達治先生忽焉として長逝せらる。洵に、哀悼に堪えず。

先生教育界にあること四十年、終始、科学技術教育の振興と中堅技術者の養成に尽瘁せられ、輝かしい成果を挙げられたことは周知の事実であります。殊に横浜高等工業学校長在任の十五年間は、先生の生涯を通じて最も光彩に富んだ時期でありまして、先生の薫化が強く表われた時代であります。先生はその

理想とする自主自発、自由啓発の教育精神を実現するため無賞罰、無試験、無採点の謂わゆる三無主義を断行し、形式主義、画一主義が風靡していた当時の教育界に一陣の清風を送られました。先生が此くの如き進歩的教育を大胆に実行せられたことは実に驚歎に値するもので、以て先生の人間形成に対する確乎たる信念を窺うことができるのであります。

私は先生に同郷の先輩として私淑し、また教育界の長老として尊敬して参りましたが、私が若輩の身を以て横浜専門学校を創立し、拮据経営に当つていたのに対し、先生は常に温い心を以て陰に陽に激励し声援することを惜しまれず、神奈川大学に移行後も、評議員に就任し、変らぬ指導を与えられましたことは深く感佩するところであります。

思うに、先生が私学の成長発展にかくの如く、関心を示されたのは、単に同郷の後輩を引立てるためばかりでなく、教育界の長老として大乗的見地から

国、公、私立を問わず高等教育の堅実なる成長を念とせられた、高邁なる意図に出でられたもので、先生の教育に対する熱意の片鱗を示す一挿話として想起するとともに、今更ながら敬慕の念を禁じ得ないのであります。

先生は昭和十年二月勇退して悠悠自適の生活に入られました。先生の高風を慕い、馨咳に接しようとする者がたえず、先生の薫化は永眠せられるまで及んだのであります。先生は教育界の耆宿として、貴重なる存在であつたのであります。

然るに今や先生なし、嗚呼悲しいかな。

茲に永別に当り、かれを想い、これと思うところを知らず、些か蕪辭を陳べて弔辭といたします。

昭和三十六年九月二日

## 弔詞

社団法人 横浜工業会 理事長

山 口 辰 男

「大往生」という言葉がありますが、私共の親父、煙洲先生は文字通りの「大往生」をとげられて、今私たちとお別れしようとしておられます。

思い起こせば大正四年に御就任以来、満十五年たれた時、「静かなること林の如く、疾きこと風の如く、本日を以つてワシヤやめる」と突如退官宣言を発せられてから爾来二十有七年、この間隠棲の地六ツ川の台上から、私たち不肖の弟子どもを終始かわることなく、いつくしみのまなこで、黙々としてその行方を見守つていて下された先生、今、先生とお別れするにおよんで今更の如

く在りし日の先生を、ふりかえります時惻々として胸をうつものがあります。

大正十二年大震災直後、「市民が塗炭の苦しみにある時、国立の学校だからとて、ひとり名古屋に避難できるか」と敢然焦土に取組みいちはやく他校に先立ち講義開始の立札を市内に立てて学問復興のノロシをあげられた先生、先生の自力で建てられたバラック校舎は雨がそそげば講義は消えましたが、その想い出は未だに消えません。

試験があるからとて、良い点が得たいからとて、賞や罰があるとして勉強をするのでは名教にあらず、一種の賄賂教育なりと喝破され、世の所謂「教育者」なるものにレジスタンスを試み、あれはどうるさかつた文部省というものがあつたにもかかわらず敢然と実行にうつされた先生、ともすれば起こり勝ちな私たちの情け心も、この故にかえつて振起されたものでした。

国立の学校が、横浜にある意味はまず市民が学校に親しむことから初まる、

市民の皆さん学校内に自由に御這入り下さい、自由にお休み下さいと、校門を  
掘げ、門扉を設けられなかつた先生、そして盆暮には町の人たちを学校に招か  
れて学生と共に楽しい夕を持たれた先生の温顔をマザマザと想出します。

「子供からおもちやを取上げたら、別のおもちやをやらなきや子供だつて怒  
るヨ、文部省は学生から学生劇を取上げたからワシや別のおもちやを買つてや  
るヨ」と買つて下さつたおもちやの一つは、今この壇上にあるベヒシユタイン  
フルコンサートグラランドピアノでした。

いまわの際まで葉巻をはなされなかつた愛煙家の先生をして「学校内ではた  
ばこをのみなさんナ、ワシものまんからネ」といわしめたものは、何よりも  
「火災」を憂えられたからでした。そしてのみたくなられた先生は、学校の柵  
外に喫煙プロムナードを設定、葉巻をくゆらし乍ら散歩されたほほ笑ましい風  
景に私たちはよく接しました。私たちも「バット三本一まわり」と先生のあと

からシガールの香りを楽しんだものでした。

一たん入学させたからには、どんなことがあつても卒業できるように努力するのが教育者というもの、退校の、放校のなんて文字はウチの学校にやいらんヨといわれて、それを実行された先生。

先生をかこんでの教室や実験室での炉辺談話は、サイン、コサイン、ベンゼンリングで固まつた私たちには何よりのレクリエーションの一刻でした。そして先生はいつもこういわれました、「学校は「人」をつくる所じや、この学校はその便宜手段として工業技術は教えているが、それは手段であつて本質は人間をつくることだ、君等は立派な人になることだ、だから君等は技術屋になるばかりが能じやない、何になつてもエエヨ、名教はあくまで自然であるべきじや、他からとやかくいわれてやつたり、とやかく強いてやつたりするもんじやないんじや」

先生はその自由教育に敢えて理論づけはなさいませんでした、また他にそれを強いられたこともありませんでした。ただただ実践されることによつてその何物であるかを知らしめてくれました。

今、「名教自然」の碑は毅然として大学の前庭に立っています。これがつづく限り、否、なくなつたとしても、先生の名教は私たちの心の中に、そして私たちの子孫の中に脈々と流れていくことでありましょう。

今、ここに先生を久遠の彼方にお送りする時、私たち弟子どもの心の中に去来するものは、ひとしく「名教自然」に育くまれ培はれた幸せにちがいありません。

では先生、お別れをします。しかし、先生、いつも、いつも、そしていつもでも私たちの中にいて下さい。先生、さようなら御機嫌よう

昭和三十六年九月二日

## 弔 辞

神奈川県立商工高等学校同窓会長

大須賀 与喜三

煙洲鈴木達治先生

神奈川県立商工高等学校同窓生を代表致しまして、先生とのお別れのことばを申し上げます。

さきおとし、昭和三十三年七月、わたくしたちは先生の米寿を大学、工專の人々と共に、県立音楽堂、ニューグランドホテルで心からお祝い申し上げます。そしてその時、わたくしたちは先生の白寿のお祝ひができますことを衷心からこいねがつたのであります。

しかるに今日こうしてお別かれのことはを申し上げなければならぬことは、誠に残念なことであります。今日こうした場に身をおきますと、今更ながら先生に対する感謝の思いが胸一杯に満ち溢れて参ります。わたくしたちの県立商工高等学校は、安部幸兵衛翁と、先生のお二人がおられなければ、この世に生まれることが出来なかつた学校であります。創立当初において、あい次いで起つた学校の危機は、実に先生の卓越した手腕によつて、それぞれ無事切り抜けることができ、発展の一路を辿ることができました。

先生のすぐれた教育の理想、名教自然、自由啓発主義の教育によつてはぐくまれ、わが国産業界における中堅の担い手となつた卒業生も、今日では八千五百の多数をかぞえ、学校も昨年は創立四十周年祝賀式を盛大に開催いたしました。先生の兼務された三校のうち、本校は最も手を焼かれた学校であつたと存じます。しかしながら、それだけに今日の成長した学校や卒業生の状況をご覧

になられ、ご満足も一入であつたことと存じます。先生の蒔かれた種は、今や  
すくすくと立派に成長しました。先生のご理想、お言葉は、たとえおなくなり  
になつても、わたくしたちの胸の中に生きております。「芸術は長く、人生は  
短し」といわれていますが、先生のご精神は長く長くわたくしたちの胸に生き  
続けて参ります。わたくしたちは、しばしばおとずれる人生の危機に際し、先  
生のお言葉や数多く残されたご著書により、解決の鍵を見出して参りたいと念  
じております。

先生の国士としての、また教育者としての、高邁なご識見、ご抱負、ご功績  
あるいは、卓抜なお人からについてはここに述べることを省略いたします。た  
だ先生は、よき師、よき友、よき弟子を数多く持たれた、この世にたぐい稀れ  
な、幸福な生涯を送られた方であつたことを痛感いたします。そして先生によ

うな方を、この世から失つた大いなる損失を返す返すも残念に思われてなりません。

煙洲先生、先生は早くから日野の公園墓地のお気に入りの場所に、ご自身の墓を造つておられました。かの地には先生の教え子、よき協力者であつた、本校第二代校長山本政人先生のみ霊も静かに眠つておられます。

わたくしたちは、かつて六ツ川のお宅にお邪魔したときのように、今後は、日野のおくつきにお邪魔いたすことと存じます。

先生との永遠のお別れに当り、日頃の感謝の一端を申し上げますとともに先生のみ霊の、いよいよ安らかならんことをお祈りいたしまして、おわかれのことばといたします。

昭和三十六年九月二日

# 鈴木先生の思い出

山 川 一 郎

私達が先生の御世話に預つたのは、二高（仙台）の二年級（一九〇二）からで、初めての御講義は、化学は最近非常な進歩を遂げたが、その益々発展する化学のバンナーの下で、真理の探究に共に研鑽することは、真に吾々学徒の無上の欣快であると、誠に迫力のある熱心なお話に吾々青年は全く魅せられたよ  
うで、殊に、「バンナーの下で」が印象的で、大いに研学の意慾をそそられたのであります。

所が、講義が段々進むと、オストワードの物理化学も出てきたので、自分達

の貧弱な化学知識では頗る難解で、その後の試験では、皆、不成績のようでした。然し実習は中々面白く、夕方まで居残りの者さえありました。その内に宿題が出たが、それは二十錢銀貨の銅の定量分析でした。多くの人は、割合に早く、然かも、理論に近い答を出していたが、自分は随分鄭寧にした積りなのに、どうも理論よりは少々開きがある。これでは必ず先生のお小言だと、覚悟をきめて、教授室へ答案を持参したら、「君、これがほんとなんだ、初めて分析をして、理論と一致するなどは、寧ろ不思議だ、これでよい」と、意外なお褒めのお言葉を戴いた。その時、私は非常に感激して、研究というものは、兎に角、正直にすればよいのだな、自分の様な鈍骨でも、やれば出来るのかなと思ひ、それから、化学に非常に親しみを感ずるようになりました。

その後、医科を卒業して、内科を志しましたが、それには医化学の基礎が是非必要だと思ひ、医化学教室で修業して、内科を学びました。而して伯林大学

では、有機化学（フイツシャー教授研究室）を、次で、カイゼルウィルヘルム研究所の実験治療部では、生化学を研究しました。

元来、私は内科の開業医が目標で、診療を天職と考えていましたので、自分の生涯の職業を、常に興味を以て継続したく、自然嗜好が生化学に深入りしたのであります。

その後、学界は化学の進歩につれて、医学も進歩し、今日の化学療法時代を醸成しましたが、私は今日、自分が辿つた経路を顧みて、決して、無駄な遠廻りではなく、誠に、自己開発の最善のコースであつたことを痛感し、同時に、その源は、実に高校時代の鈴木先生の賜だと、常に感銘いたしてをります。誠に、分水嶺での降雨の一步の差は、他日、太平洋と日本海との大きな差を生ずる様に、指導者の示唆の重大なのを、熟々考えるのであります。

私は大正二年の秋、伯林で、先生のお宿に何度か伺つたり、郊外の散歩にも

お供いたしました。それは、ハーバープロセスの特許買入れに、御渡欧の時でありました。私はその翌年の春、カイゼルウイルヘルム研究所の実験治療化学部へ入りましたが、ハーバー博士の研究室は近くだし、そこには田丸節郎さんもをられたので、お訪ねした際、デモンストレーション用の、空中窒素固定器機を指示され、劃期的の業績に驚嘆しましたが、その時は既に、鈴木先生が先鞭をつけて特許を買収されたのでありました。誠に、先生は、唯の学究ではあられず、常に広い視野で学界をへいげいされ、日本の為に、非常な利益を獲得されたので、その御見識には、唯々敬服いたしましたのであります。

—その後は御無沙汰申上げ、折々友人から御安否を伺う位でしたが、昭和二十八年には、脳溢血と承り、久し振りで御目にかかりました。拝見すると、極めて軽度であられたので、大いに安心いたしました。

その翌年、同窓遠藤君がお供で、熱海の茅屋に御光来を仰ぎ、平塚の永野君

と三人して、先生御恢復の祝盃を挙げました。実に二高卒業後五十余年で、東大に來た二十名が大かたは故人となり、生き残つた三人と先生との会合で、誠に感慨無量でありました。

その後は、折々お便りを戴きましたが、先生は中々合理的な御養生で、流石に先生だと、窃に敬服いたしてをりました。勿論、これは環境にお恵まれになつた為でもあられますが、兎に角、脳溢血の方が、九十一才の長寿を得られたことは、誠に稀有な例であります。

先生が、各方面に播かれた沢山の種子は、今後、次ぎ次ぎに芽生えて、鈴木宗ともいうべき、先生の御精神は、益々繁茂することでしょう。私は、名教自然の幅を拝して、先生の無限の寿を祝福し、且つ宏大な師恩を感謝するものがあります。



墓参に見えられた山川一郎氏（昭和36年6月）

## 鈴木達治先生の思い出

三宅驥一

鈴木達治先生は、京都同志社のハリス理科学校の第一回の卒業生として、明治二十六年の六月に卒業された。初めは同志社の普通学校（中学より多少程度が高い）に在学して居られたが、米国の富豪ハリス氏が金十萬ドルを寄附して、明治二十三年に理科学校が創立せられたので、同年九月に最初に入學された。同校は本科を大学部と称し、主に化学を専攻させた。別に中等程度の薬学科と陶磁器科があつた。先生は同大学部卒業後、熊本第五高等学校の化学の助手に就任せられた。

明治三十年の九月に当時の東京帝国大学の化学科に入学された。それも高等学校全科の試験を受けて本科に入学されたのである。

私は明治二十九年大学入学当時は、本郷元町に下宿して居たが、翌年郷里の父兄から監督を頼まれた数人の青年が上京し、続いて弟等も上京したので、三十年の秋頃小石川の伝通院の近くの上富坂町に一軒家を借り、老婢を雇い、五人で共同生活することとなつた。其の際鈴木先生が同居を申込みましたので、その家で一番立派な床間付の六畳の室を提供した。此処で二年近くも我々と同居せられた。三十二年の夏頃、ご令弟の棟一氏が東大の法科に入学するため上京されたので、一カ月位同居されたようである。其の後間もなく一緒に他へ転居せられた。

鈴木先生は明治三十三年の七月に東大の化学科を卒業せられたが、後に東京高等工業学校の教授に就任された。明治四十一年から三年間ドイツに留学せら

れた。四十四年帰朝後も引続き高等工業の教授をして居られたが、大正九年の一月に横浜高等工業学校が設立せられたので、初代校長に就任された。先生はこの学校で特別の教育法を實行された。その内で有名なのは無試験制度である。学力検定も進級の試験も一さい行わず、従つて席次もなかつた。学生は試験勉強をする必要はなかつたが、却て自発的によく勉強して、実力がついたとの事であつた。先生の校長時代は思う存分手腕をふるつて、最も得意の時であつたかと思ふのである。

先生は同志社の先輩友人の中で、私が最も尊敬する一人である。先年同志社で海老名総長の退任後、適當の後任者なく、困つていた時、私は先生を推薦した。先生も多少意が動いたとみえて、同志社の様子を見に行かれたようであるが、終に実現しなかつたのは遺憾であつた。同志社の大先輩徳富蘇峰翁は、先生を同志社校友中の一大人物として、尊敬して居られた。

# 先生の教育の要諦

大塚節治

鈴木達治先生は明治二十六年同志社理科学校大学の御卒業であります。それは私の六才のときのことでありますから、先生と私とはかなり年齢の隔りがあります。それに先生は官学に奉職され、私は私学に勤め、先生は東京横浜にお住いになり、私は京都に住い、同門の大先輩として仰ぐ以外には直接に御交誼に浴する機会はなかつたのであります。

もとより、先生のことについては三宅驥一博士その他の先輩からお噂をきき、先生が教育家として傑出した偉い方であることはよく承知していました。嘗

て、原田総長か或は海老名総長の退任後、同志社が後任者を得るに困つていたとき、是非先生をと云うので三宅博士たちが奔走され、先生も一度同志社の様子を見に来られたことがあります。しかし先生はお受けにならなかつたのでそのことは実現しませんでした。それが原田総長の後とすれば大正八年であり、海老名総長の後であれば、昭和四年となりますが、何れであつたか、私の記憶がはつきりいたしません。

ところで昭和二七年か、二八年に同志社に御越しになり、大学生のためにお講話をねがつたことがあります。そのときは先生年来の御主張である三無主義についてお話しになりました。三無主義と云うのは無試験、無採点、無賞罰のことです。先生は横浜高等工業学校でこれを実施され非常な好結果を収められ、名校長のほまれを得られたことは周知のことです。

先生の考によると教育の要諦は学生を訓練したり、躰けをしたりすることで

はなく、学生の自覚を促すことにあるのです。学生自身の自覚がないときは、外から印象したり、注ぎ込むことはできないのです。これに反し、自覚を生ぜしめるときは、ほつておいても自分で治め、自分で工夫し、創造するに至ると云うのです。故に教育の要諦は自覚を促すにあるわけです。

私共の大学のような大量教育の場合三無主義は効果をあげ難いと思いますが、学生の自覚を促すことに重点を置くことは最も適当なことと考え、大いに啓発と激励を受けた次第であります。

殊に先生が同志社校内の風景を御覧になり、赤橙黄緑と種々雑多な言論や主張が学生の掲示板にはり出されている有様を自由自治の精神の汪溢と感ぜられた如く、おほめ下さつたのには聊か内心苦笑いたした次第であります。

併し自由主義ではなく放任主義であると屢非難を蒙ります同志社学園の空気に対して、斯様なお言葉を頂いたことは私には大きな鞭撻となり奨励となりま

した。矢張、先生は非凡な教育家であられたと敬服いたす次第であります。

(同志社大学総長)



昭和27年11月12日

田畑先生と京都無隣庵にて

## 鈴木達治先生の追憶

田 畑 忍

私は、学生時代に、鈴木達治先生の風貌と警咳に接した。それは、横浜高等工業学校の校長で、働き盛りであつた先生が、同志社に来校されて、講演をされたときである。私は、このときに始めて先生の無処罰主義、無賞主義、無試験主義なる教育の実践と原理とを知つて、大いに驚きかつ啓発されたものである。当時先生は、同志社の総長となるべき人だといふ噂が流れていた。しかし先生は、同志社に来て見て、総長になることを回避されたようである。

かくして同志社では、原田社長・中村臨時社長のあとに、海老名総長の実現

となり、次いで大工原総長、湯浅総長、牧野総長となり、また再び湯浅総長となり、そして現在大塚総長の時代が長くつづいているのである。ところで、戦後、牧野総長の下で、私が学長に就任したとき、第一に思い出したのは、鈴木達治先生であつた。当時、戦争直後虚脱状態になつていた学生のいわゆる「無能教授排斥運動」が、嵐のように日本中に流行し、その犠牲となつた教授は相当数にのぼつた。同志社大学も、その例外でなく、十数人の被害者を数えるにいたつた。そのため遂にやめてしまつた先輩同僚もあつた。そのようなときに、私は、学長に任命されたのである。昭和二十一年四月のことである。

私は、就任と同時に、先づ学生のこの運動を止めさせた。私は学生諸君に、「諸君は、教授を無能力だと大きな顔をして言う資格があるか」と問い、また「たとへ諸君が大いに有能であつても、教授排斥をやることを私は好まない。

それでも、諸君が排斥運動をつづけたいのなら、私の排斥をやつてほしい」と

訴えた。学生諸君は、素直に私の勧告をきいてくれたので、あとは犠牲者を出さないで済むことになった。その代り、私は、学生諸君の攻撃の対象になつてゐる教授の方々に、一年乃至二年休講して研究に専念していただくような措置をとつたが、この措置を怨んだ人もあつた。しかし私は、この方法が新中国の大学で現に今行われていることを、昭和三十四年に招かれて中国を訪れたとき知り、毛沢東さんよりも一年前にそのことを断行した自分を愉快に思つた。

次で、私は、学生に対しては、鈴木先生に倣つて、無処罰主義を宣言した。この宣言は学生諸君に歓迎されるとともに、彼等の自覚を促すことにもなり、其の意気は大いに上つた。戦後における同志社大学隆昌の基礎は、かくの如くにして成つた、と言うことができる。しかし私は、鈴木先生の無試験主義に敬服しながらも、ついにこれを実施する勇氣がなく、僅かに推薦入学制度を採用するにとどまつた。昭和二十六年に第二回目の学長に就任したときにも、試験

制度には手をつけなかつた。ただ、鈴木先生に来ていただいて、その教育原理である「名教自然」の講演をお願いできた感銘は、今尚忘れ難い。

と同時に思い出すことは先生の講演をお願いすることについて、妨害運動が行われていたことである。それは無処罰主義の嫌いな某氏が、徳富猪一郎先生に頼み込んで、裏面から鈴木先生の来講を阻止しようとした経緯である。もちろん徳富先生は、それに賛成される筈はない。ただその事実を知らされた鈴木先生に対して、更に直かに止め役某氏が派遣されるに及んで、鈴木先生は義憤を感じ、却つて来講の決意を新たにしたり、と私に告げられたのであつた。さきに肥満されていた先生は今度は大変に痩せてをられて意外に思つた。御令息の鈴木博人氏を伴つて来学された先生に、その御滞洛二日間を私は親しく接することができ、先生の教育精神と教育度胸と教育のこゝつの伝授をつぶさに受けた。その御高説の中に、自由主義教育者の面目が躍如として私に迫つてくる思い

がした。そして私の考え方や教育方針の中に、先生とその師新島先生の中に通じるところがあることを、先生に知つていただくこともできて、私は勇気づけられたのであつた。昭和二十七年十一月十二日、先生を案内して南禅寺の無隣の庭園を鑑賞したことも楽しい思い出である。

先生は、この講演旅行から帰られてのち、「名教自然」と書いた書を送つて下さつた。これを、私は早速、横額にして、今も先生の高風を慕いつづけてゐるのである。同志社で書いていただいた他の一枚も、同じく額にして、これは一友人に贈つた。先生の無処罰主義・無試験主義の教育精神は、今でこそこれに共鳴する者が少数ではあつても、必ず将来の教育を支配するにいたるのであることを信じて疑はない。先生の御冥福と、御遺族の御平安とを祈りつつ、この追憶のペンを擱くことにする。

# 名教自然の鈴木先生

石 橋 湛 山

私は鈴木達治先生の経歴について詳しいことは知りません。従つて以下述べるところに、誤りが無いとはかぎりません。あらかじめ御了承を願います。

私の記憶するところでは、はじめ京都の同志社にそのころ附設せられていた理科学校を卒業した後、東京帝国大学に入学して応用化学を修めた人である。

同大学を卒業後先生は明治大正時代有名であつた東京蔵前の東京高等工業学校の教授として就職し、これまた当時有名であつた手島精一校長のもとに応用化学科長として永く教鞭をとられた。同志社に学ばれたことと手島校長のもとに

働かれたことは、先生に大いなる感化を及ぼし、先生一生の事業に大いなる影響を与へたと思はれる。たとへば先生が横浜に於いて徹底せる自由主義の教育を行い、或は工業の補習教育に重きを置いた如きは、すなわちその感化の現れであつた。

大正のはじめ文部省が第一次世界戦争の教訓により、全国に多くの高等工業学校を新設する必要を感じ、その一つを横浜市に置くことに決するや、これの創立事務を東京高等工業学校の教授であつた先生に托した。そして横浜高等工業が大正九年に開校するやその初代校長として任命された。先生はその横浜高等工業学校に於いて先生の理想に基き、無試験無採点無賞罰のいわゆる三無主義を方針とし、また毎時間学生の出欠をとることも廃止し、図書館も学生の自由に入出することを許し、図書の出し入れを全く学生の自主にまかせた。

後にこれらの心持を名教自然の四文字に現し校庭の碑に刻まれた。しかも官

立学校を校長の勝手の主義主張によつて経営するなどといふことは、当時としては容易に許されざる処なるを知る先生は、先手を打つにしかずと開校式の当日文部大臣以下文部省の高官、民間の有力者列席の面前にて堂々三無主義を説き、それを将来の本校の主義とするといふことを宣言した。先生曰く文部大臣以下だれも自分の宣言に対して異議を称へざりしことは、即ち自分の説くところに同感を表したものである。しからば横浜高等工業の三無主義は文部省公認の主義であると。随分人を食つたやり方であるが、先生には時々かような風があつた。

先生は普通の意味で教育者といふにはスケールすこぶる大きな人柄であつた。学校の校長でありながら、四六時中、学校に閉じ込められてをるが如き人でなく、毎日の生活は半ばは世間のクラブや自分が興した学校以外の事業のために費した。その結果として日本に始めてハーバー法による空中窒素固定事業

を輸入したのは先生である。人絹事業、甜菜糖事業等先生の力を尽した事業は数へきれない。

昭和十年横浜高等工業学校々長在職十五年に及び、年令もたまたま六十五才に達したのを機会に一切の公職を辞して後横浜郊外に引退し、いわゆる晴耕雨読の生活をつづけ、九十二才に及ぶ長寿を保たれた。しかし血の気の多い先生の習性は引退したと云いながら容易におとろえず、例へば戦時中軍部の口ばかりで実質のともなわず、敗戦の色濃きに憤慨し、必勝懇談会を組織し、老軀をひつさげて数百回の講演をして廻られた。こういう一面が先生にはあつた。

終戦の際の総理官邸襲撃事件に横浜高工の学生が数名含まれていたと伝えられたのはこの懇談会に属する学生であつたと思ふ。此は先生の全然あづかり知らぬ事で一部指導者の誤つた処置によるもので、これには先生も閉口した様子であつたが、先生の時局に対する深刻なる言説は若き青年をそれほど動かす力

があつたとも云える。

まだ先生については云い足りない点が多いが、余りに長くなるので一先づ筆をおく。

(元首相)

## 煙洲先生のこと

半井清

煙洲先生のことを書こうと筆を取ると煙草を指にはさんで大黒さんの様に、ここにこしている顔が浮んで来ます、之が先生の機嫌のいい得意の表情です。

私は先生とは二十年以上のつき合ひで、最初に私が神奈川県知事の時かと思われます。当時は支那事變が始まり、世の中が戦時態勢になつて居たのです。先生が中心となつて横浜工業懇話会と云う様な会合を月一回、記念会館に開いて横浜経済界の指導的な位置に立つて居られました、同時に高工卒業生を中心とした壮青年の指導者でもありました。

教育のことに就ては相変らず熱心で、私に對して自分は高工の校長をやつて居た時も高工の設備と教授陣を活用して、県立、市立工業学校教育にも力を入れて居るので、県に於ても自分の此の氣持を飲み込んで協力して貰いたい、それが地方の工業教育の爲めに必要であることを力説せられた。興に乗つたときは、大に名教自然の講釈を聞かされた。

敗戦後、誰しも同様ではあるが特に先生の場合、何もかも氣が乗らないと云う様子で静かに筆を執つて居られたが、会つて話が時局問題にふれると声を上げまして日本人の意氣地なさを嘆いて居られた。

横浜の指導者としてあのにこやかな笑顔の中で、余人の言へないことをずばりと言ひ切る先生には、何時までも元氣でいて貰いたかつたとは友人、後輩の率直な感懐です。

(横浜市長)

## 玉川堂の慈父

玉川 覺平

先生には昭和三年初夏の頃でせうか、新潟県庁に時の三松新潟県知事を訪問せられし折、燕町の玉川堂に行つて見ては如何かとのことで御見えになつたのが御縁の始りであります。

後で知つたことでしたが、関東大震災の後で何か地方で横浜に適當した産業はないかと、物色中であられたとのことでした、工場を御覧になつた後、サムライ商会に見せてみるとのこと、二、三点御持ち帰りになられたが、其の御様子が非常に御熱心で、常の客とは全く相違した所があつたのは無理からんこ

とでした。それから色々と曲折を経て先生の熱意と誠意に動かされ、流石大事取りの父も意を決して横浜へ工員を送つたのは、昭和五年でした。始めは随分心配して参つたのですが、先生の御言葉通りで工場も自費をもつて新設して下され、補助金も御世話して貰い、三年間で七千円程でした。

昭和五年頃は非常の不景気でしたが、製品の斡旋迄御引受け下されて、本工場に在庫してあつた品迄出て終ふと言ふ位で、不景気の打開も出来たのであります。玉川堂後援会も出来、大西市長始め、原三溪先生等市の有力者の御後援を得まして名声も日々に上り、当時市の名産であつた真葛焼と共に、内外人の珍重する所となり、三越、和光等、一流商店と取引出来たのも其の頃でした。不幸にして支那事變の勃発に会ひ銅の使用制限やら、工員の召集等により、遂に昭和十五年の秋、工場閉鎖の止むなきに至つた次第であります。

顧りみまするに、約十年間の慈父の如き偉大なる愛情を以て御世話下さいま

したことは今日も忘れることの出来ない所で、玉川堂の今日あるも先生の御蔭によるものと感謝に堪えない次第であります。尽しませんが、一言思い出の一端と致します。(昭和三十七年六月三十日)

(玉川堂五代当主)

## 煙洲先生を憶ふ

富 山 保

明治四十年頃かと記憶する。今の東京工業大学の前身である東京高等工業学校の教授片山正夫博士がドイツ留学中近く開校を予定された東北帝国大学に転任が内定せられ、その後任として煙洲先生が広島高師から東京高工に転任せられた。直にドイツに留学せられ同四十二年頃帰朝せられた後、同校応用化学科及び電気化学科を担当せられ、主として有機化学関係の講義を受持たれた。その名講義は当時学生間に非常なる好評を博せられ、広く謳われたものであつた。後年元満鉄中央試験所長であつた栗原鑑司博士から直接聴いたことであるが、

同博士が仙台の第二高等学校在学中先生の有機化学の講義を受けたが、高等学校、大学を通じて、是以上の名講義に接したことがなくその印象は今尚ほ脳裡に刻まれ、生々發展するの思いがあると、深く感歎しておられた。

当時の蔵前、東京高工の校長は、我国高等工業教育の鼻祖として仰がれ名声の高かつた手島精一先生であつたが、吾々学生がその私邸を御訪ねした折りに、全校数多い教授の内で学校教育、学校行政の面に於て鈴木教授は断然頭角を現わしてその右に出づるものなしと、推賞せられたお話があつた。横浜高工開設に当りて、その学校長として大きな期待を以つて、煙洲先生を強く推薦せられたお一人であつたと想像せられる。煙洲先生も又手島先生の人格、識見、手腕に傾倒せられておられたことを、後年屢々お話があつた。学校教育主義の精神に於ては両先生お互に一脈相通づるものがあられたのではないかと憶測される。

先生が蔵前教授御在任当時、屢々午食後の休憩時に多数学生と共に、庭球をせられたが、コートに立たられた際必ず正しい姿勢に礼をせられて後、競技に入られ、吾々学生は無言の裡に尊いスポーツ精神の教訓を受けた思いをなした。

私は片山正夫先生の御推薦によりて、煙洲先生に迎られて横浜に赴任したのは大正五年春で、それ以来、先生御他界に至る迄四十五年の永きに亘りて、その膝下に親しく御誘導を受け、親にも勝る鴻恩を受けたるもので、想ひ出は数限りなく且深いものがある。此間に於て先生を中心とする出来事の重なるものは、先生御自身の御著述中に精しく、記され、又他の方々の記録にも物さされておるので、此に省略するが、その内に自身にとり印象の深かつた事項の二三を摘記することとする。

大正五年頃は第一次歐洲大戦争の正に酣なる時で、ドイツが多数列強国の包围中に在りながら、よく頑強に抵抗対戦を続行し得つつあるは、その一つの理

由として、爆薬及び食料自給の根源である窒素源がハーバーボッシュ法による空气中窒素固定工業の工業化確立に成功したるためと言われ、英、米、仏、及日本等に於て此方法の研究大童となつておつた。先生は既に、此事あること予見せられ、大正二、三年のころ、横浜の資本家有力者を説かれ、窒素工業の設立計画を以つて、自から渡欧せられ、仏に於ては窒化アルミニウムのクータニ―法、独に於ては当時初めて工業化成功を伝えられた、アンモニア合成法につき、その発明者たるハーバー博士及びその工業化実施のバヂシユ、アニリンソ―ダ会社に接近せられ、我国への同法導入につき或る程度の確約を得られた。

然るに、間も無く大戦勃発して、惜しくもその交渉中断の止む無きに至つた。私は大戦の末期大正七年渡欧し、休戦直後入独して、先生の戦前御交渉の継続を策して奔走したが、迂余曲折の結果、本問題につき、横浜資本団が三井、三菱、住友等と提携する機縁となつた。日本に於いて、アンモニア合成法工業化

に最も早く着眼せられたのは、実に煙洲先生であつた。その当時の先生の御活躍は獅子奮迅の勢とも云ふべきものであつた。蔵前に於ける工業教育に献身されると共に校外にあつては、専ら横浜中心に各種工業の發展及び新規計画に尽瘁せられた。横浜の三巨頭であられた三溪原富太郎翁、中村房次郎翁、井坂孝翁（御三方共横浜高工設立後、学校商議員として大きな後援を寄せられた）その他の有力者は先生の良き理解者であられ、積極的御協力と先生の推進力に依り数多くの新規事業が設立された。例えば日本カーボン、大和鉛筆（現在の三菱鉛筆の前身の一つ）朝日スレート（現在の朝日石綿工業）等の諸会社が挙げられる。是等は何れも現在夫々の方面に於て第一流の生産者として社運隆々我が産業界に寄与しておるは著名の事実である。又既存の会社であつた松尾鋳業、或は東洋麻糸紡績（現在の東洋繊維）等の發展、充実に努められたる等、産業方面への先生の尽されたる御功績は実に大きなものがあつた。

先生は夙に工業の海外発展に意を注がれ、歳前御在職当時大正五、六年頃蒙古の天然曹達を身を以つて親しく踏査され、その紀行文と開発に就ての所論につき工業化学会誌に発表せられ、学者、事業家の注目を集められた。又横浜高工に御就任後、直ちに大陸会を設けられ学徒の将来海外に雄飛すべきを鼓舞激励せられた。大正末期の頃、文部省主催の全国、大学、専門学校学生の支那大陸視察旅行の挙ありたる時に、進んでその団長を引受けられ、長途の旅行に、若い学生と苦難を共にせられ、実際に就ての指導に当られた。先生の影響を受け、その際の他校学生中からも後年海外進出し成功を収めたものもあつた。

大正九年横浜高等工業学校開設に当り選ばれてその校長に就任せられ、多年抱懷せられた教育主義を実施に移され、一生の仕事として全力を傾注せられ、御在任満十五ヶ年間に最も特色に秀でたる、学風を築き上げられ、その成果は燦として永えに輝けることは、衆知の通りで爰に縷々述べるを要しない。

過日旧官立工業専門学校長の会合があり、その節老大家の一人が、当時横浜の学校だけは全く別格優位の存在であつたと、述懐されておつた。先生の蒔かれた種子は生々発展して、横浜国立大学工学部となり、新制大学中の首位として認められ、近く大学院設置の氣運に達したることは真に故あることである。

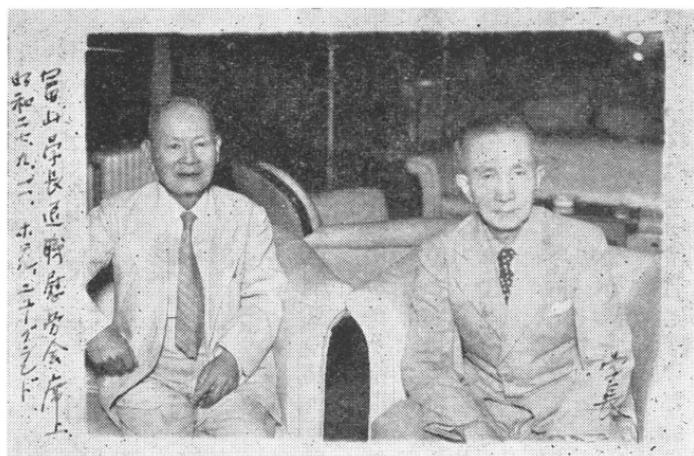
昭和十年二月、御就任の月日を同うして滿十五年を以つて学校長御勇退の声明をせられ、内外周囲の強い御引留を排せられて実行せられた。私はその後任に推され、再三の固辞許されず、誤つてその後を継がざるを得なかつた。

凡庸にして、先生の偉功を損すること甚しく、御期待に反したことを痛感、今尚慚愧に堪えないことである。御辞任後先生の偉功を永く記念する事業の一つとして胸像建立の議もあつたが、「後世学徒が何人の像なりやと推問するもあべく、又徒に鳥の糞台となるも好しからず、寧ろ単なる碑を扱ふ」との先生の御希望があつた。卒業生黒沢豊氏の斡旋により茨城県太田より、水戸弘道館

記碑に優る、大理石碑としては日本一大なる石材を得、御信頼深かつた教授中村順平氏の設計により、先生の雄渾なる御揮毫を刻したる名教自然碑が建設せられた。厳然として校門に聳え、永えに仰がれて、学徒並びに万人に薰化を及ぼすことになつた。

昭和十一年此の記念碑除幕式に於ける徳富蘇峰翁の式辞中、「鈴木先生は他人が右に行くと言ふ時に左に行く人ではないが、自ら理想を樹て、それを実現するために右に行く人である」と言われた。先生の一面を表わす妙句として今尚記憶する処である。

私は学校就任の直後、六ツ川丘先生御宅の隣りに茅屋を建てて住居し、常住座臥先生の教えを受けることにしたが、その折、あの長い坂道の往来には辟易することを愚痴申上げたる処、人が五分間で昇る処を四分間にて為さんとするから疲れるので、それを六分間かける心組になれば易々たるものであると教え



られた。人生行路に於ける尊い教えとして今尚遵法しておる。

先生は学校御勇退の前年昭和九年に学園に近き西方横浜市公園日野墓地を卜せられ、蘇峰翁揮毫になる墓碑を樹てられ、昭和三十六年八月二十九日九十一才の天寿を全うせられて此に静かに眠られたがその霊は永えに弘陵三学園の洋々たる前途を見守られる事であろう。

(元横浜国大学長)

## 鈴木達治先生

川上刀根五郎

前の官立横浜高工創立の初代校長鈴木達治先生の威容に接したのは、大正九年五月先生の創設にかかる横浜工業懇話会に出席した時からであります。当時先生は五十二三歳位とお見受けしたが、冴えたご頭脳と頑丈なご体軀とをそなえ、日本カーボンの近藤賢二社長とともに、きびきびした司会をなされ、企画は常に適切で当時学界、事業界、政界等から錚々たる先覚知名のお方々を招聘せられ、頗る有益なる講演を聴かせて下さつていつも盛会でありました。当時参加せられた会員諸君には、貴重なる見聞やいろいろの新知識を会得せられた

事を記憶して居らるるでありましょう。

私は学校の関係ではなく、此懇談会がご縁でありまして、其頃東洋麻絲紡績横浜工場に勤務していた関係上、先生には屢々工場にお出でを願ひ、多数の役員員にご講演をしていただいた。先生のお話の筋は、工場の経営にはもつと沢山の科学知識を取入れて進歩を図るべきこと、及び工場マンとしての信念のありかたなどを淳々として説かれ、啓発せらるる所が多であります。其後に至り、幸にも日本カーボンの近藤社長が私の方の社長をも兼ねられるようになった為、一層先生とご親密になり知遇を辱うするに至つて、益々先生の物事に對するご見識が該博適切であり、豪いお方である事がわかつて景慕の念を深くいたしました。

斯様な次第で偉大なる先生の人物月旦など、私共末輩には嗚呼がましい、先生の人となり教育界を始めいろいろの社会に尽されたご功績は、遺著の「煙洲漫

筆」によつて十二分にうかがわれます。私も時折之を繙いて靜に思をこらし無言の誨を感受することを楽しんで居ります。

先生のご生涯中全精神を傾注せられた、以前の横浜高工は立派に大成して今や横浜国立大学工学部となり門内に毅然として聳える「名教自然」の大碑は先生のご信念を其儘顕わし我国有数の学府として声価愈々高い。他方過去数十年に亘り先生のご薫陶を受けられた幾多老壯の各位は、何れも夫々の社会に縦横に活躍せられ、中には既に功成り名遂げられた知名人、又長老の座におさまられたお方も多々おありでございます。

既に幽明境を異にして居られる翁に於かれましても、さぞお好きなシガーを燻らせて会心の笑みをたたえて居られましょう。茲に聊か偉人鈴木達治翁のご功績と遺された大きなご足蹟を偲び、お願え申上げる次第でございます。

(元東洋織維K・K専務取締役)

## 煙洲先生の思い出

石 毛 郁 治

先年日経に寄稿した、私の履歴書の中に、私は先生の思ひ出をこう書いて居ります。

「時の応用化学科の科長は鈴木達治先生でした。自ら煙洲と号する程タバコのお好きな方で、教室以外はタバコを離されなかつたように思ひます。お昼の時などよく学生食堂に現れて、学生と一緒に、ウドンやライスカレーを喰べておられました。そんな席で私達がセガムと先生はよく世間ばなしをして下さいました。それが実に、トツ弁の雄弁とでも申しましょうか、立派な処世訓な

んです。実にうまいものでした。

背のあまり高くない、それでいて随分ふとつた方でしたが、なかなかの運動家でテニスが御上手で私達の仲間の諸星が御相手するのをよく見かけました。

先生は手島学風の後継者を以て自ら任じて居られた程、手島先生に私淑して居られました。其後蔵前を去つて横浜高等工業学校の創立に参加され開校と共に校長に就任するや手島教育の真髓を發揮し無試験、無採点、無賞罰の三無主義を提唱し教育界に大きく活を入られました。其後時代の流れにつれて横浜高工も国立大学に昇格しましたが初代校長はもちろん先生でした。

功成り名をとげて六ツ川のあたりに隠棲されてからも、いまなほ散歩がてら学校に行くのを楽しみにしておられます。中略

震災の後学校が大岡山へ移転し続いて大学昇格運動が起つた頃橋本、鈴木（京）両先生も煙洲先生の後を追つて横浜高工へ移つてしまわれたので私は何だ

か蔵前の伝統が横浜へ移つたような気がしてなりません。下略」

私は学校を出るとすぐ九州の任地に赴き、そこで三十年も居すわつてしまいましたので、お目にかかる機会もなく御無沙汰に過して居りましたが、横浜大学には草間君も居るし、新卒業生が年々入社して参りますので、先生の御左右を知るには事欠きませんでした。多分御勇退後間もなくの頃だつたと記憶しているのですが、先生から「六ッ川夜話」と云ふ本を送つて頂きました。お宅を訪問する学生達にお話になつた話をおまとめになつたものと思ひますが、誠に面白く何度も繰返し拝読して居りましたが残念ながら戦災で失つてしまいました。

終戦後東京に住むようになってからはお目にかかる機会も多くありまして、特に私達のクラス会の時にはいつも御出席下さつて色々面白いお話を伺はせて頂きました。卒業四十周年のクラス会を箱根で催しました時は煙洲先生、鈴木京平先生、橋本先生もまだ御健在の頃で、それに小山のおばさんと云つた顔

ぶれで、私達も生き残りは全部集まつて昔の悪童に返り、昔の失敗談や馬鹿話に花を咲かせ愉快な一日を過したのですが、折柄学校の環境と云つた事が世間の問題にされている其頃でしたから私達の話も自然そつちの方に向いたのですが、私達の学校蔵前と云ふのは名代の花柳界柳橋ととなり合せの、それでも別にドウと云ふ事はなかつたのだから、あまり環境問題を取り上げて騒ぐ必要はないと云ふ様な結論になりましたが、私達の実験室の向ひ側に溝をへだてて柳橋の置屋が並んで居りました。実験室の二階は自然芸者屋の二階と向ひ合せです。

私達の学校は夏でも冬でも四時引けです、其頃になるとお風呂帰りのおきらい所が出の仕度にかかるんです。夏ともなりますと障子をあげつばなしでモロはだぬいでのお化粧、之がすむと箱屋が来て着付ヌリ上げた芸者さんをスツパダカにしての衣替です。御本人達は鏡とニラメツコの最中ですから向ひの窓の中にこんな悪童共の目が光つているとは御存じない。一ツの窓に四ツも五ツも

の美形、然も一つや二つの窓ではなしにどの窓もどの窓もそうなんですから、見まいとしても自然目に飛び込んでくる。放課後のいつときは私達の実験室は他の科の連中迄見物に来てにぎあつたものだ。と大いに博識な所を披露して一座の芸者連中によたつて居ると、煙洲先生が口をはさんで、実は僕達もそれを見に行きたかつたんだがネ。と云つたので大笑になりました。

東京へ御出での度に私の事務所へ御立寄りになつて一休みして御帰りになるのが常でした。例の長い竹の杖についてヒョッコリ現れます。そんな或る日、こんな話をして下さいました。蔵前が大岡山に移つてから二十何年かたつた時でせう。

先達て東京工大の記念祭に招かれてネ、久し振りに大岡山に行つて見たんだがマルでよその学校へ行つた様で、アシコにはもう蔵前のクの字もないネ、手島先生の像の前に立つたら、心なしか先生の目に涙が光つた様だつたよ。

或る日私は蔵前の元学校跡の変遷についてお話した事があります。是非行つて見たいとおつしやるので一日御案内しました。

蔵前橋の上から見た所だと昔学校のあつた位置が大体判ります。昔は電車通りの蔵前橋の下を流れる川に添つて学校への道が通じて居て、今蔵前警察の横を入つて正門はどの辺か、正門の前で川は右に曲つて花柳界につき突り左に流れて墨田川に入る。正門前の対岸は東京の下肥の集参地で肥取舟が此川を出入りしたものです。

このあたりは川は埋立てられて道路となり両側にはオモチヤ問屋の倉庫などが並んで昔の面影は更になく、学校の西隅、昔応用化学の階段教室のあつたあたりに神社が祭られている。何と云ふ社か知りませんが、其境内に「蔵前学園跡」と云ふ碑が一基、誰が建てたかわからないが、先生此碑の前に立つて誠に感無量と言つたお顔で中々立ち去りがたい御様子でした。

今此碑の前には社務所か何か建物が出来て碑は此家の裏にかくれてしまつて通りすがりの方には一寸気が付かない存在になつてしまいました。

横浜大学工学部の玄関前にそびえ立つ「名教自然」の大碑、これは先生の教育に対する理念だと思ひます。文字は先生の直筆とうかがいました。先生は書に於ても一家をなして居られまして私も度々おねだりして居ります。

### 名 教 自 然

之は郷里の中学校の講堂に保管させて居ります。

### 質勝文則野 文勝質則史

### 文質彬々 然後君子 煙洲八十二叟

何の時に頂いたか思ひ出せませんが家宝としてしまつてあります。

先生は御出下さる度に長生きしろよとおつしやいまして、私に対しての長生の秘訣は週末休暇を持つ事だとおすゝめ下さいました。

忙埋初知閑気味

昭和卅一年初冬

煙洲老人

事務所にかゝりて毎日ながめて  
居りますが、不肖にして未だに  
先生の教訓にそむいて居りま  
す。

(東洋高圧K・K社長)



## 蔵前時代の先生の思ひ出

平 林 憲 一

新緑の此頃、蔵前時代の印象で直ぐ私の心に浮ぶのは入試風景と記念日の行事である。そして私の先生への思ひ出は入試口頭試問の時から始まる。今でもかの古い赤煉瓦の二階建の応化の建物と、そこはかとなく薬臭の漂ふ薄汚れた室々が脳裏に浮ぶ。其の二階の南に面した、明るいが余り広くない一室が科長先生の御室であつた。其の室で口頭試問を受けたと思ふ。席には科長先生の他、確か故水津嘉一郎先生も居られた様に記憶するが他の方々は全く思ひ出せない。科長であられた鈴木先生は当時四十を少し越したばかりであつたである

うか。小柄ながらなかなかスマートな高工教授と言ふより洗煉された実業家タイプを感じてあつた。私は怖る怖る試問室へ入つたが先生に対座した時はむしろ気軽な雰囲気さえ感じた。先生は持ち前のニコニコした親しみ易い態度で又極く穏やかに「何故此の科を選んだか」と聞かれ私は簡単に「好きだから」と答へた丈けだつたかと思ふ。先生はそうかよしよしと御受け下さつたようだった。後日先生の教育方針が段々分つて見れば、先生は入試などで田舎出の青年にいいわるな質問をするどころか、入試そのものすら問題にされなかつたので、私の口試の場合の様子も肯ける。

さて九月を待つて愈々入学して私は此の学校の学業に幻滅を感じた。今思ふと田舎出の若僧の思上りであつたが、私は厳めしい碩学大家から毎日むづかしい学をやり切れない程詰めこまれ自分が其に耐へられるかどうか心配して上京した。其の夢に対して何か物足りない感じがして将来への不安さえ覺えたこと

であつた。大手島先生の方針は研究者を養成するのではなく、工業の実践を引き受けられる技能者の養成にあつたと思ふ。左様な教育も確かに筋の通つた方針であつた筈であるのに、未熟の私は誤認した様である。学究よりも実践に重きを置いて技能者を養成する方針の特長を軽視したのは誠に浅慮であつた。しかも日進月歩の学問技術を受入れ実践に移せる能力を有する技能者を僅か三ヶ年の期間に育成するためには、並々ならぬ御苦心を払はれたであらうと想像する。大手島先生の真の後継者を以つて任ぜられた先生は時代の変遷に適應すべく一層の御苦心を遊ばされたものと考へる。明治と大正とでは時代の流れからしても非常な差があつたと思ふが殊に工業界に於ては量質共に格段の斷層的なものがあつた。私の入学したのは第一次世界大戦（大正三年―七年）勃発の大正三年九月で卒業は六年七月であつた。私等は学窓から見るに過ぎなかつたけれども此の大戦が国の内外に及ぼした影響は量り知れない程大きかつたと思ふ。当時

は工業製品の大部分を輸入に依存せざるを得なかつた。其が大戦によつて杜絶して仕舞つたので国を挙げて対策に腐心した。官民こぞつて科学の振興に協力し強力な施策がほどこされた様子を愉快に眺めたことを記憶する。民間は夫々の立場で日毎に工場が企業され経済界は戦争ブームの高潮期を経過した。然し何と言つても後進性の強かつた当時、国内の工業関係の学術経験者は少なく、先生の如き学識者は官民の要望に応へるべく席の温まる暇はなかつたろうと思う。其の御様子はわれわれ生徒にもよく窺はれた。先生は社会的接触面が巾広かつたため尚御多忙であつたかと思われる。私はそんな御様子を拝して、全く小我的な思ひから、先生は多忙すぎてわれわれ生徒のことを忘れられはせぬかを、淋しくも又不満にも思はれた程であつた。

先生は手島先生の教育方針を堅持されつつも、又時代に即応し広く知識を求め、之を實踐に受入れうる素養をわれわれにつけさせるための御配慮から、私

等の入学の年から有機化学の講義にゼームス・ノーリス著プリンシプルス・オブ・オーガニックスケミストリーと言ふ五百頁余の米国版を採用された。講義の第一日目に「卒業後は外国文献が必要であるから其に備へて辛棒して勉強しなさい」と言はれた様に思う。此の講義が一年間行はれた。かの階段教室での思出は色々あるがみな楽しい。私はいの一番に指された様な気がすること、先生の発音が独逸語風で変つていたこと、又田舎者には先生の金のエンゲージ・リングが物珍らしかつたこと、当時学校中で先生丈けかと思はれた金の分厚なネクタイどめ等々何れもほほえましい思ひ出である。

兎角して二年もすぎ三年の卒業少し前、特に希望者に独逸語の手ほどきをして頂いた。御蔭様でレツテル位は独逸語も判るようになって卒業した。

さてあれこれと先生の思ひ出をたぐつて当時の御気持を付度すると、先生もわれわれの学業に物足りぬものをもつて居られ、われわれを社会へ出した時の

御不安も感じて居られたのではないかと思ふ。三年間と言ふ条件で必要なものを身につけさせる為には色々とお苦心があつたことと拝察される。

私達は近く卒業四十五周年のクラス会を企だてて居り、先生が御健在ならば喜んで御臨席願へたであろうに、惜しいかな最早や先生の警咳に接することは出来ない。誠に淋しいことである。今私はただ戦後贈つて頂いた一幅の書を座右にし、教育者として偉大であつた先生の生涯を偲ぶよすがとするほかない。

煙洲先生を偲びて

師に捧ぐものなく老いて菊根わけ

(元旭電化KK専務取締役)

## 先生と私

渾大防 小平

私は大正十二年四月末に向う一ケ年の非常勤講師として商工実習学校に奉職した。

年少時代から下級生の世話をやいたり、物を教えたりすることに興味はあつたが、大体貧乏ではたから偽善を強いられるような気持のする教師というものにはなりたいと思つたことはなかつたが、旧制中学卒業後に雇つた肺患と、事業の失敗で父祖伝来の家産の大部分を失つた父の死後の家政整理などのため、三十すぎでやつと私立大学を卒業したばかりの私に差し当つて出来る仕事とい

ば中学教師位しかなく——というのが、二番目の弟がその前年東京外国語学校フランス文学科入学後間もなく過度の運動が誘発した腹膜炎で病臥し、その日に困らないまでも一家の主の私が定職にもつかないでいては、おちついて寝ているそれもなかるうと、恩師三矢重松博士の推薦で東京府立第一高等女学校に奉職したのだが、その以前から私は将来小説作家で身を立てたいと思つていて国学院大学在学中も昼間の講義は重要な二三の学科のほかはすつぽかし、徹夜で机にかぢりついていたので、教職についてからも勤務に差しつかえない限り創作に耽つていたのだが、不幸次第は十一年七月に死亡し、私は傷心のあまり男女の嫌なく若い人の中に立ち交じる氣持を無くしてしまい、学校へも不義理をして在職八ヶ月で退職した。

私はあと二、三年徒食しているうちに自信のある作品を得て、文壇へデビューしたいと、亡弟が外語に入学と同時に知り合つた上級生の高橋邦太郎君を介

して同人雑誌「現代文学」にも参加し、石川淳、新井紀一、野島辰次の諸君に立交つて勉強する一方、当時白樺の新進として花々しい活動を初めたばかりの里見淳氏の許へ、押しかけ弟子として入門もしていたので、二度と教師になるうなどとは夢にも考えてはいなかつた。

ところが夜間でない執筆出来なくせの私は昼夜あべこべの努力をつづけているうち、目に見えて不健康になつて来たので、せめて一週間二日か三日陽の目を見たいと考え、母校国学院の教務課に相談に出かけて行き、二年先輩で教務主任の位置にいた山崎正之助君のすすめで、山本政人先生に面会し、一ケ年間は必ず勤めて下さいますねと念を押された上、五月五日付で教授囑託に任ずという神奈川県の辞令を受けたが、約一ヶ月近くも私は鈴木先生が学校長であることを知らなかつた。

ある日、用事があつて会議室へ出かけると、年輩の小ぶとりに肥つた小柄な

紳士が、葉巻をくわえて、そこにいる誰彼を相手に愉快そうに談笑しているのを見かけ、山本氏に

「あの方はやはりこちらの先生ですか」とたずね、「ああ、あなたをまだ校長に御紹介していませんでしたね」「え、ではあなたは？」「私は主事です」「主事とおつしやると」といつたとんちんかんのやりとりの末、初めて鈴木先生に引合わされた。

ということは、先もこちらも一年かざりと言つた浅い因縁でおわるつもりだつたからだ。もしあの年九月一日の関東地方大震火災がなかつたら、私には別の人生があつたわけだ。

あの時、自宅の災害の殆ど無かつたのは鈴木先生、山本主事、私の三人だけ、あとの教職員には多少の被害があり、食糧事情の点でも家族を他地方に移す必要に迫られて居り、学校は最上級が四年で、一回の卒業生も出してはず、生徒

の家庭も四散し、県は恐らくこの機会に在校生を県、市立校へ配分して学校を廃止するだろうという風評さえ何処からともなく流れて来た。私は三回卒の商業部の国漢全部を担当していて、この頃はもう生徒への愛情も深まつて来て居り、生徒たちの行方や動静が知りたく、文壇も劇壇も当分再興の目安がないとなつては、猶更じつとしていられなくなり、自分勝手に家庭訪問を思立つた。

前記三人を除いたあとの全職員は家族を軍艦に便乗させて貰つて、もよりの地方へつれ帰り、身軽になつて引返して来て学校の復興に当るといふ学校の方針がうち出されたので、事の序に私は自分一人で全校生の消息を確かめることに決意した。

九月十二、三日頃から東京横浜両駅間に貨物車が一日数回動き出した。私は西品川の自宅から大雨でないかぎり連日罹災前の地図をたよりに焼野つ原を歩き廻つた。

異常な興奮で無我夢中に六十日あまりをすごしたが十一月一日に見るかげもなく荒れた校庭に生徒を召集したところ約半数強が集つて来た。この私の二ヶ月余の働きが結果的にひとかどの功績になつたのは幸だつたといえる。早速山本氏から明年四月以降正教諭として勤務する気持はないかとすすめられた。非常勤ならば当分おいてもらつてもよいということでも爾後二十年に亘る私の囑託奉公が始まつた。三年たつて私は母校国学院大学の講師として現代日本文学史を講義することになつたが、こうして私は商工実習学校と離れられなくなつてしまつた。昭和十八年に先生のたつてのお勧めで横浜高等工業学校の生徒課長に就任しなかつたら、県から退職を求められるまで私は学校をやめはしなかつたろうと思う。もつとも、ほかにもう一つ——その以前七月中に、後年煙洲先生に並々ならぬ知遇を頂くきつかけが出来てはいた。

里見さんの長兄有島武郎氏の有名な事件が起つた。白樺派人道主義文学の巨

樂として文壇内外から敬愛されていた氏の意想外なこの出来事に対する世評はきびしかつた。

私は事件が公に報道される約一ヶ月前、事件の輪郭を里見氏からぢかに聞いて心を痛めていた。有島氏が堂々と法の裁きを受けた上で立派に再起してくれるよう神に念じていたのだ。

実習学校でも職員室での話頭に上つて、ごうごうと非難の言葉が投げつけられた。私は座に堪えられない念いがした。とうとう我慢ができなくなつて思切つて発言した。

私は里見氏との関係から一ヶ月以前に事件の発端の部分を知りて痛心していた。事柄自体は私と雖も殆ど弁護の余地を持たない。しかし、私は諸君の論議の態度については承服出来ない。只今私の知る限りのわずかな事実について見ただけでも、諸君の論議の資料たる三、四種の新聞の報道にはかなりのあや

まりがある。これは報道の性質上避けられないことだ。

ただ我々は教職にある者だ。他人の子弟を預る身分の我々に、他人の運命に係る重大事を論議する際の心構えに誤があつてはならぬはずである。この種の問題の取扱いは慎重の上にも慎重に、謙虚な上にも謙虚な態度で臨まなければならぬ。それが、十分な事実の調査も行われず、多分に錯誤の予想される新聞記事を唯一の根拠にして、軽率な論議を試みるような不まじめな態度は何としたことか。好ましくないことながらも他日、本校生徒に失行のあつた際こんな態度で臨むとしたなら果してどういふ結果を招くか、空恐ろしい思がする。

半月一ト月の後、精しい事実が公開され、改めて論議された結果が今日の結論と大差ないものであるかも知れぬ。多分そうだろうと私も考えはする。只私の言いたいことはその結論の当否も大切だが、それよりも問題に臨む我々の態度の適否が更に大切なのだ。これにいささかの過りがあつてはならない。正す

べきことはあくまでただし、疑うべきはあくまで疑つた上での誤つた判断ならば許されるべき若干の余地はある。

人が人を裁く以上、我々の力に限界のあるのは止むを得ないとして、その出发点ですでに謙虚さを失つていふというのは絶対に許し得ない。大体こんな意味のことを放言した。

そばでこれを聞いて居られた煙洲先生は

「わしも渾大防君の意見とおんなじだ」

と、一言ぼつりと口にされてさりげなく室から出て行かれた。

それから何日かたつて、廊下で先生と偶然出会つたと、

「君、わしは高工でも本校でも無賞罰を教育方針にする気で居るんぢやが、

君はどう思うかね」

と聞かれた。私は私の耳を疑つた。

「本気でそれをおやりになるんですか」

「じようだんや、うそで言えると思うかね」

「失礼しました。われわれにもそれをやらせて下さるんですね」

「そんなら君は賛成ぢやね」

廊下でのこの立話が私の運命に大きく作用したことは事実だ。

大正十三年に私の処女作とも言つていい小説「地熱」が里見さんの推挽で雑誌改造に掲載されることになった。これは当時同僚だった栗原邦志君が在米当時の見聞談を材料にしたものだつた。まだ芥川賞などの制定されない当時の改造と中央公論とは小説家の登竜門でこれに載ればとにかく一人前の作家として通用するのだ。天にも登る気持で私は先生に辞任したい旨を申出た。

「わしは文学のことは知らんが、君は食うに困らんだだけの財産をもつてゐるかね」

「ありません。ただ二年や三年は無収入でも何とかやつて行けます。それから先は原稿料も入つて来ましようから」

「百人一首というものがあるね。いずれも古今の名人ぢやろうが、その人の一生によんだ歌の中のたつた一首が伝つて居るんぢやろ。君の作品も後生に残るものは一つか二つ……絶対食えるというめどがつくまで今まで通りつとめつつてもよからうが……」

「この生徒に悪影響を与えるようなことがあつては……」

「そりヤア居つてもやめてもおんなじことぢやろ」

「第一県がきつとうるさく言いましよう」

半年ばかり前、海音寺潮五郎氏の「風雲」が「サンデー毎日」懸賞小説に当選し、就職先の京都府立某中学校長から退職を迫られたという報道を記憶していたからだつた。

「そんなことはかまわん。言うなら言わせとくまでぢや……」

私は眼の中が熱くなつて黙つて頭を下げた。

ところで、其後三、四年間、無試験、無採点、無賞罰の三無の中で特にこの無賞罰の実行に懷疑的だつた大半の同僚諸君との間に起つたかなりはげしい摩擦に、私は堪えなければならなくなつた。煙洲先生の所謂無賞罰三羽鳥の中でも増田、河辺の両君は穩かな肌合の人たちだつたから両君への風当りはそれほどでもなかつたようだが、弱氣のくせにかんしやく持ちで平気で敵をつくるたちの私には、かなり非難がつよく時にはしみじみつらいなと思うことがあつた。うしろに先生という虎を意識していぱり返つてゐる私にくまれるのも自業自得で当然のことだつたが、若さのあやまちで、かげで随分先生には御迷惑をおかけしていることだろうと今更のように耻かしい思がする。

先生の三無主義がどういふ動機によつて生れたか、迂闊にも私はくわしく伺

つていない。

只、先生が一時京都の同志社工学校に学ばれたこと、曾て官立広島高等師範学校教授の地位につかれたこととの間に関連があると言つてよい。高師を去つて蔵前高工教授になられた事情は伺つた記憶があるから。

私は明治末期に中学を卒えた。その頃は信賞必罰盛行時代で、非行生徒に厳しい罰を加えるのが通例で、まず戒飭——本人父兄が受持教師立会の下に校長から説諭される——次に謹慎、これに三日五日と二種類があり、その上に一週二週三週、一ヶ月二ヶ月三ヶ月、無期という停学、諭示退学、退学、放校といふような段階があつて応接に違がないほどだつたが犯則者の数は一向に減らず、累犯者が幅を利かせるという反対の現象さえしばしば見られた。

某県立師範学校は私の記憶するかぎりで曾ての在籍者で中途退学を命じられた者の手で前後十三回も放火され、中、二回か三回かは表門裏門だけを残し、

全校舎寄宿寮を烏有に帰した事例がある。

「学校つぶれて寄宿舎焼けて校長コレラで死ねばよい」というデカンシヨ節の歌詞はこの間の消息を端的に物語っている。全国的に生徒の同盟休校騒ぎに手を焼かなかつた学校は暁天の星のそのの如くだつた。この時代的背景なしに先生の三無主義は正しく了解されないであろう。

教育は聖職で、凡そ教師たるべき者は人の師表でなければならぬ。この考が極端に歪められ、信賞必罰が、教師生徒間の相互の信頼愛情ぬきで、ただ機械的形式的に濫用された当時の一般教育観、わけても師範学校教育の弊害面に早くから氣のつかれた先生の三無主義は、こうして生れて来たのだと信じる。

迷える一匹の羊の運命をおろそかに考えられないよき羊飼いがどうして残る九十九匹のそれを粗末に考えるだろうか。この間の消息を解しない、いや、敢えて解そうとしない教育者は現在だつて絶無とは言えないのではなからうか。

かなしいことである。

無論三無主義——とりわけ無処罰主義にも半面の弊害はある。生徒を安きにつかせる憂なしとしない。信賞必罰も非行に陥る前に十二分の力を尽くし、なおかつこれに陥つた者にあたたかい救いの手を伸ばして、慢性病患者に対する医師看護婦の長期に亘る療治とおなじ努力を傾けるならば精神病患者変質者にあらざる限り立直り得て、結果に於いて無処罰と一致することに疑いないと信ずる。善良なる者への悪影響、迷惑、学校全体の信用を傷けることがこわい。吾々教師の力には限界がある。正にその通りである。ただこの大義名分を不当に用いて人の子をあやまる者があるなら、その者は必ず地獄の火にあずからねばならないだろう。

先生の持たれた人間的魅力は深く且博い人間愛に根ざしている。そして先生の考は、はるかに時流を擢いて居られた。

その故にこそ敢然と時流に逆われた。

いい意味での「あまのじやく」だった。

先生の識見と実践は画に描いた餅ではなかつた。時流に数十歩数百歩先んじて歩かれた。

地下の先生を再び起して現在の教育についての意見を質すに由ない一ことを私は返すがえす残念に思う。(妄言死罪)

(横浜国大教授)

## 煙洲先生を懐う

竹 内 秀 雄

さみだれのふりのこしてや金色堂

という芭蕉の名句は藤原氏三代の地方的文化の結晶とも見られますが、故煙洲鈴木達治先生の教育スローガン「名教自然」は、正に、大正、昭和二代に亘るわが国自由主義教育の晶化と云えるでしょう。

先生が、大正九年、横浜高等工業学校を創立された当時のわが国情は歐洲第一次大戦の戦勝国として短期の好景氣を享樂した後、忽ちその反動としての世界的恐慌に見舞われ、人心が頓に動揺し始めた頃でした。それから三年後、所

謂天戒ともいふべき大正十二年九月一日の関東大震災のために校舎は灰と化しました。この時、文部省は横浜高工を名古屋に移転するよう命じましたが、先生は断乎、これに反対して焼土に復興を誓われました。この時、地元の人々は勿論、横浜の全市民が如何に感激したことでしょう。この時、已に先生の教育理想である校歌（土井晚翠先生作）の精神が先生の胸中に、そのイメージを描き出していたのではないのでしょうか。

震災後に於ける先生の学校経営は、とりも直さず、横浜の将来の発展が単なる港都ではなく、工業都市として発展すべきであるという復興計画とつながるものがありました。又、先生は、学生に対しては、自主独立の気概を尊び、如何なる困苦にも耐えて再起する不屈の精神を象徴する靈鳥フィニックスの説話を屢々引用なさいました。先生の思想は西洋流の科学的知性の上に、基督者の愛と、更に、老荘の東洋的ミステイシズムと、孔子の倫理観とを兼備していま

した。その点に於て、先生の思想は真に国際主義の觀がありました。

先生が化学者として教壇に起たれる前に、新島襄先生の同志社に学ばれたことは、先生の教育者たるの運命を決定したものと云えましょう。その先生が左翼思想の旺盛だつた当時、宗教を表看板にしている学校に於てですら、左翼運動に参加した連中を危険視して追放していた時に、愛の翼を以て、是を抱擁し、迷える羊を救つたことは正に似非道徳家を愧死せしめる程のものでした。

この慈父のような先生の温容に接して、親しくそのお話を拝聴するために、よく私共は六ッ川の丘まで登つて行つたものであります。あの「入愚亭」という額の掲げられた四阿で、冬には特に有難い、氣持のよい焚火を囲んで、先生のお話をうかがうことは何とも云えぬ楽しみでした。近年「炉辺放談」の如き番組が喜ばれますが、先生の談話は真に啓蒙的でした。先生の座談の妙味は広汎な読書から来るもので、先生は、偉人伝などを好んで読まれ、英国王エドワ

ード七世の伝記などには特に興味を持たれ、ウインストン・チャーチルの世界大戦史などを愛読されておられたようです。チャーチルと云えば、何処かその風貌に先生と相似たる処のあるのも面白いと思います。

先生は、学生に向つて、クラーク博士のように、直接「Boys, be ambitious!」とは叫ばれませんでした。が、端艇部の新艇命名式に、スエズ、パナマ、マジエラン、などという奇抜な名前を披露されて、皆をびつくりさせましたことなど如何に、先生が若い学徒に世界発展の大志を抱けと希望されていたかの証拠です。先生は、歴史の趣味が特に深かつたようですが、日本文化の淵藪である中国の文化に対する敬愛は非常なもので、この点では、当時、横浜高工で学んだ中国学生諸君も先生の高邁なる理想と同文の隣邦に対する愛情とを身近に感じたことでしょう。この大陸との交歓の思想が「大陸会」として発展したことは申す迄もありません。

このような無辺際な大きな愛の灯をかかげて、エンジニアの育成に努められたことは素晴らしい。敗戦後のわが国の教育界に於て、自由主義が穿き違えられて、師弟の關係が乱れ、頓に、下克上の風潮が盛になり、互に、対立的批判に終始していることは恐しい限りであります。

昭和四年、弘陵の学園に、教官の末席をけがし、引続き横浜国大に教鞭をとつて、本年三月末日を以て、無事停年退官することの出来ました不肖私は、偏に、清濁併せ呑む煙洲先生の御蔭を以て、今日あるを得たものです。その御礼を直接、先生に申し述べることの出来ませんでしたことは、私にとつてこの上ない痛恨事でした。退官の翌日、早速日野墓地に亡き先生の御霊に御報告申し上げます。在りし日の先生の御姿を偲びその偉大なる教育理想に、今更ながら深い感銘を覚えるのでした。

昭和三十七年五月五日　五月雨の淋しく降る音を聴きつつ。記す。

## 先生と塩務局の思い出

加藤竹藏

先生とのお近づきは今から六十三年前、私が仙台第二高等学校二部の化学科を、担当せられた菅沼市藏先生の助手として勤めていた頃でした。先生は三部（医科）が開設せられたので、その方の化学科を担当せられていました。当時先生は、御瘦身で御自身でも、二高の三病人中に連座して居ると口にせられては皆を笑はして居られました。それが九十有余年の御長寿を全うせられたのですから、これは誠に御人徳のしからしむるところだと思います。

菅沼先生は明治三十七年、東京第一高等学校に転勤なされ、近藤清次郎先生

が代つて赴任されました。日は瞬く間に過ぎ、私が二高で助手をしてから七年後の春（三十八年）先生は例の態度で私に今度塩専売局が設置されるが、この仕事は半官半商であつて、君には最も適応してゐると思ふがどうかと言はれましたので、いづれ父母と相談の上御返事する旨申し上げたところ「それでは、私から御両親に直接御話しましょう」との事で、数日後父と同道先生を訪問いたしました処、先生から懇々と御話あり父も心よく納得してくれました。

明治三十八年四月十日付で任塩務局技手給八級俸阪出塩務局在勤（大蔵省）の辞令が下つた。初任級は普通十級俸であるが、八級俸とは多分先生の御配慮によつて決められたものと感激しました。

以来八年間此処に勤務しましたが、其仕事が塩田をわらぢがけで歩くので、元来胃が悪かつた私はすつかり丈夫になつて、私も亦此年八十三才の老令を元気に送れる事は、これも亦先生のおかげと感謝してゐる次第です。私が現在地

におちついてからは、御近いので年一回位お訪ねして御高説を伺つたり、御指導をいただいで居りましたが、はからずも御病床につかれ、老妻と共に時折御見舞して一日も早く御全快を祈つて居りましたが、ちよつと御無沙汰して居るすきに御他界され大変残念でした。知人から御訃報を聞いた時は、もう四、五日も過ぎていて、大変申訳なくて何と言ひようもなく慚愧の念に堪えられませんでした。

先生は実に、仁徳秀れ趣味に富まれた近代稀れな教育者であらせられたと追憶の念に涙あらたにいたし居ります。

(東京都大田区田園調布三の四三)

## 煙洲先生の思い出

桜井春雄

煙洲先生の思い出については、私には横浜高工入学前、在学中、卒業后と長い年月の間に数多くある。各方面の人々によつて色々の時代について先生の思い出が語られることであらうから、重複するかも知れないが、私として一番心に残っている一事について書いて見たいと思う。

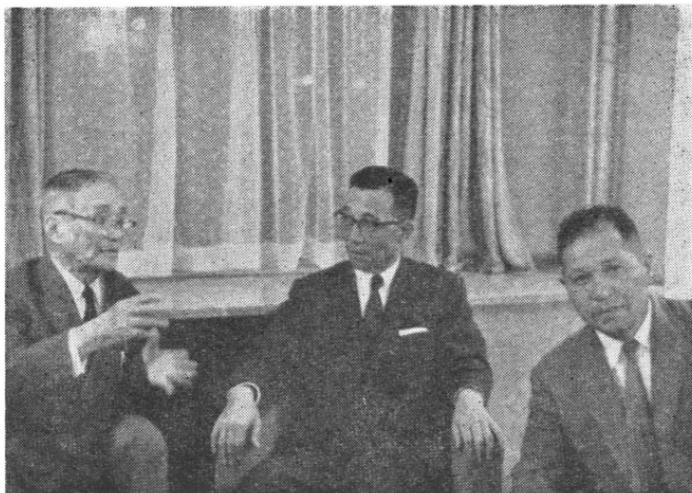
我々第一回卒業生が横浜高工を巣立つて、半年もたたぬ大正十二年九月一日に、かの関東大震災が起り母校も灰燼に帰して終つた。当時私は、三月卒業後直ちに仙台の東北大学付属の金属材料研究所に奉職して、仙台に居住していた。

東京、横浜など全滅との報を見て急ぎ上京した。確か九月十日前後と思うが、今はなき木村愿君（電化一回卒）と二人で横浜に行き先生を御尋ねした。当時先生は根岸に住んでおられたが、幸い御宅は無事で運よく先生も御在宅だったので、御元氣な御顔を拝見することが出来二人は大いに感激した。その時色々先生と御話が出来たのであるが、先生は既に学校の再建計画、名教自然の教育の普及等の腹案をお持ちになり二人に話して下さった。先生が学校を愛し横浜を愛して居られることが非常であることがつくづく感ぜられた。後に文部省より出た学校移転説に強く反対され、あらゆる努力をされて、早急にもとの弘明寺の地に学校を復旧されたのも、この時固い決意をされておられたからである。我々古い卒業生にとつては、創立の地横浜弘明寺に学校が再建されたことは誠に有難いことである。

今にして思えば、現在の横浜国大の隆盛を来たした基礎も、この先生の固い

御決意、撓まない御努力、実行の熱意によるものであることを忘れてはならないと思う。あの震災直後御目にかかった時の、あの大不幸の際にも希望にみち、学校の復旧について語られた先生の御顔は、私には一生忘れられない。

(電化一回 三菱化工機KK)



左より野村氏菅氏小汀氏

煙洲先生の

想ひ出を語る

ニユーグランドホテル会長

野村洋三

煙洲会

菅要助

小汀浩一郎

村松四郎  
(司念)

村松 今日は煙洲先生の古い頃からの想い出を、ニューグランドの野村さんと煙洲会の菅さん、小汀さんと対談して頂き、先生の追悼録に載せたいと思いますので、どうぞよろしく願います。

野村 私も、私の息子の洋一郎も長い間、先生にごひいきになり御世話になった。私は丁度年も同じ位だから話も合う。私がお世話になつたのは、先生が原さんの所へいらした頃からで、その頃富山さんも先生が頼んできて原さんの舎密研究所の仕事をして居られた。

富山さんはあまり口をきかないが、ああいう人格者で煙洲先生もめつたにない人だといわれている。煙洲先生は富山さんより、もつと野生的の所があり、御自分でもその点をよく知つていて、自分の後をやつてもらうには富山さんの様なほんとの人格者でなければならぬというので、富山さんをリユメントした。原さんも、又その子息の善一郎さんも非常に偉い人で、人を見出す建前



野村氏

「富貴自から来る。  
去る時も亦自から去る。  
恰も似たり白雲の心、  
嘗て常住の跡無し」

富は天から託されて、人の為、国の

菅氏

として学問や才能の外に人柄というものを  
見られた。原家では富山さんには学問  
があるとか、物ができるとか、才がまわ  
るとかいうだけでなく、一種とても普通  
の人の真似られぬ偉い所があるという事  
を、一見して見出された。原さんはこ  
ういう詩を創っている。

為に自分が保護の任に当つているのだから、国家有用の事に使はねばあいすまん、ということを始め思つて居た人なので、富山さんを見るや否やその人柄に惚れこんだ。

又、原さんは自分が人類の為、国の為に預つてある金だから、むやみな事に使つては相すまない。日本には日本の偉いものがあるから、これを日本らしく發達させて行くということを考えられて、教育方面だけでなく、青年の養成や美術とか歴史方面にも助力を惜しまれなかつた。

美術院の連中で、岡倉覚三さん始め原さんの恩を受けていない者はない。

まだ煙洲先生が蔵前に居られた頃、先生に来てもらつて、始めは空中窒素の話や蒙古の話等を聞いた。その頃から横浜と先生との関係が始まつた。第一次大戦で空中窒素の話は旨くいかなくつたが、今残つている鉛筆会社でもカーボン会社でも、先生が口をきかれ、原さんがOKして始まつたものだ。

とにかく煙洲先生は他人の真似の出来ない仕事をされた。世渡りは旨いし、話は上手だし、頭も働かし、それでいて自分の欲はなく、学生を育てることをしてくれた。

村松 菅さん、此の辺で学校創立の頃のお話を何か。

菅 私は第二回生です。今でも覚えていいる一番古い記憶は開校式の事で、一回生、二回生で六クラスあつて人数も二百四〇人位で非常に少かつたと思いますが、丁度その頃講堂も木造で余り大きくはないがデザインの良い鈴木先生も氣に入つて居られたのが出来て、そこで当時の中橋文部大臣や枢密院副議長の清浦奎吾さん始め、政府頭官や地元原富太郎さん、中村房次郎さん、県知事、市長始め各名士を来賓として呼ばれ、当時日本の第一級の人物がずらりと並んだ所で我々一回生、二回生を前において、非常に熱意をもつて、通り一ぺんの校長の訓辞とは全然異つた、熱誠あふれる御挨拶をされた。それは実に迫力の

あるもので我々生徒もすつかり魅了された。

当時演壇の両方に金の表装で教育勅語が掛けてあつた。そして「私の教育指針は此の教育勅語の範圍を一步もでるものではありません。」と申され、それから教育主義は無試験、無採点、無賞罰で行くと言われた。

決して型にはまつた教育はしない。各々の特長を生かし、長所をのばすことが私の教育方針だということを述べられた。

その頃は中橋文部大臣の二枚舌問題というのが、毎日の様に新聞で騒がれていた頃で、御本人を前において、清浦伯が新聞等で二枚舌問題等というのとはもつての外だ。と言われたのが今でも記憶に残っている。

此の開校式に於ける教育方針の宣明によつて、我校の三無主義は文部省公認のものと解釈してよろしい、と後日先生も話された。

ともかく此の開校式の時の等一印象で、普通のありふれた校長でないという

ことが僕等には判つたね。

開校式だけでなく、卒業式にも後藤新平さんとか、高橋是清さん、金子堅太郎伯とかの、当時の一級の人物を何時も連れて来られて話を承つた。これは一流の人物に接しさせて、若い学生に人格的に自然の感化を与えたと思つてます。

それから、先生は毎週水曜日の夜は必ず自宅に居られて、他の客は断つて学生の訪問日と決めていた。その夜はよく、狭い書齋に二十人も三十人も大勢が入りこんで、椅子が足りなくて、蜜柑箱等を持つてきてそれに腰かけて夜の十時、十一時迄、まあそれこそ学生は質問したり、難題を持出したりして、それについて先生はいちいち指導されて居られた。ああいうことは他の学校にはないことだと思ひます。そして夜遅く根岸の先生のお宅から、夜風に吹かれて帰る時はとてもいい気持だつた。

村 村 関東大震災の頃のお話を伺いたいのですが。

野 村 あの時八月三〇日の晩に原君が箱根に行くから一緒に行こうというわけで、三十一日に発つて小田原迄汽車で行き、それから車を備つて芦の湖へ出て箱根のホテルで一泊して、翌日原君と僕と女中の三人で茶室でお茶をたてていた。

十一時五十八分の地震の前に二人で話していて、「君は天下の繭や生糸を扱ふ富豪で俺は貧乏人で金も何もないが、君の心の中に俺が住んでいれば、俺が持つていても君が持つていても同じでないか。」「そうだな。」といつた時、ぐらつぐらつと来た。

原君は部屋から外へ放り出されて、大きな岩と岩との間にうずくまり、私は部屋の中で動けなくなつた。後で原君から君は随分勇氣があるなと云はれたが、実際には動けなかつたのだ。横浜へ帰る事にしたが汽車も止るし、何も交

通機関がないので、箱根から二人で歩いて帰つて来たがどこも泊る所もない有様だつた。

藤沢まで歩いて、もと原君の所の女中をしていた人が経営していた宿屋に泊り、翌朝、藤沢の坂を上ると、「貴方達くたびれているだろうから。」と、そこから大八車に乗せてくれた人があつて、原君が前に私が後に乗つてきた。漸く横浜に入つて八幡橋で舟をみると、原君は太つて居るし、もう動けないんだ。そこから舟に乗つて三溪園へ行つた。

村松 菅さん、震災の時はまだ夏休み中で？

菅 学生は丁度夏休みで、出ていなかつた。私は友人と二人で、八月いつぱい鎌倉の円覚寺で坐禅をして、八月の終りに故郷へ帰つたら此方が震災で又すぐ引返して出てきたんです。

横浜に来てみたら何もなくて、処々土蔵が残つていて、焼け残つた立木が少

しあつた位で、桜木町駅に立つと弘明寺迄見えた。勿論学校も焼けちやつて、町も学校もひどいものだった。

あの子の復興に対する決心は凡人じゃ出来ないですよ。

村松 文部省から「学校は名古屋へ移転せよ」との命令が出たが、その時先生は断乎として横浜に留まる。絶対横浜で復興させる、という固い決心で種々奔走されたそうです……

野村 その頃の先生の決意と活動は大変なもので、焼けた灰の中からフェニックスが出なくてはならないと、先生も原さんも私も皆そう思つて、なんとか復興させようと、横浜を一步も出ないで一生懸命働いた。

私の家もサムライ商会の方もすっかり焼けてしまつた。

焼跡にまづ家を建てて、焼残りのトタンをたてて、煙突をこしらえて復興にとりかかつた。煙洲先生にも非常にお世話になつた。

学校の机、テーブル、椅子等総てのものを先生がサムライ商會に注文を出されて、私も本職ではなかつたが、ワラジをはいて、えらい格好で学校へ行つて、注文を承つたりして、皆私が作つて納めさせてもらつた。

菅 全部学校を焼かれた後の復興も大変だつた。而も名古屋へ行けと云うのを聞かないでやるのだからね。

我々は十月頃からは舍密研究所を仮校舎ということ、あそこで富山さんの講義等聴きましたよ。

名古屋で校舎もあるし、学生寮もあるし、皆便宜を図るから来いと云われれば、普通の連中はそつちへなびくのだが、煙洲さんは依然としてこの土地を離れないんだということを学生の前でも演説されたが、その点凡人では及びもつかない考えですよ。

とにかく死んだ人が路上にずっと並んで、橋の所など人間が浮いていたり、

死人が焼けただれて臭くて歩けなかつた。

**野村** 時の横浜市長、渡辺君の所へ行つて、死骸を片付けてやろうと云つたら、死骸を片付ける者は外に居るから、それより生きた死骸を連れてきてくれと云はれた。

生きた死骸とは当時世界大戦後の財界パニックで一時世間から身を隠していた中村房次郎さんの事だ。中村さんと呼んで来たのも僕だし、井坂さんを捜したのも僕だし、皆そういう人を連れてきて、三溪園が残つて居たのでそこに寄つて、横浜復興の第一歩の相談をした。

**村松** 茲に学校復興の陳情書を御参考迄に入れておきます。

### **岡野文部大臣への陳情書**

今回ノ震災ニ依リ横浜市ハ全滅ノ悲運ニ遭ヒタリト雖モ市民ハ從來未聞ノ勢ヲ以テ市勢ノ挽回ニ熱中シ曩ニ市会ハ満場一致横浜市ノ復興ヲ決議シ近クハ官

民合同ノ下ニ横浜復興會ヲ設立シ貿易ニ産業ニ其ノ他各般ノ事項ニ付積極的の活動ヲ開始シ今ヤ挙市一致寢食ヲ忘レテ新都市ノ建設ニ努力セサルハナシ政府亦夙ニ帝都ノ復興ト共ニ当港復興ノ大方針ヲ確立セラレ現ニ總理大臣ヲ始メ当局者ヨリ屢々当市責任者ニ言明セラレタルトコロナリ然ルニ頃日仄聞スル所ニ依レハ横浜高等工業学校ヲ一時他ニ移転シ授業ヲ開始セムトノ議アル由素ヨリ臨時応急策ニ過キスト雖モ斯ノ如キハ熱狂セル市民ヲシテ政府ノ真意ヲ誤解セシメ為ニ極度ノ激昂ヲ招来スルニ到ルヘク国策上極メテ遺憾トスルノミナラス当市復興上一大障害タリ宜シク如上ノ事情御賢察ノ上直ニ応急設備ヲ施シ速ニ授業ヲ開始セラルル様御詮議ヲ仰度上申候也

大正十二年九月二十六日

横浜復興会長 原 富太郎

横浜商業会議所会頭 井 坂 孝

横浜市会議長 平 沼 亮 三

横 浜 市 長 渡 辺 勝 三 郎

文部大臣 岡野敬次郎殿

——煙洲残筆より——

野村 こうして横浜復興や高工復興への先生の激しい情熱が横浜市民の先頭に立つて、志気鼓舞され復興への原動力ともなつて、夫々目覚ましい再興を示した。僕は直接、間接にいつも煙洲先生からインスピレーションを非常に深く受けた。

菅 ああいう時にこそ本当の人間の偉さが出るんですね。

とにかく翌年、三月の卒業式の時はバラックの校舎が出来ていた。

大正十三年卒業の時「お前達の勉強はこれからだ。しかし男として出処進退ということの間違えるな。」とおつしやつて、後日先生が御自分で範を垂れて下さった。僕も似た様なことを東芝がストライキした時、先生の教を体してやりました。とにかく先生は逢う人毎に何かインスピレーションを与えてくれた方でした。

村松 先生が退職された時は小汀さんが学生の頃でしたか？

小汀 二年の時です。二月の二十一日発令だつたと思います。結局前の晩の二十日に新聞に出て判つたわけで、余り突然のことで、我々はびつくりして確か面会日にはなかつたが、皆で先生のお宅に押しかけて話を伺つたわけです。まあ明日、とにかく話をするつていうことで帰つて来ました。

翌日「疾きこと風の如く、静かなること林の如し。」という句を引用されて話をされました。

講堂で先生の別れの言葉を聴いている中に声を出して泣き出す学生もあつた程で、しかも学年末に近かつたので、せめて卒業証書だけは先生の名前でもらいたいという卒業生も多かつた。

野村 我々も「貴方みたいに役に立つ人が、今やめるといふ事はないではないか。」と云つたところ、「あんたは富山さんを知らないんだ。富山さんという人はこんなに立派な人で心配はいらない。」と云われた。

「僕は六十五になつたのでよして、他の事で国の為に尽し、卒業した人の仕事を見てまわつて、その人達に教わつたり教えたり、色々考えあつていく」と云つて、なんといつてもきかない。

先生退官の記念として、原富太郎君も先生に、秘蔵の渡辺華山の墨絵である

老子出関之図に、更に原君の筆で由来記の副軸を添えて贈られた。

村松 当時は夏休中に校長先生から生徒に暑中見舞を出されたとかいう話ですが……

菅 僕ら学生時代は毎夏休みもらつたな。夏休みになると長い手紙が来るんですよ。始めてあれをもらつた時は我々はびつくりしましたよ。校長から手紙がきたと。父兄の中にも礼状を兼ねて感想をよせられたりされた方も多い様です。

村松 こういう点も先程お話しの水曜日の学生の面会日の事等とあわせて、学生の人格とか教養を深める、所謂徳育とか訓育とかに効果があつたんでしようね。

菅 まあ常に学生の事を考えておつた人だね。

先生は又地元を非常に愛する人で、君達金を費うなら横浜で費え、と云われ

た。ですから今でも煙洲会は横浜でやつている。煙洲先生は横浜の發展、強いては日本の發展ということを常に頭に持つていたんですね。

野村　ロータリーが出来てからだと思うから三十年位前でしようか。先生が支那に行つて来た。先生が支那服を着て歸つて来て支那の話をした。それが又至れり尽せりで皆感心した。

先生は種をとるのがうまいので、学校の生徒のみならず、先生のいたる所誰でも、先生の話聞いた者全部がその感化を受けた。

先生のインスピレーションを受けたものは学校以外に非常に沢山おると思う。いいことばかりでなく悪いことも入つていたかも知れないが、とにかく人間が生きていく上に於て、活気をもつてやられた点は、実に類のない教育者であつた。

六十五才で名教自然の後継者を自ら作つて、退かれてからも立派だつた。

菅 退官後も市長に出るとか、実業界に出るとか云われても一切やらなかつた。ああ云う点も偉いと思いますね。

先生に接していると自然に感化を受ける。お説教したり言葉で云うのではなく、自然ににじみでる感化力というものは実に偉大なものですな。

当時から今に至つても無試験、無採点、無賞罰、と云うのを敢然やつてのけるのは全国でも煙洲さんだけしか居なかつた。文部省でも「横浜の鈴木は別だ。」とよく云われたそうですから全く類のない方でした。

野村 僕は煙洲さんの墓にまだ先生が入らん前からよく行つたが、先生のお墓の上に仏様が彫つてある。先生が自分で上げた仏様を拜む心中を察すると次の様な事ではないかと思う。

先生は人間の力には限りがある。科学が偉いといつても科学だけでは世の中はいかんといいことを感じたことがあると思う。僕の想像では鈴木先生はお釈

迦様でもキリスト、或は孔子、老子、或はソクラテスでも私淑してきた人があると思うが、自分がそれに信仰して、これについてきたとはああいう人だから云わないが、併し人間は釈迦もキリストもソクラテスも今の科学者も、實際は地上本来仏であり、又皆同じ人間であるということを口には言わぬが、心に感じていて、自分の墓の上にあの仏様を彫つたのではないかと思う。

先生はどんな事でも科学を応用して、人類の幸福に寄与したい、という事を非常に考えて居られ、それをやれば金が儲かるという事でなく、それをやつて産業を興し發達させ、誰か適当な人がそういう事に携つてくれればよいという方だつた。非常に偉いことだと思う。真剣に誰に頼まれなくても国の為、人類の為になる事を考えて居られた。

東北の甜菜糖にしろ、富山さんがやつて居られたカーバイトにしろ、人絹工業にしろ、其の他なんでも先生の勝れた先見は行くとして可ならざる所なしと

いう気がする。

私達が生糸を扱っている大正の頃既に、生糸が旨くいつている時、それを狭めるといふ事は大変な事だが、将来人造絹糸を研究して発達させねばならないと説かれていた。其後の人絹業界を見て、今更乍ら先生の達見に頭の下る思いがする。

先生が来られなければ興らなかつた事業がいくつもあるし、高等工業だつて出来ず、従つて今の大学というものも出来ていないだろう。ああいう先生に富山さんの様な偉い人が丁度見つけられたというのも余程幸いなことで、煙洲先生一人で出来るものでもなく、富山さん、其の他と相俟つて、日本の将来に必要な工業技術方面の人材を養成され、それらの人材が今何万人居るか知らないが、全国に広がつて産業に活躍貢献したのが、この様に日本が西ドイツと同じ様に産業が発達して、世界に重んぜられて来た所以だと思ふ。

今のソビエトロシアでも色々無理な事を云つたり、東南アジア、満洲、支那等随分いじめられたが、それはおいて、日本はアジアの中で最も勝れた国であると云われる様になり得たということは、先生始め、富山さん達がその種を蒔いたといつてもよい。

菅　とにかく横浜の恩人ですね。

又横浜の原さん始め、中村さん、井坂さん、野村さん、井上さん等のバックが、先生をよく支持された事も先生の徳の一端でないでしょうか。

小汀　菅さんは卒業してから煙洲会までは、先生とお逢いになるチャンスは

……

菅　学校で卒業生の会合がある時にお逢いしたが、定例の会合というのは昭和十四年、川崎の六郷会の有志が先生においで願つて、お話を伺う様になつてからで、これが煙洲会となつて二百回以上になつた。まあ必ず月に一ぺん先生

を中心にして、先生に話題を出してもらおう。又卒業生は卒業生で勝手な質問をしたが、あれは成人教育の大きな役目をしてました。

いつか先生は「自分でも体の調子が悪くても煙洲会の日になるとピンとしちやう。」と云われ、だから「煙洲会は俺の長生の薬だよ。」とおつしやつた。

村松 会の方はずつと菅さんがやつて来られたんですね。

菅 僕は二百回の内、休んだのは一回位で、何の会議があつても行つてしまふので、会社の下の連中も煙洲会とは一体どんな会かと気になるらしい。まあ煙洲会も私が会長というが、実際は幹事に人を得たという事で、初代の幹事は阿部元吾君で、彼は在学中新聞部だつた。二代目は卒業後メキシコへ行つた平田義雄君で、今東京電器の専務をやつてゐる。三代目が小汀さんで一番長いんじゃないかな。やつぱりああいう会は煙洲さんが顔を出してくれることが一つの大きな原動力だが、連絡は幹事がよくなくては駄目ですね、中には幹事の熱意



菅 要助氏

鈴木博人氏

にほだされて出席するものもある。

小汀 菅さんには経済的にもあらゆる点でお世話になつて、随分苦しいこともあつたんですが、努力によつてとにかく切り抜けては、きました。

菅 先生の盆、暮のお礼は葉巻に決まつているんだ。その葉巻がない時は捜すのに骨折つたね。

小汀 ええ、先生の好みは甘い方です、最後の頃は鼻がお悪くて匂は駄目だつたらしいですが、甘みは

おわかりになられた様です。

菅 まあなんとというか、自分の親父  
かおじいさんの様なつもりで、煙洲会  
のメンバーは親しみを持って色々教わ  
つたわけです。

僕なんかも卒業して、会社に就職し  
ても大きな迷いの時等行くとすつきり  
して、「ああ解りました。」と云つて引  
きさがる時が二、三回ありました。そ  
ういう人があるというだけでも幸福で  
したよ。

村松 教訓とかいうものでなく、世



村松

小汀氏

菅氏

間話をしていて自然と解る様に言われるんですね。

小汀 顔を拝見しているだけで、だんだん解決した様な気持になつて帰つてくるんですね。

先生は戦時中、必勝懇談会というのを組織して、戦争に対して随分お骨折になつて、御自分の渾身の努力をやつて居られ、我々も非常に感激してました。

村松 終戦の時の首相官邸襲撃に高工生が入つていて、色々な問題になつたんですね。

菅 先生はあれで随分精神的にまいられたようです。相当なショックがあつたらしいです。特に学生中に受刑者を出したということについて、非常に責任を感じられてね。

刑は五年だつたが二年半で特赦となり、もう皆出た。

先生は此の生徒等にも卒業証書を貰つてやるべく、色々御骨折になられた。

又鈴木貫太郎大将宅へもわざわざ伺われて謝罪されたりした。

とにかく非常に自由主義だと思つくと、非常に国粹主義で、クリスチャンの学校を出てるから案外インターナショナルかと思つたとロータリクラブは嫌いだとか云われたんです。

親から貰つた素質もあつたでしょうが、先生のコースが月並なコースでなかつたという事も影響していると思つう。大学に入るのも普通の人の入り方とは違ふからね。とにかく何というか、オリジナリテイというのか、自分のものはちやんと堅持しておられた、というのは敬服に値しますね。

小汀 手島先生にも相当な感化を受けてるんじゃないですか。

菅 開校式の時に「私は手島先生の一門下生です。」と云われたのを覚えていますよ。手島先生には相当傾倒されていたんですね。

確か蔵前の教え子で、東洋高压の社長をして居られる石毛さんが日本経済新

聞に私の履歴書として書かれた中に「蔵前の手島精神と云うのは鈴木先生について横浜に移つた。」と云われています。

村松 石毛さんが書かれた少し後に先生のお宅に伺ひましてね、先生は弘明寺の理髪店で「先生の事が新聞に出ていますよ」と云われ、貰つてきて読んだ。私も履歴書を書いてみようかと思う。という話を伺ひました。

小汀 私の叔父が日経に居て、煙洲先生の履歴書を書いて戴く事になつたのですが、丁度先生の米寿記念の出版「煙洲残筆」にするから発表しないでほしい。と米寿記念事業会の方から申し入れがあつて、新聞に載せなかつたんですが、一度載せてから本にまとめてもよかつたのではなかつたかと思うんですが……手島先生の教育は徒弟教育というのを重要視していた。商工実習や夜の工專を作つたのも手島先生の方針に従つたのだ。とそう云つておられました。

村松 商工実習や工專も女房役にいい人を選ばれたのも先生の徳の一端で、

それらの方々も始めから先生の三無主義に共鳴していたわけではなかつたが、いつの間にかそういう精神になられたとか……

菅 先生の自然の感化力ですね。

先生は座談もうまかつたが講演も又熱があつて、人を動かす講演が多かつた。普通の教育家が持たないものを持ち合わせて、いい意味での政治性があり、清濁併せ呑む度量があつた。

悪いことをした奴を可愛がつてなんとか直してやろうとされた。中には自殺しかかつたのや、不良になつたのとか、乞食の様になつたのでも、行くと何とか面倒を見て居られた。

村松 何か左傾学生が出た時の措置が非常によくて、関係している先生方も随分心服させる様になつたとか、商工実習でも出たが、何れも無処罰で臨まれ、彼等も後日、夫々立派な人となり社会的要職についている人もあるそうで

す。

それから先生の御病気が悪くなられたのは何時頃からですか。

菅 米寿の年は暑い夏でして、先生は相当弱つて居られ、血圧が高くて煙洲会も四ヶ月位中断しました。それから後お元氣になられ、斎藤式の療法をお勧めして、毎週一度位さしむけたところ、足も軽くなつて先生も喜んで居られました。

小汀 先生が本当に悪くなられたのは三十六年の七月十四、五日頃だと思ふんですが。六月の二十九日に煙洲会をしまして、その次の煙洲会を七月の二十日過ぎにやる予定でしたが、一週間位前に先生のお宅から「延ばしたい。」とお電話があつて、その時私がお伺いしてみましたら、やすんで居られました、あの年は暑かつたです。

村松 野村さんがいらつしやつた時はお亡くなりになる二日前だそうですね

ね。

野村 あの日先生は大分悪い顔色をされていた。僕が行つて先生をみると、僕が来たことが判つたらしいが、もう話も出来ず、僕はいいあんばいに肩をさすり、手をさすり、背中をさする事一時間余り、こんな偉い人がこんなになるかと思つた。

人間というのは決して完全に満足なものはないが、併しあの人はいくとして可ならざるなく、全く偉い人でどんなに褒めても十分値する人だ。

菅 こういう人は仲々出ませんね。他の学校の卒業生も横浜の生徒は羨ましいと云つてゐる。

とにかくよその学校にない校風を持つてゐるんだから、後輩にもそういう空気だけは残したいね。

野村 先生は人物が大きくて、親しみのある面白い人で近代の科学をよく理

解して、それを世の中の実際に供して産業の發展を図り、いわゆる教育家の型にはまらず、どこまでも自分の信念に生きた人だ。

先生も四国の人だが四国は何か偉い人の出る所で、嘗て、ばん溪という偉い和尚があつて、多勢の弟子の中に手癖の悪いのが一人居て、他の弟子達が「彼を追払つてくれ。」と云つたところ、「お前達はこれから何処へ行つても育つが、あの小僧は俺の所において俺が育てなければ育たない。お前達は何処でも好きな所へ行つても良いが、俺はあれを自分のそばにおいて直る迄面倒をみる。」と云つてゐる。

此んな精神の伝統が何か四国にある様な気がする。

科学の面のみならず、それ以上もつと人間の尊いものがあつて、それによつて世道人心を先生は考えていたのではないか。

村松 野村さんから何か私達学校の卒業生に対して贈つて下さる様な御言葉

でもお願いしたいのですが。

野村 私は何もそんな申し上げる程の者ではないのだが、鈴木さん、富山さんという人は、ああいう立派な人であつて、あの人達のキヤラクターとかパーソナリテイとその苦難に対して辛抱してじつとやつて来られたことが、ほんとの人類の目に見えざる宝じやないかと思うんです。

これはもう本当に大地を踏みしめて、誰でもその通りにやつて居ればいつでも悠久に人類の生きていく所以であろうと思ひます。

村松 菅さん、煙洲会の将来について何か……

菅 煙洲会を受継ぐことを主体とした会合があるから、この名を残して御息の博人さんにも出てもらひ、学校の先生にも各科で順番に来てもらつて学校の様子を聞き、又お互同志の商売上の色々な助け合いや連絡も出来るし、煙洲さんの思想を永久につなぐという意味で、一月にあれ位の時間をさくのは十分

値すると思う。

村松 我々も先生の精神をいつも忘れずにやつて行きたいと思ひます。

今日は遅くまでどうも有難う御座居ました。

(昭三七、六、一五 於ニューグランドホテル)

## 校風 徐興

阿部 滋 弘

大正九年、横浜高工が開校した当時の大岡川の堤は、横浜の桜の名所の一つで、その並木は今はアーケードで覆はれている商店街の両側から、もう古木になつて花もあまりつかない工学部の構内にある桜並木にも続き、四月の始め頃は、このあたり一帯が花で覆はれていた。ここは鎌倉街道のはづれで、それから先は家もまばらで、麦畑からは雲雀の上るのも見えた。そこに緑色に塗つた木造二階建の校舎があり、門扉のない広い正門の両側には、石で積んだ太く短い門柱の左右に、小松のある堤が連つていた外、特に柵はどこにもなく、学園の

芝生にも花壇にも「立入禁止」の札は一つもなかつたので、近くの人は子供を連れて構内によく遊びに来た。門を入つた受付には若くて美しい女事務員が三人も居た。当時は銀行でも女事務員が居るのが珍しかつた程なので、受験生は女学校と間違へたと思ひ、門まで戻り門標をたしかめてから、恐る恐る又受付へ行つたと云ふ話がある。教務課には又柳田さんと云う厳格な老婦人が居て、服のボタンが曲つていると、その場で缺で切り落して正しくつけ直してくれた。教官も若くいづれも研究に没頭して居り、学生の事などあまりかまつてくれるようにも見えなかつた。然し「禁止」と云ふ言葉のないこの学園では、自身の判断で行動しなければならぬし、野球の練習に疲れて暗くなつてから戻つて来ても、まだ電燈をつけて、実験をしている教官の姿をみることは、説教されることよりも遙につらかつた。このような鈴木先生を中心とした雰囲気の中に

校風が徐ろに興つた。

(応化一期 横濱国大教授元工学部長)

## どうしても届かぬ煙洲先生

広部俊十郎

煙洲先生についての想い出は、何と言つても、月一度先生を囲んでお話を伺つた「煙洲会」にあるのだが、いざその時々のお話の内容について、何か思い浮べようとしても、まこと不肖の弟子、どうも何一つはつきりとは思ひ出す事も出来ないのは残念だ。

ただ先生のあの物静かなお話し振りと、漢学にも素養深かつた、巾広い人となりを思い浮べるだけなのである。先生には人間のあり方、自分の信念をしつかり持つて決して曲げず、又そう言つた姿勢を氣負つたり、自分をいつはつて、

無理をして取る事の決してなかつた、優れた人間のあり方を、教えていたのだと言う事が出来ようか。その事はさほどはつきりと、口に出してお話になつた事ではないのだが、所謂、「名教自然」そのものが先生の生活態度に表われている気がしてならないのだ。何時だつたか、確か孟子からの引用で話された事だつたと思うが、「優れた君主とはどう言う者か、」と云う間に、孟子は、「最も優れた君主は命令することなくして国が治まつて行くもの、君主が居るか居らぬか判らぬような治め方をするものが良いのだ」と答えた、と話された事があるが、この話の中の君主のように、先生は命令することなく、自分の行いそのものが自然である事に依つて、私達に深い感銘を与えて下さつたと思う。

命令をしないで、事が行はれるようにするのは、私が小さな店を自分で経営して見て、ようやくわかつたのだが、どうして仲々旨く出来る事ではないのである。その点だけでも先生には未だどうしても追いつけない感じがするのだ。

先生の葬儀の日、沢山の弟子が、先生の棺をかついで、あの六ッ川の坂を下つた。その時私も是非先生の棺をかつぐ一人になりたいものと棺に取りついたので、棺は皆に高くかつがれ背の低い私は肩が届かないのだ。これは先生にはどうしても届かない、追いつく事の出来ないしるしのような気がして、悲しく、少年のように口惜しい気持になつたものである。

先生の亡くなられた「煙洲会」も、中心がなくなれば、普通は、消えてなくなつてしまふ処なのだが、却つて、近頃は、会員が昔の倍ぐらゐに増えて先生の精神を糧として、共に話し合う人達の多くなつた事は、先生の優れた御遺徳の賜と感じ、又何よりの先生へのはなむけと思ふ次第である。

(電化一期 広部商店KK社長)

## 私の中に生きている「人間鈴木達治」

石井欣之助

一、発端

私と鈴木先生との関係は大正八年秋頃(?) 受験雑誌に出ていた「新設される横浜高等工業学校」という先生の文章に始まる。私はいわゆる受験勉強というものを殆んどしなかつたので、右の雑誌は弟が持つていたものにはない。その時の先生の文章の内容はあまりハッキリ記憶にないが無試験無賞罰などということは書いてなかつたと思う。しかし兎に角私を引き付けるに十分な魅力のある文章であつたことだけは確かであつた。その当時は私も後年私が実行し

「たような怠けた学生生活をするつもりは毛頭なかつた。

入学試験の時鈴木先生の前に立つて口頭試問を受けたが、今考えると冷汗ものであつた。しかし兎に角横浜高工第一回入学生となつた。そして希望の胸をふくらませ第一回卒業を夢見ていたが、現実はなかなかきびしく幾多の不規則バウンドを経て、私は第二回卒業生となつた。（この間のプロセスを書くとき長くなるし今回のテーマとは外れるので省略する。）

従つて正常のコースを通つた人と多少ちがつた考え方をするような人間になつたようである。これは鈴木先生の教えの受取り方にも表われたと思う。例えば先生が暑中休暇中に帰省中の学生に宛てて出された手紙の中に「諸君健全なる精神は健全なる身体に宿る」ということがあつたのに対し大に反撥を感じたものである。当時胸を少し悪くして静養中であつた私は身体は健康でなくても精神は健全である、又はあり得ると自負していたからである。このことは後年

煙洲会の帰途、川崎から御宅まで御供した際に、車中で親しく先生に御話申上げた。

これは一つの例かも知れないが、私は大体においてよき高工生ではなかつた。そして勉強もしなかつたというよりも能率の悪い勉強をした。大体高工という教育に疑問を持つたまま学校を出てしまつた。結局先生の自由啓発主義を最もハキチガエた生徒の一人であつたかも知れないが今考えると、先生の教育方針が無かつたら、私など卒業も出来なかつたのであろうし、又とくの昔に死んでしまつたであらうと思うのである。思えば自由啓発の恵みは広大無辺であつたと云えるようである。

このような意味で私の中に「人間鈴木達治」が生きていると申したら、先生も日野墓地でさぞかし苦笑して居られることと思う。以下思いつくままに断片的に先生のおもかげを頭に浮べて見たい。

## 二、創作品「横浜高工」

先生が横浜へ行くと文部省から云われたとき「万事任して呉れるなら行こう」と云うことで引受けられた、ということは誰でも知つてゐることであるが、これで先生は好きなことがやれたわけである。横浜高工は全く先生の創作品であつたわけだ。われわれもその中で生みの苦しみを味わつた（或は味わされた）わけだ。あとでわかつた。勉強したい奴は勉強し愈けたい奴は愈けた。名は官立で実は私立であつた。われわれはよろこんで創作の材料になり得た。

## 三、鈴木主義に対する批判

私は私なりに鈴木先生を尊敬し偉いと思つていた。しかし在校中は先生にあまり近づき易くなかつた。と云うのはあまり自信ある勉強もしなかつたし、プライドある高工生でもなかつたからであろう。終戦後菅要助君の紹介で煙洲会に列席するようになってからは、そのようなことがなくなつたので、本当に赤

裸々な気持で、先生と語ることが出来たのは幸福だつたと思つてゐる。

在校中および煙洲会を通じ、ずいぶん色々な人物の御話を伺つたが、一番頭に残つてゐるのは新島襄先生の伝統である。鈴木先生がなかつたら、私は恐らく新島先生という人物に接する機会に恵まれなかつたであろう。

同志社出身で新島先生の弟子でありながら、鈴木先生は所謂クリスチャンではなかつたようだ。そして寧ろ東洋思想的であつた。また仏教に関しては殆んど御話が無かつたようだ。支那思想に関してはうんちくは深く、よく読んで居られたようである。先生の老孔孟三子に対する所見は実に興味あるものであつた。即ち若しわしが孔子に会うことが出来たら謹んでその説く所を聴き、孟子に会うことが出来たら盛んに議論をたたかわすであろうが、若し老子に会つたならば無条件平伏であるとは先生が屢々云われたところである。自由啓発とか名教自然とかの思想的背景はおそらく老子にあつたのであらうと私は深く信じ

ている。

鈴木主義に対する批判として私の耳に入つて来たところでは、私より二十  
位若い人では、あれは一種のボスだと云う者もいた。又旧い教授の中にも名教  
自然碑などはブツ倒せと云つた人も居たと聞いた。又有名な「疾きこと風の如  
し」の時でも後は必ずしも「徐かなること林の如く」ではなかつたと云うこと  
も耳にしている。しかし疾風迅雷の後では紙屑の二つや三つは舞上つても不  
思議ではあるまいと、私自身はあまり気にしていない。尤も前述の二句は外界の  
状況描写でなく、先生の心境を云われたものであると解するのが至当であらう。

#### 四、先生の風采と弁舌

人格から風采が生れるか風采から人格が生れるかと云えば、勿論前者であ  
らうが、鈴木先生のあの堅太りの短軀と淡々訥々たるあの弁舌とは、たしかに愛  
嬌の溢れたもので、先生の人格にプラスになつていたと思う。

徳富蘇峰先生からいただいたというあの長い杖について弘明寺の通りを悠然と歩まれた晩年の御姿は今も眼前に見えるようである。

##### 五、「代表的日本人」のこと

あれだけ信念の強い方であつたが固陋ではなかつた。絶えず進歩して居られた。ある時の煙洲会で私が岩波文庫の「代表的日本人」(内村鑑三著)のことを申し上げたとき、先生は御存じなかつたがさつそく御読みになり次の機会(昭和二十九年三月二十七日の煙洲会)に、この書のことを紹介して居られたのを見た。よいと思つたことを、すなおに実行に移された方である。

##### 六、老の坂

私の煙洲会列席は終戦後のことであるが、地理的な関係で、しばしば帰りに御供してお宅まで御送り上げたものである。その時六ツ川の坂を登つて上まで御送りしようとしても「ここままで結構」と云われて坂の下で追ひ返されて

しまつた。おれはまだこの坂は一人で大丈夫なのだ、とのプライドを持つて居られたのだと思う。この頃自分が六十の坂を越えてどうかすると、電車やバスの中で席をゆづられたりすると、あの時の先生の御氣持がわかるような気がする。

## 七、人 物

在校中から立派な人物になれとよく云われた。よき技術者になれとも、化学者になれとも云われなかつたので、大に面くらつた。先生の理想は代議士であつたらしい。高等工業とは高級職工養成所だと思つていた私には、どうもよくわからなかつた。先生の理想として居られたような代議士が、今の日本に幾人現存しているだろうか。

## 八、教 育 者

昔の学校の先生と今の学校の先生とは、終戦を境にして判然と變つたと一般

に考えられている。しかし昔でも「教育者」であるという顔をしながら職業意識に徹底し「労働者」という言葉こそ使わなかつたが、職業と考えて働いていた人が沢山いたと私は思う。私は「教育者」という看板やタイプ（若しあつたとすれば）がきらいであつた。だから師範学校というものがきらいであつた。

こういう私が、最も「教育者」臭くない鈴木先生のような偉大な人間を、校長とする学校に在籍出来たことは全く幸運であつたと思う。何よりも鈴木先生は「独得の存在」であつた。

## 九、訓 練

自由啓発や名教自然と訓練ということは両立しないものようである。先生は訓練ということを否定された。しかしこのことに対し、私は大に疑問を持っている。訓練を要しない人間というものはない筈である。要は自らを訓練し得る能力があるか否かであろう。横浜高工を卒業（？）しても自らを訓練しな

つた為に脱落した人はかなり多いのではないか。そのような人は若し他の官立高工へ入つていたら、もつと才能をみがくことが出来たかも知れない。孔子孟子の門をたたくべかりし人が、老子の門に入つてしまつたというわけだ。

一〇、わが手を握る

昭和二十八年十一月軽い脳溢血で倒れられたがその翌年二月頃私が一人で参上したときは、大分よくなつたと申され効かなかつた方の手（右？）で私の手を握られた。「どうじゃ、こんなに握力が恢復したぞ」ということを親しく示されたわけである。あのときの力強い握手は忘れられない。

一一、最後の病床

昨年愈々最後の病床に就かれたとき私が御伺ひしたのは八月二十日であつた。かすかに目を開いて私を認めて下さつたが、おことばは私にわからなかつた。「話したいが話せない」という意味であると家人の方から伺つた。

## 一一、日野墓地へ

愈々来るべき日が来た。しかし九月二日母校々庭の名教自然碑が黒布に覆われたのを見るまでは、まだ先生が亡くなられたという実感が来なかつた。

九月十一日の満九十二才の御誕生日を迎えることなく、遂に巨星は落ちてしまつた。

## 一三、終　　結

私の煙洲会への出席率は最近大分悪かつた。一昨年九月の満九十才の昼食会に出、六月には出席する積りでいたら都合が悪く、七月には出席通知を出しておいたところ、先生御不快で延期となり、これが遂に永遠の延期となつてしまつた。六月の最後の煙洲会に出られなかつたのが返す返すも残念であつた。

先生が九十才になられ、自分が六十才になつたといふことは分つていながら、先生が亡くなられるという現実を想像することがどうも出来にくかつたのであ

る。煙洲会を怠けたのも一つは先生の御話はいつでも聞かれるという考があつたからである。

以上「私の中に生きている人間鈴木達治」を述べさせていただいたが、この偉大なる先生の人格の私の中における生かし方が足りず、凡凡として人生を過し、齢既に還暦を越えてしまったことはまことに申訳無いことである。

(昭和三十七年六月十六日脱稿)

(電化二期 東芝エンジニアリングKK)

## 追 想 夜 話

山 本 栄 治

私は鈴木達治先生を偉大なる一個の人格として深く崇拜する。

横浜高工を卒業して、いつの間にか卅七年が過ぎ去つてしまつた。其間、私は先生には陰に陽に何かと御厄介をお掛けし乍ら、今日まで何のお役にもたなかつた事を痛感してゐる。先生の冥途からの哄笑が大きく耳朶に木霊（こだま）する気がしてならない。

先生御生前の数々の御功績は先輩諸兄の筆に委ね、私は先生と私との因縁の一、二を語り、在りし日の先生の面影を偲びたいと思ふ。

山家育ちの私は若し先生の御指導がなかつたら、恐らく今頃は田舎大工にでもなつて、孫の子守でもし乍ら、うづもれていたらうと思ふ。

私が卒業した昭和初年は震災景気も漸く下火となり、生産会社に就職するとは至難の時代であつた。幸い私は富山先生の御世話で日本カーボンKKに入社した。この会社は鈴木先生の肝入りで横浜財閥をバックとして創設された所謂、先生のイキのかかつた会社の一つである。

月給四十五円、これで当時は、服も靴も帽子も一通り身に付けることが出来た。

私は颯爽として、早速、先生のお宅に報告に参上した。先生は和服姿で玄關の次の間に設けられた炉辺に案内された。炭火で暖をとり乍ら、こんな話をされた。「人生には運、不運はあるが、要するに運、鈍、根の三つが無いと何をやつても成功はしない。特に人は処世上、最も注意しなければならないのは、

出処進退を常に明確にする事だ。」

私は、かしまつて固くなつて、拝聴していたが、二十才を一寸出たばかりなので、実のところは余りピンと来ないまま辞去した。

烏兔匆匆、夢のやうに十年が過ぎて行つた。其間、私は横浜を振出しに、富山、福島、山梨と電力の安い地方に黒鉛化工場新設のため、全く席の温る暇もなく東奔西走していた。それでも制服を脱いで数年の私のやうなものが、小さい乍らも一方の旗頭であつた。職工が云ふことを聞かないので、髭まで立てた御時世であつた。

満洲事変が起つて東亜の風雲急をつけそめた頃、昭和電工の森社長は、電極工場新設のため世界最大の横型壺万噸プレスを独逸から、焼成炉には日本では未だ経験のないトンネル、キルンを米国から購入し、着々と巨大な準備が進められていた。業界は喧々ごうごうとして、その操業の成否について取沙汰して

いた。誰も自信をもつて、この未知の怪物の運転を引き受ける者はいなかつた。その白羽の矢が私に立てられることとなつた。電工の小玉技師長と、カーボンの石川常務の間に、再三の交渉が続けられた。然し話は決裂に終つた。

私は苦しい立場に逢着した。私は内心、この巨大な新鋭設備に少なからず触手が動いていたが、さりとて先生の御立場を考へると、そう簡単に割り切る事も出来ない。まして入社の際は生涯同業の仕事に従事しないと、誓約書を差入れている。同業他社への鞍替えなどは全く出来ない相談であつた。

私は折角の好機を眼前にして、進退に窮してしまつた。思案の挙句、遂に意を決して先生の門を叩いた。その時、先生は暫時、私の話をお聞きになつてから、最後に行つてもよい。交渉は儂しがつけてやると云はれた。

私は地獄で仏に逢つたやうな気がした。

先生は両者間を斡旋され、そのおかげで私は昭和電工に転じた。退職金は一

錢も出なかつた。

私の人生の岐路は先生の御苦勞に依り轉換されて行つた。

終戦を契機として会社は日野原社長に移り、私は二十年間の電極の仕事から肥料工場の工場長に廻された。終戦直後の食糧難解決のため、どこの肥料工場も、昼夜の別なく増産に次ぐ増産へと拍車をかけられた。山間僻地のこの工場にも、三千人の従業員と二千人の臨時従業員とが居つた。

労働争議は日増に苛烈となり、その上、レッドパージが重つたので徹夜の団交が続いた。最早、髭の時代ではなかつた。工場は半ば闘争の場と化し、互に生きんがための力と力の闘争の明け暮れであつた。

団交が行きづまり、労資の睨み合ひが不気味な様相を帯びてきた時は、いつも私は先生のあの温顔を、胸に浮べ乍ら最後まで話し合ひを続けた。その御利益のせいにか、私は組合から一度の指弾も受けたことがなかつた。

敗戦と労働争議とは学校の講義にはなかつたので、随分苦勞をした。そのためか私の頭は、すっかり禿げあがり、放射能の雨も直接当るようになってしまった。

\*

\*

\*

春寒料峭。それは昨年のある日である。私は久し振りで先生の六ッ川のお宅を訪問した。それは私が最近、糖尿病にかかり、どうしても血圧が下らないので、思ひ切つてサラリーマン生活を、やめてしまつた報告もあり、又、何となく先生のお顔を拝見し度くなつたからでもある。

先生は日当りのいいベランダで椅子にもたれ、膝の上に軽くドテラをかけた石油ストーブで暖をとり乍ら、文芸春秋を読み耽つて居られた。葉山の出来たての蜂蜜と、ヒジキを持参したところ大変喜ばれた。

その頃の先生は大変お元氣であつた。血色もよく耳も目もお達者で、九十才

を超えられたのに、本は今でも眼鏡なしで読めると云つて自慢して居られた。どこと云つて悪い個所はないが、血圧が二百近くあるので歩行は不如意で、入口の坂道が難儀なため、選挙の投票に行つて以来、最近では殆んど外出しないとのことであつた。

卒業後、三十七年の今、黙つて聞いてゐるとお話し振りといい、音声といいあの頃と寸分違つていないのに私は驚いた。私も、そろそろ還暦を迎へる年令に近づいている。昔の先生と生徒という、しかつめらしさもすつかり失せて、先生の郷里から来た大きな伊予蜜柑を頂き乍ら、世間話に打ちくつろぎ心温る思ひがした。私は先生に、長生きの秘訣でもあつたら、是非お聞かせ願ひ度いと御訊ねした。処が、お話の中には私が求めてゐたような秘訣は、どこにも見出せなかつた。「腹八分目に食べてゐたらエエぢやらう」正に正解である。私は年甲斐もなく脇の下から冷汗が流れた。

先生は嘗て、仙台の二高で教鞭をとつて居られた頃、当時の教へ子であり陛下の侍医もされた方が現在、熱海に居られ、近頃では、この方の御指導で食事はしていると云つて、二、三日前に届いたお手紙を出して見せられた。

「菜食ばかりではいけないこと」

「時には肉食が必要であること」などが書いてあつた。又、近頃はトマトが四季を通して入手できるので、トマトは欠かさず召上つて居られるらしかつた。

先生も中年、糖尿病にかかれ、結局、抹茶を常用して直したので、富山先生にもすすめたところ、効果があつたというお話で、早速、私も実行して見ることにした。

「君も未だ若いんぢやから、糖尿病のことなぞ気にかげず、大いに元気を出しなさい。富山さんはい最近、結婚された。儂しより耳は少し遠いんぢやが」と云つて葉巻に火をつけ乍ら、微笑を浮べて喜んで居られた。私は、久し振り

に大いに若返つたような気がして、心温り元氣づいて、夕暮の坂道を下つて歸路についた。

八月廿九日、私は旅先で、突然、先生の訃報を畏友、大垣君から留守宅への知らせによつて知つた。全く驚いてしまつた。

車中、先生の御冥福を心からお祈りした。

思へば、あの日が先生と私との今生のお別れであつた。私は、今、この想ひ出を書き乍ら涙が流れて仕方がない。なぜだか私にも分らない。到底、私の筆舌には表現することが出来ない。

うつし世の微妙な縁と云ふものであらうか。

先生は煙草と果物が大の好物であつた。特に、柿は果物の中の白眉と称して居られた。私は晩秋になると、毎年、会津の身不知柿を送つた。

ある年、輸送が輻輳して、大いに到着が遅延したことがあつた。先生は待ちきれず、とうとう横浜駅まで出向いて行かれた。漸く届いて、いざ蓋を開いて見たところ、殆んどトロトロに熟れて、いいものは一割位しかなかつた。その時、私はお叱言まじりのお礼状を頂いた。然し、こうした一コマも今はなつかしい夢となつてしまつた。

又、先生は日頃、東郷元師の在り方に深く私淑して居られた。緑濃い自宅の丘陵に、東郷神社を建立せられ、朝夕、礼拝をかかさなかつた。

私も昭和の始め、横浜にゐた頃は、いつもお正月には参上し礼拝した。

先生は、元師が日露の大海戦に、乾坤一擲の大決意を以て、千載一遇の機を掴み、史上空前の大勝利をあげたにも拘らず、平素は聊かの驕奢もなく、名利に恬淡として政治に関与せず、世俗を逸脱して静かなること林の如く、従容として生涯を送られたその在り方に、強く共感をもたれていたようである。

先生は、もちろん市井の凡庸ではないが、同時に、曲学阿世の徒とは遠く類を異にし、焦燥と憂愁のあざなう俗界に在つて、常に毅然とした一種の風格を備へて居られた。

先生は人間として偉大なる心の指導者であつた。終始一貫、卒業生を見守られ乍ら、生涯の幕を閉ぢて逝かれた。

私は、先生のような心から尊敬出来る人間が、日本から次第に消え去られて行くことをいたく悲しく思ふ。けれども、先生の教訓はいつまでも私の心の中に生きてゐる。「名教自然」の句碑と共に。

末筆ながら、鈴木達治先生。名教院釈自然居士。九泉の旅路安かれとお祈り致す次第であります。

(電化四期 元昭和電工取締役、昭和アルミ専務)

## 煙洲先生の想ひ出の一端を語る

山 田 功

鈴木煙洲先生の想ひ出を書くことと云ふことは、小生にとりましては余りに多い事柄の内より、何を取上く可きやに關しまして、誠にその取捨選択に迷ふ問題であり、又同時に先生からはそれ程多く公私共に御世話にもなり、御指導もいただいて居つたのであると云ふ事を、今更乍ら想ひ出すのであります。

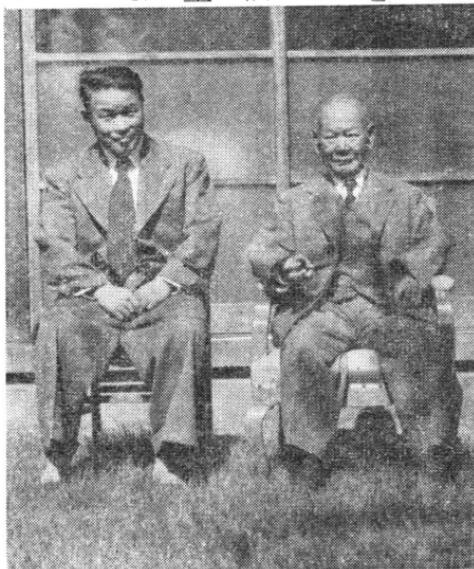
従いまして小生の思想は元より、少さくは処世上の方針に至る迄、多分に先生の影響を受けて居つたことを、今更乍ら想ひ出します。

先生は六ッ川の丘の御住所にて天寿を全うせられまして、御逝去遊ばされま

したが、小生も先生の柩を負ふ榮を得ましたことは、万感胸にせまる小生の一生忘れ得ぬ思ひ出となりました。一番新しい想ひ出と致しましては、小生戦前より戦後にかけてまして、興国人絹パルプ会社の富山工場に工場長としまして、満一年間富山市に住んで居りましたが、その時は日本国内一般に人絹パルプが華やかな時代であり、小生は工場外にも相当顔を出して居りましたが、その中に富山県の工業教育振興会々長の問題があります。小生も人におされましてその會長として何年かを過しましたが、或時同市内の富山大学に來客として招かれ、一席話をする事になりましたが、私は何を題目にするべきか一寸迷ひましたが、相当多くの工学部の学生が居りましたので、旧横浜高工時代の鈴木達治先生の自由主義の学風の話を致しました。勿論三無主義を混えてです。私なりに先生の学風が目指す所も加えましたが、自由主義教育の内容は学生達の共鳴を大分買ふたらしく、再三の拍手かつさいは勿論のこと、一席の講演は大部成功であつ

た様に記憶して居ります。先生の学風が、卅年の年月を経た日に於いて、尚且學生に非常に興味を与へたことは予想外でありまして、自分乍らも驚いたわけがあります。大正時代の末期に初まる先生の教育の指導方針が、昭和の時代となり三十年の年月を経て、尚若き青年達の非常なる共感を呼び、私としては窮余の一策として思いだしました先生の自由主義教育のお話で自分の責を果たし、且つ望外の成功をおさめる事が出来ました事に、改めて旧高工時代を想ひ出し今は亡き先生をあらためて偲んだ次第であります。(昭和卅七年六月二十七日記)

(電化二期 元興国人絹KK専務)



山田功氏 煙洲先生



思 い 出

昭和二十七、八年の頃であつたかと思うが、三菱鉛筆本社の事務室を増築する際静かな奥座敷に畳敷床間付きの日本間を一間造って急がぬ客の接待室とした事がある。その節煙洲翁に額の染筆を依頼した処、早速一筆書いて呉れた。今から考えると良い事をしたと思うのである。

三菱鉛筆株式会社

会長 数原三郎

(下) 真崎大和鉛筆創業六五年祝賀挨拶をする煙洲先生



## 恩師の思ひ出

田 村 文 雄

煙洲先生は恩師であり、漫筆にも載つておる如く三菱鉛筆の創立者として、会社の今日ある功労者でもあり、又私の家庭の事でも何かと御指導願つた恩人でもあります。私が三菱鉛筆に入社したのは先生の御紹介に依るものでありまして、漫筆に出ておる、三菱鉛筆の技術的な基礎を築いた桜井三千三君、会社を今日あらしめた現会長、数原三郎氏共に私の先輩であります。

私の郷里は水戸黄門で有名な水戸であり、水戸藩士であります。煙洲先生が所謂「水戸学」に就て深い研究をしておられた様で、御目に掛る機会に「水

「水戸学」に就て御話しが出るのですが、膝元で生れた者が知らないので、その度毎に冷汗をかいて、務めて話をそらしたものであります。

先生が何故「水戸学」を研究されたかは勿論判りませんが、先生の「名教自然」の教育方針と水戸学の教育要項とは、多少、内容的に、似通つた点がある様に考へられるのであります。

この「水戸学」とは何であるか

この間に対しての答は、義公（水戸二代藩主、水戸黄門と云はれる人）に発するのであります。

この不出世の人間義公が「大日本史」といふ大著述をする為に「十五万石の三分の一を割いて学者を日本国中から招き、そして彰考館といふ史館を江戸小石川の藩邸に営んで編輯をした。（水戸にも別館を設けた）

その彰考館で大日本史編輯の史料を全国から収集したのであります。

この大日本史編輯の動機が、大義を明かにし、名分を正すといふ所にあつたので、これはやがて国体を明かにする事になつたのであります。

国体を明かにする事は、何ぞ知らん即ち尊王心を起す事であり、やがて幕府政治を覆えし、我國の眞の姿である王政復古に導いた事は明かであります。

水戸藩が徳川幕府の御三家であり、親藩でありながら尊王を説いたといふ事がすでに奇とされることであり、やがて幕府を倒し王政維新へと導いた、その原動力が水戸学であるといつても過言でないのであります。

その編輯の態度と編輯の方法の中に「水戸学」の学風といふものが基礎づけられていたのであります。

煙洲先生が思想的に皇室中心主義である事は煙洲漫筆の「噫、清水博士」の追悼の文にうかがはれるのであります。

九代の水戸藩主烈公の時に、この学風を推しひろめ藩内の国人を教化し、人

材を育成せんとの意図から弘道館が建設されたのであり、この建学の旨意が、弘道館記として大きな寒水石に深刻されて、遺されておるのであります。

この碑石は領内の真弓山から採掘したもので、その巨大なので、その当時としては採掘にも、運搬にも困難を極めたと記してあります。

この事実と、煙洲先生の小冊子「名教自然碑の由来と教育私見の断片」で知つたのですが、国大本館の玄関前に建てられ、永久に若人を送り迎へするであらうこの名教自然の記念碑の石材が、水戸市より北へ約五里の太田町の附近の大理石の山から掘り出したもので、約三十幾トンで山でも珍しい巨大なものであつたとの事でありますが、この太田町こそ、水戸黄門が隠棲された地であります。

煙洲先生と水戸、因縁浅からぬものを感じるのであります。

先日先生から頂いた昔からの沢山の御手紙の中から、那珂川の鮭に就て書か

れた古い手紙が出て来たのであります。

昭和二十三年十月二十日付のもので、御手紙にはこう書いてあります。

「水戸黄門様が徳川將軍家及京都の宮家へ那珂川の生鮭を献上いたしたる昔話など水戸家の事蹟を物語り、昨夕は水戸の名話に一夕を過しました………」

この那珂川は水戸の街の東北を流れる清流であり、川としては余り大きい方ではないが、栃木県、福島県の県境の朝日岳、男鹿岳を源としており、栃木県の烏山周辺では、アユ、鮭漁で有名であるが、下流の水戸市の辺りでも、子供の頃には、秋祭頃の解禁期には、流し網で、かなりの漁があつた事を記憶しておる。

北洋の鮭が産卵の爲め本洲の沿岸にそうて南下し、各河川に上るのだが、潮流の関係で、那珂川がその最端であるとの事、従つて太平洋の荒波を遠く越えて来るので、北海道のものより味が良いといふので、昔から贈り物として珍重

がられたものであります。

六ツ川の先生の御宅にも、毎年持参する様な季節になると、親戚、知人に頼み込み気を配つたもので、先生によろこばれるのを一番楽しみにしたものであります。

駕籠、馬、以外乗物とて無かつた江戸時代に秋とは申せ、遠い江戸まで生鮭をどうして搬んだものか、勿論早駕籠でと思ふがなかなか大変な事だつたと思ひ、目に写る様な気がします。

御本家である江戸の將軍家に献上する事は以前にも聞いた事はあるが、京都の朝廷まで毎年献上した事実は、先生の御手紙で始めて知つたのですが、幕府あるを知つて、朝廷あるを知らなかつた当時の世相としては、驚くべき事実だと思はれます。

その鮭も、三・四年来、河川の底が汚れた為か、又汚水が流れ込む為か、殆

んど漁が無く、残念に思つておつたのでありますが、かりに獲れても、今は贈るべき先生がこの現世に、おはせられない事は誠に哀しき極みであります。

先生からは家庭の事でも大変御世話になり、御心配を御掛けしておりますので、その恩情の深さをしみじみ感じておる者であります。記念に保存中の数々の御手紙の中には墨筆で、達筆に書かれた懐しい先生の筆跡を眺め、これら御手紙を書かれた硯石を形見として、記念に戴きましたので宝として長く使用させて頂く考であります。

御子息の博人君が先生の遺志を襲て入社され、中堅幹部として活躍されて居らるる事は誠に喜ばしき事であります。

先生の一周忌に当り、思ひ出を述べさせて頂きました。

先生の冥福を祈ります。

(応化二期 三菱鉛筆KK取締役)

## 思ひ出

荒 木 義 雄

私が始めて煙洲先生を知つたのは、大正七年五月の末のことで今から四十有余年にもなるだろうか、以後お亡くなりになる迄、種々の面で絶えずお世話になり、ご指導を仰いだために、多くの思ひ出が頭の中を走馬燈の如くに往来するのである。

思へば大正五年三月、私が長岡工業応化を卒へるとすぐ柏崎町在の日本石油の化学研究所（現中央技術研究所）へ勤務したが、向学の志から二年で辞し恩師長野宗四郎先生を頼り上京、其の際煙洲先生を紹介されたのである。残念な

ことに長野先生は其後二か月にして病の為め急逝されたのであつた。私は事情で受験勉強に専念することが出来ないので、働き乍ら目的を達したい旨を伝へ就職の斡旋をお願いして居た処、程なく煙洲先生から大和鉛筆合資会社（現三菱鉛筆KK）へお世話頂き、直ちに勤務したが同社は創立日なほ浅く、且つ第一次世界大戦が終つて間もない頃だったので、その運営面で大へんな苦勞があり、殊に人事では想像以上のものがあつたやうだ。当時の会社は色鉛筆製造専門メーカーとして其の原料たる染料の入手には、並々ならぬ苦勞があつた。即ち此等の多くは輸入に頼り、僅か乍ら国産品もあつたが、これとても多方面からの制約を受け、仲々思ふにまかせぬ時代でもあつた。従つて当工場も随時必要量の各種染料を確保することは、到底不可能のことで、為に順調に作業を仕かねたことも屢々であつた。そこで私はその幾分なりと補足しようと考へ、先づ赤色染料であるヨージシンの製造を思ひ立ち、工場長に進言、許可を得て実験

に着手、多少の困難もあつたが、まづまづの製品が得られ、実際に工場で使用した。其後二、三回実験を繰り返して原価計算もして製造の可能性を知つたので、会社にその製造方を進言したが、何か他に考へがあつたらしく、言を左右にして受け入れず、遂に社長より煙洲先生に、私をして製造計画を中止させる様との内話があつた由なるも、先生は即座に社長に向ひ荒木の考へ方や実行法は正しいと思う。若者が興味を持ち、熱心に研究に励げんで居る時、其の中止を命ずることは、折角の若芽を摘み取るようなもので、いけないことだから引続き研究させる様、とのご忠告をなされた由、後日此の事を他から知らされた時に、私は先生に対し一層心から信頼と感激を深くし、以後何事も誠心誠意を以てし、ご意志に添はんものと固く心に誓つた次第である。

しかし後日又自分の浅慮から深く先生にお叱りを受けたこともあつた。大正九年三月、先生や会社の上司に内密で東京高工を受験したことである。勿論私と

しては準備不足だったので、合格など考へもしなかつた。只度胸試し位の安易の氣持で受けて見たのだが、それから十日程して先生の知るところとなり、自宅に呼ばれ、その無責任な不心得を諭された時は、頭から冷水三斗浴せられた思ひ、いやはや頭が下つたきり先生の顔を正視することが出来ず早々に引下つた次第。先生曰く受験そのものは決して悪いことではないが内緒でやつたことは良くない、上司の許可を得て正々堂々とやる可きだと。以来何事もよく考へ正しく判断して事に処す可きだと深く反省したのである。勿論天罰覲面落第したことは言ふ迄も無い。

其の後横浜高工を卒へ日清製油へ就職する際、身元保証人をこころよくお引受け下され私も非常に満足に思ひ且つ感謝の氣持で一杯であつた。

それから後の長い年月、処世は決しい愉快なことばかりある筈のものではなく、不愉快の事や判断に苦しむやうな事が、多々起きることもあつたが、其の

都度先づ先生を訪れ深く円やかな温容に接し虚飾のないご意見を拝聴し種々世間話をして居るうちに自然と心のしこりもほぐれ、元氣になつて帰路につき、先生はいつも私の心の支へであつた。

噫々今はもう現世には居られないのである。私は父親を亡くした折以上に悲歎にくれた。私は文章家でないので自分の思ふ事を、充分に書きあらはすことが出来ないのが、非常に残念の限りである。この上は先生の御高恩を偲び、心から御冥福を祈る次第である。

(応化四期 日清製油KK)

# 先生と私

加 山 寅 吉

師弟の情の数多い中で、鈴木煙洲先生に寄せる吾々横浜高工を母体とした恩愛の情は、誠に汲めどもつきない数々の絆に結ばれていると言つても過言でないと思ひます。

今は亡き先生の御冥福を祈り乍ら、思ひ出の一つを記し度いと存じます。それは私事にわたりますが、私の勤務先の太陽油脂株式会社が創立されて以来、十五年の歴史の中で大きな試練が二つあつた。而も其の試練の中にあつて、常に私を励して頂いた先生の言葉を思出すのであります。

それは創業と守成に対する心構へについて、引用された言葉であります。今でも先生からの色紙を座右録として居ります。

その試練は太陽油脂の前身、南洋興発株式会社を終戦に依り、南方の地盤は殆ど壊滅し、国内の唯一の残余財産である芝浦工場及横浜油脂工場（太陽油脂の前身）迄も、米軍司令部より閉鎖機関に指定されて、其の管理下にあつたとき、当時の横浜油脂工場が小生等を中心として、幾多の苦勞と努力を傾けて、茲に太陽油脂として再度発足した所謂創業の苦難が其の一つであり、又発足して数年にして昭和二十六年の朝鮮動乱に依る、所謂新三品の暴落による大きな損失を受けたときの、真に守成の難しさの苦い体験であります。

今にして思へば、斯る事態を暗示せる如く、太陽油脂創立三週年記念の祝宴の際、来賓各位を前にして、先生から小生へ鞭撻と事業への心構へについて諭された祝詞を頂いたのであります。

其の言葉の中に十八史略の美文が引用されて、先生独特のあの抑揚で、含蓄のある言葉に参会者一同、感に打たれたのであります。

唐の太宗嘗て侍臣に問ふ、創業と守成と孰れか難き

房玄齡曰く、草昧の初め群雄並び起り力を角して後之を臣とす創業難し

魏徵曰く、古より帝王之を艱難に得て之を安逸に失はざることなし守成難し  
上曰く、玄齡吾と共に天下を配り百死を出でて一生を得たり故に創業の難きを  
を知る

徵吾と共に天下を安んじ常に驕奢の富貴より生じ禍乱の忽にする所より生ぜんことを恐る故に守成の難きを知る

孰れも創業の難きは往けり、守成の難きは方に諸公と之を慎まん。

昭和二十四年四月煙洲老達記

洵に当時の小生の心境に肺腑をつく言葉であり、人生何れの時代、何れの世

相、又事業経営にも相通ずる至言であります。

私は此の名言もさる事乍ら、先生は六ツ川の山上に悠々自適され乍らも、常に子弟に諭す恩愛の情と、過ちなからしむる親の情と、子弟の事業の繁栄について、常に心にかけて頂いたのであります。

名教自然と言ふ懐の中に育つた吾々は、今にして泌々幸福と思慕の念にかられるのであります。駄文を寄せて先生の御冥福を祈念致します。(三七・七・一四)

(応化五期 太陽油脂KK社長)

# メキシコより鈴木先生へ

平 田 義 雄

鈴木先生に関連した数多くの想い出の中に、嘗て小生がメキシコで最初に書いた手紙の内容を、未だにはつきり記憶して居るので、少々古い事ではありますがその時の実感を手紙の形式で書きました。

記憶は恐らく先生の御教訓を身を以つて体験出来た感激でありましょう。

尚、文中にある岡村ドクター、森山ドクターも他界され、鈴木先生もまた、私どもから遠く離れてしまわれ、全く感無量のものがあります。

煙洲鈴木先生

拜啓 前便の続きを申し上げます。

十二月七日横浜の棧橋で大陸会の幟と全校の皆様にご見送りをいただいた感激と、船中で遭遇した天皇崩御の悲しみを胸に秘めながら、マンサニーヨ港に上陸したのは一月七日でありました。予定よりもおくれたのは、出航直後出会った暴風雨の為であります。

このマンサニーヨの暑さは故国の夏以上で殊に蠅と蚊の大軍は、形容の言葉もございません。此処で沿岸航路を利用するために、一月十五日までの八日間滞在致しました。埃だらけの風物の中に異様な土着人の状態は、物珍らしい他に言葉の通じない事も手伝っておそろしい気が致します。

続いて五日間の沿岸航路でマサトラン港に上陸致しました。船は極めて小さい貨客船で、はじめて異国人と同室し生活を共にした次第です。岡村ドクター

の代理の人に出迎えを受けましたが、此時ばかりは嬉しさで一杯でした。マサトランでは二泊致し、市内や近郊の見物を致しました。日本の領事館もあります。幸いに日本から同船致しました青木新任公使の御紹介もありまして、領事館でも種々御世話になりました。出迎えた人からも、領事館でも、横浜高工という言葉を聞き何かホツとした身近かさを感じましたが、技術者が渡航した事に異常な期待をかけて居られるとの事で、責任の大なるを感じて居ります。

日頃、先生の教訓の中の自主独立と海外発展の事そのものが、今小生の身辺で非常な力で要求されている事を感じて居ります。間もなく目指す製糖会社で就業する事になりますが、大陸会の先陣を承つた小生こそ、光榮でありその重責に耐えられるや、今更乍ら決意を新たにす次第です。マンサニーヨ上陸以来、二週間に亘るノロノロした旅行でありましたが、異国で味う独り旅は一生忘れ得ないものがあります。あやしげな英語で意志表示をしなければならぬ

そのツラさ、意志が通じた時の愉快さ等、全くこれ等の繰りかえしで終始した次第であります。

沿岸航路の中でメキシコ陸軍の將軍から、天皇崩御のお悔みの言葉を受けた時ほど、あわてた事はありませんでした。尚又、短軀矮小の小生が日本人である事を相手に知つてもらうために、あらゆる努力を惜しまなかつた事も附記して申し上げます。こんな時、いつも何処かでひらめくものは、大陸会の先陣を承つて来た事に併せて、波に高工の徽章であります。

一月二十三日、クリヤカン市に到着しました。岡村ドクターをはじめ、森山ドクター、小山ドクターの出迎えを受けました。当地にはその他に、十人の日本人が夫々の職業を持つて活躍して居られます。翌日、岡村ドクター御夫妻に連れられて、レド製糖会社クリヤカン事務所に挨拶に参りました。ここで二週間休養の名の下に、異国での生活の準備をする事に致し、会社の許可も得た次第

です。尚、この日から岡村夫人よりスペイン語を習う事になりました。岡村夫人は御承知の如く、レド製糖の支配人ディアス氏の姪にあたる方です。

小生の勤務はここクリヤカン市から、西方六十キロの距離にある工場で、エルトラドという所ときいて居ります。マラリヤの非常に多い所との事で、持参のキニーネは大へんよかつたと、岡村ドクターにほめられました。とにかく健康に注意し、日本人として恥ぢない生活態度と誇を失わない様、又大陸会の名にふさわしいように、そして先生が一貫して吾々若者のエネルギーと善意を信じ、自由啓発の精神を説かれた一字一句を、胸にしつかりと刻んで、今後体験するであろう種々の困難をふみこえて、御期待にそむかないよう頑張る覚悟であります。工場の模様はいづれ勤務してから、詳細御報告の予定で居ります。

岡村ドクターからも、鈴木先生に宜敷くと申されて居ります。

先は近況の御知らせまで

(応化四期 東京電器専務取締役)

## 鈴木達治先生を偲ぶ

上 条 勉

鈴木達治先生を知つたのは、大正十二年の関東大震災のあつた年である。当時私は、木造の整然とした、美しい学校に、一年生として入つたのである。其処で校長であられた、鈴木先生を始めて知つた。僅か三ヶ月足らずの学校生活で充分学校の様子も判らなかつた中に、暑中休暇が来て、郷里に帰り、もう少しで学校が始まろうとする直前の九月一日に、関東大震災が起きて、学校は、機械科の水力実験室、鑄物其他の実習場を残して全部灰燼に帰して了つた。

自分は当時神奈川の伯母の家に居たが、郷里から、大震災を聞いて帰つて来

てからは、毎日神奈川から大岡町の学校の焼跡まで通つた。勿論横浜の全市は焼野原であつたから、歩いて通つた事は云う迄もない。学校と云つても、本当の焼跡であるが、此処には、常に鈴木先生の元氣な姿が見られた。そして今迄とは異つて、極めて身近に、鈴木先生の警咳に接する事が出来た。当時吾々の耳に入つたうわさでは、横浜高工は、名古屋高工に合併されるかも知れない等と聞いて居た。

だが、鈴木先生を中心とする、吾々焼跡に毎日通つたグループの氣持ちは、此処で学校を復興させるのだ、と云ふ意氣に燃えて居た。吾々が成し得た、物理的な建設作業は、焼跡の灰をかく位のもので、取るに足りなかつたが、精神的な建設力は、鈴木先生の決意を充分固めさせるに足るものであつた。先生の偉大な人格と説得力で、立派に再建のきざしが現はれ、年末に及ぼんとする頃には、バラツクの建設が行はれて、吾々は、鑄物場の砂の上や鍛造場の土間の

上に机を並べて、授業を受ける事になった。時の立つに従つて、バラックの建設も次第に本格化して、極めて居心地の良い三棟の巨大なバラック建築と、二、三の小さな棟が出来て、授業は、本格的に行はれる様になつた。此のバラックで幾組かの卒業生が送られ、新入生が迎へられたのである。此の間の鈴木先生の御努力は、大変なものであつたと思ふ。

今は全く昔の面影もないが、水力実験室の側から、機械科職員室、教官食堂、機械科教室、電気化学教室、講堂、応用化学教室と云つた風に、立並んで居た。電気化学の教室と棟を同じうして建てられた大講堂は、卒業前の三年間と卒業後の三年間、併せて六年間、偉大な講演を通じて、絶えず鈴木先生の偉大な姿に接しさせてくれたのである。

先生の講演は、実に柔かな感じで、決して雄弁大会で見る様な、アクセントの強いものではなかつたが、話す程に聴衆の心は、鈴木先生の話の中に引込ま

れて、他に何物もなく、話の進行するままに、聴衆の一人／＼が先生と自分だけになつて了ふ。場合に依つては、それさえも忘れさせて、話題の内の人物となり、思想となつて、無我の境に引入られる話術を心得て居られた。学校を卒業して後三年間、商工実習学校に奉職したが、此の間恩師として又、上司として鈴木先生に接する事が出来たが、時折商工実習の職員会議等には出席されて、中食後などは、教員連とストーブをかこんで、車坐になつて話す様な席でも、先生の話は面白く滑に尽きる処がなく、思はず話に引込まれて、話の中に自分がとけ込んで了う様な事がしばしばであつた。

勿論講演に臨んでは、何が今日の講演の目的であるか、と云ふ事は、一応用意せられて居たに違いないが、話は尽きる事なき泉の様に、常に、新鮮に湧き出て来ると云ふ自然さがありました。先生は常に一貫した、思想の持主で在られた。名教は、自然の中に生れると云ふ強い信念は、御自分の理想として、胸

に秘められる丈でなく、部下を通じ学生を通じ、日常学校の中に起る総ての問題を通じて、此の理想を忠実に実行された。部下の中、或は学生の中にも、必ずしも、先生の思想に従はないで、時には我儘に行動する場合もあつたが、先生は、自分の意志に反した行為であつても、叱られる様な事はなかつた。其れが、又先生の偉大な主義であつたのかも知れない。

商工実習学校の入学試験の時、方針は、無試験と云ふ事であつたが、卒業学校の申請書を基に、面接時の感じ丈で採否を決定すると云ふ事は、何となく公平でない様な感じがして、一部の学力試験を実施した事がある。其の時鈴木先生は、私の椅子に一時間以上も居られて、自分のなす処を見て居られた。そして一言の発言もなく出て行かれた。

今だに、先生があの時、何を考へて居られたものか、計り知れないままに伺つて見る機会もなく、時が過ぎて了つた。

先生は恐らく、其の行為をも包めて、名教自然と考へて居られたのかも知れない。強制は自然ではない、云ひ度い事はあるが其れを云つたのでは、自然でない。名教とはならないと思つて居られたのではなからうか。

自分は、母校の卒業生としては第四回生だから、古い方である。機械科の卒業生だが、将来は、航空機の技術を修得し度いと思つて居たので、鈴木校長にも、其の御話をした事がある。私が商工実習をやめた時には、教官食堂で、送別会を開いて下さつて、激励の御言葉を頂いた。四年程して再び、先生に御目に掛つた時には、母校の造船科の一部では、航空学科が教へられ、航空科が創設され様として居た。

先生は、何によらず此はやるべきだと思はれたら、力強く実行された。工業懇話会然り、大陸会然りである。そして決して線香花火の様な、頼りない一時的な存在にはされなかつた。鈴木先生と云ふ偉大な、人格を中心として、始め

て出来た事だと思ふが、企画されたものは益々盛大になつて行つた。まれに見る力の持主であつたと思ふ。

先生の様な巾の広い人は、実に広い範圍に亘つて、無数の人と關係を持つて居られた訳だが、私等の様な、ほんの一部の微々たる存在でも、自分等にとつては終生忘れる事の出来ない色々な記憶や教訓が、力強く残されて居る事を思ふ時、あたかも、太陽の如くあまねく及んだ先生の偉大な力を、今更の様になつかしく思ふ次第である。

(機械四期 新三菱重工名古屋製作所長)

## 鈴木先生

大 塚 梅 雄

私が先生を追想する時、特に深く印象に残る二つのことを記して先生の在りし日を偲びたいと思う。

一つは関東大震災の大正十二年九月の終りだつたと思う。我等在校生有志が校内の焼跡片附けに働いていた。その時巻きゲートルに竹の杖をついた先生が御出でになり、一同に集合を命ぜられた。我々は嬉々として先生の囲りに円陣を作つた。先生はおもむろに「本日横浜高工は文部省の命で名古屋に移転することになつた。諸君は直に移転の準備に掛る様に」との御言葉の後、先生は一

段と声を張り上げて「然し私はこの焼土の横浜を捨て、日夜復興に専心する市民を捨てては行けないから、一人横浜に残る」と決然として話された。

この最後の御言葉に、集る我等学生一同も先生と共に、焼土の横浜に残ることを誓つたのである。その時の烈々たる先生の御言葉は今も尚耳朶に残る心地するのである。

次に戦争中、先生を中心に必勝懇談会が結成されて、私もその一人として先生の御教導を頂いていた。勝利あらずして終戦の折、計らずも先生の信任厚き一卒業生が在校生を引き連れて首相官邸焼打ちの暴挙を行つた。然も在校生のみ捕はれて服罪したことは、先生の耐え難き御心中の苦しみだつたと思はれる。その頃の先生の詩に

誰使至尊為此言

茫然飲淚聞乾坤

回天戦局えんてん都無策

独向皇城泣聖恩

とある。先生の皇室を思ふ御心持が偲ばれて、その頃の御言葉が今も色々と  
思ひ出されるのである。

先生は私にとりては一大生活の光明でした。私は先生の遺訓を帯しこれから  
の生活を律し度いと思ふ。

(電化四期 大平工業所社長)

# 追悼のことばに代えて

佐藤喜雄

## 一、慈父感

昭和二十三年の夏、外地奉天から引揚げて帰国したばかりの私は、戦後初めて、久しぶりに六ツ川町の丘の上のお宅に、先生の御機嫌を伺つた。

お庭の方へ請ぜられて腰かけた縁側から、眼前には植込に続く先生御趣味の邸内農園が、六月の陽光の下に青々とひろがり、これは御丹誠の成果が戦中以來、何所も同じ物資欠乏のお台所に寄与する所定めし大なるものがあるうと、めでたく存じた事であつたが、又一方、そこから程近く左手に見える応接間の

開け放たれた窓の中には、何やらがやがやと学生達が屯ろしていて、これは多分戦中母校の彼等の為に提供開放された名残りだろうが、和と洋と、簡素と数寄とが調和された先生御会心の応接間も、これでは台無しではないかと案じられもした。

私の右に並んで腰をかけられた先生は、もぎたての、いささか小さくて器量は悪いが、よく熟れた深紅色の果肉の桃を、先生のあの体軀の一部分にふさわしい丸まつちいおん手で案外お器用におむきになり、更にていねいに幾つかに切つて小皿にのせ、「これは袋をかけなかつた桃です」と言つて私におすすめ下さつた。

先生に接する度毎に、何時も私が感得する慈父感を、私はこの時も、その桃の至つて素敵な美味感と一緒に、しみじみと嚙みしめ味わつた事であつた。

## 二、鈴木煙洲先生と石橋湛山先生

十四年もの昔、戦後私は一度だけ煙洲先生のお宅に推参した事があるが、その時は先ず先生の御安泰をおよろこび申上げ、旧師の諸先生の御安否をおたずね申上げたのであるが、石橋湛山先生に就いては、「時々会つていますが、お元氣です」と申され、更に先生は、思入れるように一寸間をおいて、「あの人は立派です」とつけ加えられた。

要人の公職追放の時、これを免れたい一念で、悪足掻きした亡者共も多かつたと聞くが、石橋先生はきつと、悪びれぬ狙上の鯉の如くであつたのであろう。この事は、後年先生が一国の宰相となりながら、病を得て幾何もなくあつさり桂冠された時の事を想起するならば、けだし思い半ばに過ぎるものがある。何時も富山保先生をお手本にしたりして、名節を尚べ、出処進退を潔く、の信条を、学生薫育の処世訓第一義とされた煙洲先生にして見れば、湛山先生の御風格こそは真にわが意を得たものであつたと思われる。

古い話になるが、大正の末年から昭和の初年にかけて、当時既に東洋経済新報社主幹だった壮年の石橋先生は、繁勤の傍ら横浜高工の講師として週一度来校され、二時間続けて各科連合の全三年生に経済を講じられた。失礼ながら、恐らく御自分でもそれを夢想だにされなかつたと思われるこの未来の宰相は、生憎く御担当の科目には弱い畑違いの学生を相手に、出席者疎らな、さむざむとした震災後のお粗末なブラック建て講堂で、何時も変らぬにこやかな温顔を以て、至つて懇切なお講義をお続けになつた。その頃週一度生徒との面会日を定められていた校長邸に、一夕私はお伺いして、一生徒の眼に映じた石橋先生の印象をお話申上げたところ、「あれは願つてもない好い人に来てもらえたとは喜んでいます」と、わが校長先生は顔を輝かせて仰有つた。

石橋先生のお講義を大いにサボツた私達の卒業式に、先生は来賓として臨まれ、喜色満面の相好で愛情のこもつた感銘の祝辞を、飛入りで述べられたので

あるから、先生の御雅量には全く頭が下がる。先生は鈴木先生がお創めになつた、自由啓発主義の横浜高工が余程お好きだつたに相違ない。

それかあらぬか、この度先生は横浜高工の後身、横浜国立大学工学部の施設拡充後援会の会長を快くお引受け下さつた。これは先頃現工学部長岩崎高雄先生から親しく承つた事である。泉下の煙洲先生は、このような事で満山先生この人を煩わす事には、さぞや御満悦の事であらう。

何故か私はこの章がひどく書きにくかつた。然し読者各位はさておいて、亡き先生にはこれが一番受けると思われる一章なので、あの世の先生のにこにこ顔を想像しながら、私は手向けの花の積りで秃筆を呵し、この一文を草した。

### 三、お若かりせば戦後の文部大臣

矢張りその時、煙洲先生は、戦中地元横浜で必勝懇談会を牛耳り、その為に終戦直後警察憲兵につけられたが、一晩も留置されたことはなかつたし、その

後、追放にもならず済んでいるというお話をされた。「よくそれで済みましたネ」と私は驚き顔で不用意に申上げたが、これは浅見だと後で悟つた。

何しろ先生はその現役時代には、官立大学、高等専門学校を通じて唯一の自由教育の府、横浜高工の校長であり、更には権威者揃いの文政審議委員を兼任され、異彩を放つた存在であつたから、若し終戦が先生のそうした花々しい現役当時だつたとしたら、公職追放どころか、マッカーサーにもその識見、政治的力量等を買われ信任されて、戦後の文相に起用される結果を見たに相違ない。

そこで、わが煙洲文相は教育界に大いに新風を吹き入れ、存分に経論を行つたであろうから、戦後初めにそういう発足をした、今日の教育界の様相とか、教育の在り方とかいうものは、可成り趣きの異つたものとなつていたかも知れないのである。多分、リベラリズムに正しく確りした根柢をおき、円滑に統制の取れる、好ましいものになつていたのであるまいか。

又、石橋湛山首相が首相として御健在で、且つわが煙洲先生が現役だったとしたら、追放解除後二度のお勤めの蔵相に御就任の時「僕は本当は文部大臣をやりたいのだ」と、某誌の記者との対談で申されている程、教育には御関心の深い湛山首相の事ゆえ、必ずや煙洲先生に文相の白羽の矢を、お立てになつたに相違ない。肝胆相照らす湛山首相、煙洲文相両雄の名コンビに私達は喝采を送り、国民は全幅の信頼を寄せ、十分の期待をかけてよかつたのであるが、天命によつてそれは実現すべくもなかつた。返す返すも残念千万である。

#### 四、心残り

私は種々の事情の為に、唯々意うばかりで、御生前遂に先生の恩愛にお報いする事が出来なかつた事を、今更遺憾に存するのであるが、一昨年秋、お見舞のお印までに当地名産の粗葉を少々お送り申上げた。もつと美味な銘葉もあ

るにはあるが、あんななど入つていたので、お弱りになつておいでの先生がお腹でもおこはしになつてはとの顧慮から、ことさら軽い煎餅の類いを選び、これは文字通りの粗菓に過ぎなかつた。余りのお粗末さをカバーすべく、私はそれに一句添えて見たくなつた。然し俳句は元来私には苦手で、ふだん句に親んでいないものだから、おいそれと出来やしない。心ならずも、風情のないままで発送して了つた。すると意地悪くその直後に句らしいものがふと出来た。

### 菊作り給はぬ老師いたわしく

というのであつた。

先生がいかどの園芸家として自他共に許していた事は周知の通りであつて、菊作りに就いても、細かい苦心談を一席拝聴した事があつた。私は出来れば一度先生の御病床をお見舞申上げたかつたのであるが、せめてはこの一句を添えて、まためぐり来る秋に、同じ類いの粗菓をお目にかける積りだつた。然し先

生はそれをも待たずに逝つておしまいになつた。誠に哀惜に堪えない。

(二九六二・六・三、三河の国の一隅にて)

〔附記〕 本文の三に申述べました事は、或は妄想じみているかも知れませんが、煙洲先生が横浜高工校長として、文政審議委員なども兼任したりしておられた現役時代に若し終戦を迎えたとしましたら、湛山先生の蔵相起用と同じように、わが煙洲先生は当然文相に起用されたでしょう。これはどなたも御同感の事と存じます。稿を終えて後に具体的に申添えておく方がよいと気づきましたのでひと言……。

(応化五期 東亜工業KK専務)

## 温故知新

西尾清治

煙洲先生逝かれてより早や一年、昨日の如き感があります。先生の思い出や教訓は数限りなくあり、とうてい書き尽せません。又先生の御教訓は本になり永久に私共への教へとして残つて居ります。

私が横浜高等工業学校に入学した時は関東大震災の後で、大正十五年の春バラック校舎の時でした。そこで初めて鈴木校長先生の温顔に接し、人生の航路はここから始められました。先生は、私共を教育するのに技術者として、経営者として、又社会人として「人物」の育成に一生を捧げられました。勉めて世

の中の偉い人を学生に直接、接しめることに力を致され、その例として、私共は後に総理大臣になられた石橋湛山先生に親しく授業を受けることが出来ました。石橋先生は当時は若くして大きい鞆をさげて、鎌倉から東京に通う途中で、私共の学校に立寄り経済学の話をして下さいました。石橋先生は当時東洋経済の主筆でありましたが、校長は未来の大蔵大臣として紹介されました。誠に煙洲先生の予言が的中しました。在学中に接したその当時の有名人は徳富猪一郎、矢野恒太、岡実、荒木大将、山室軍平、有吉市長等の名士でした。

私の入学当時は経済界は不況の時代でした。昭和二年には経済の大恐慌パニックを来たしました。先生は常に工業立国を唱え私共を大いに励まして決して失望することなく勇氣も持つて進むことを常に話されました。

校外教育として御自分が栽培されたメロンを、私共有志を教官食堂に集めて、その説明をされながら味はされましたが、私は今だにその味を忘れず思い出し

ます。当時は未だ日本ではメロンはあまり出来ず珍品でありました。大陸会で南洋にゴム工業の視察に行かれましたが、その時先生はベッコウの眼鏡を初めて買はれ、帰られてからゴムの講義を数週間に亘り説明されラテックスの言葉が、いまだに私の耳の奥に残ります。ゴムの歴史将来について懇切なる講義がありました。校長先生が講義をされたのは珍しいことでした。当時は、三年の修身以外は講義されませんでした。先生は常に進歩的な教育者でした。新らしがりやでありました。修身の時間には「馬車を棄てて自動車に乗れ」と言はれました。新らしいものと古いものとの区別を教へられました。温故知新は先生の教育のモットーでした。私は常にこれを体得して座右の格言として守つて居ります。私の中学時代の校歌に「温故知新の智を磨き……」の一節がありますが、少年時代意味もわからず歌ひつづけましたが、煙洲先生に依つてその銘言が明らかにされ教を受けました。誠に不思議と言ふ外ありません。

先生は大へんに情け深い御方でありました。私の親友に昭和二年応用化学科入学生に大和田建一君があります。先生は当時根岸に居られました。その根岸の御住いの一丁程先の角が大和田君の家であります。彼は父を失ひ新聞配達をしながら、通学の苦学生でした（現在のアルバイト学生）。先生は大へんに同情され学費を出して、彼を助けましたが、残念なことに彼は卒業前に病気で倒れました。誠にその当時のことを遺族より聞き、ただ先生の高德に感激するのみです。

私の煙洲会の思い出は、戦後のことですが、桜木町駅前の横浜クラブより始まります。この六階より見渡せば横浜の町は一望のうちでした。当時はビルの建築もなく焼野原でした。見わたせば山手の外人墓地、遠く南太田の丘々、港の出船入船……誠に学生時代を思い出すに充分でした。その景色を見ながら若い頃教へを受けた同じ校長のもとで、過去をふりかへりながら将来の教を受け

ました。先生は八十八才の米寿の祝ひをなされてから、追々と弱られました。毎月の煙洲会が待ちどろしいとの仰せで、私共も大いに勇気づけられました。

先生は太平洋戦争については、その発生、処理に付いて常に正しい判断を以て話されました。特に先生と関係深い伊藤正徳著「軍閥興亡史」につき長時間話されました。又終戦時の学生との対話には、涙を流して語られました。(老先生は涙もろい先生でした。)

その当時の思想、教育、産業について新らしい書籍が発刊されると、直ちにそれを読まれ、それについて話をして下さいました。過去に於ける学校に於ての出来事、その処置処理についても繰り返しお話し下さいました。

数多いお話の中でもジンギスカンの氷山を超えて大陸迄の侵略の話は興味津々たるものでした。

万里の長城は嘗て先生も視察され又、煙洲漫筆にも書かれて居りますが、煙

洲会では特にアメリカで発行された古典をもつて来られ世界最大の土木事業又その精神的意味に付き、具さに話され誠に興味の尽きざるものでありました。

先生の煙洲会の最後の会合は昭和三十六年六月二十八日（第二一九回）蒸し暑い日で先生の御宅で開かれ、その時先生は、いつもより弱られた御様子でした。私はすぐおそばで拝聴するの光栄を得ました。題目は「ロータリアンに就いて」でありました。時に日本でロータリクラブの世界大会があり、先生はロータリーの発生より話されました。

「奉仕」についてロータリーのことを、先生の最後の煙洲会であつたことは、誠に意義のあることと思はれます。

思うに煙洲会は（戦後）横浜クラブに、東芝本社に、明治製菓に、川崎商工会議所に、終りには六ッ川の先生宅に実に二一九回の長きにわたりました。私は若かりし学生時代に自由啓発教育をうけ、卒業して同じ先生より三十五年の

長きにわたり連続して、古きをたづねて新らしきに進む教育を受ける光栄を感  
謝せずには居られません。小汀氏の好意により巻末に煙洲会のとときの題目を例  
記して先生の講演をしのびたいと思います。

(電化七期 西尾工業株式会社々々長)

## 煙洲先生と私

田 辺 謙 輔

昭和五、六年と言うと、学生間の社会主義的運動では末期と言おうか、はでな軍事教練反対というような表だつた運動は下火になつて、学生生活をもとにして、その主義主張を学生間に植えつけるような気運が、当時の不景氣な社会情勢を背景にして全国高専、大学の中にあつた。その風潮に私自身もまきこまれないわけにゆかなかつたので、兎角何かにつけ学校内の民主化を叫んだり、校長お声がかりの大陸会や満洲出兵に批判的であつたり、学校間の對抗運動競技の応援団にもそつぽを向くといつた調子であつた。学校内の食堂や越後屋と

いつた出入の洋服屋も不評判だったので、不売同盟を起してこれを追払ひ、生徒自身の経営による消費組合を起したのは、幼稚な社会主義的協同組合の考え方によるものだつた。こうした情勢に外部は乗じないわけは恐らくなかつたであらう。創立委員長であつた私は、数度先生に組合設立についてお願いがあつたが、学生運動について批判めいたお言葉は聞いた記憶が全くなく、むしろ奨励されるような口吻でさえあつた。ただ専務理事として、当時先生のお宅のあつた磯子芝台の御近所に居られた今井氏を極力すすめられた。先生は今井氏を古武士的風格ある人物と称せられたが、まことに誠実そのものの方であつた。然し思想的な方は一向に無頓着で、ただ会計事務に対してのみ厳正で全く間違ひというものがなかつた。後に組合理事の中から赤の学生が出て、大岡署あたりで御世話になつたりしたが、其頃としては珍しい学校内の消費組合として、学校、学生間に相対立する事もなく、永く続いて生徒の生活上に便宜を図る事に

なつたのである。こうした思慮の足りない一学生のおもいつきに対してさえ、深い思いやりを持つと同時に、将来を洞察され、急所は必ず押える達見には、後に気がついて改めて感服したりしたものである。

先生は、又程よく生徒を煽動といおうか、激励される事が好きであり、お上手でもあつたように思う。やはり昭和六年の九月当時附設されてゐた工業教員養成所が、予算の関係で廃止されるように大蔵省で起案されてゐた。同様の運命にあつた東京商大の商業教員養成所とか、東大の農業教員養成所の生徒と連合して、各方面への陳情と集団デモを試みた。第一回の教養生として、最上級だつた私は、この反対運動にもリーダーとして騒いだわけであるが、生徒大会の開催中、先生は私を別室に招いて、二百円の金を運動資金として渡された。今でも安保斗争に学生が参加するのを、よく青年のレクリエーションと評する向きもあるが、やはり陳情とか、デモは青年の血を沸かせるものだつたので、

これには大いに感激して、まさに油に火をつけたような結果になつた。後に、この事が新聞社に知られて、大いに先生に御迷惑をおかけした事であつたが、やはり工業教育の大計を誤まれる事を恐れられて、私達をアジられた事は事実であつた。

当時母校の建築科は中村順平先生を中心とした特色ある建築教育を行つて、全国大学高専には極めてまれなものであり、我国の幼稚な建築界には予言者的な開拓者的な存在であつただけに、抵抗も激しかつた。中村先生の教育方針に反対する生徒の一团は二年に一度位は必ず起るのが常であつた。又私達教員養成所生徒に対しては、将来工業学校の教師を養成するのであるから、建築家を養成する本科と同様な教育を必要なしとの考えであられたか、全く無放任の状態であつた。こうした生徒の陳情を先生は快く聞いて下さつて、現在の林豪蔵先生を招いてこの方面にあてて下さつたのであつた。煙洲先生は中村先生の建

築教育家としての識見と手腕に深く傾倒されて、凡てを托して居られたが、やはり学校行政上の問題と考えられたのであらうか。

私も随分勝手な事を数多く先生の宅に持込んだが、一度として素気なく取扱われた事はない。常に快く話を聞いてくれて、受け入れて下さつた事はむしろ不思議な念さえ感ずる程であつた。

然しふりかえつてみると、生徒であつた頃より卒業後、先生に学んだ事の方が多かつたように思う。

私は建築科を出ながら、しかも中村先生を前のような事情で、白眼で見ながら、何時の間にか、画家として世に出て来た。芸術家として作品を発表する唯一の機会である展覧会は、晴れの舞台であり、自分の凡てを知つて頂く場でもあるので、招待した友人、知己が来ない時は非常に淋しい思ひをするものである。

私の招待状に対しては、先生は一度もお見えにならなかつた事はなかつた。既に御身体の不自由になられた先生が、杖をつけて会場においでになると、全く恐縮して頭の下がる思いであつた。この事は晩年六ッ川のお宅にこもられて、外出不能の時まで続いた。進呈した拙作は常に大事に取扱はれて、御住居のどこかに必ず飾つてあつた。とかくプレゼントしたものは、他人にやつたり、どこかにしまつておいて陽の目を見せぬ事が多いのに、先生に限つて絶対そうした事はなかつた。

先生の芸術に対する鑑賞眼は疑問ではある。晩年御愛読の文芸春秋は安井曾太郎画伯の表紙絵で飾られてあつた。これはどうもわからぬと時々私に語られたが、先生には形のはつきりしたものでなければ、御理解出来なかつたのであらうか。若い頃歐洲留学された思い出話に、イタリー、ミラノでみたラフェルの絵について構図の実にこまかい点まで、よく話される事があつた。芸術の

深奥に入るには、せまい入口からぎりぎりに徹する態度は必要である。つまり戦争の進め方では参謀の立場であらうか。

然し一方広く見て、多方面に理解ある立場もあるわけで、いわばこれは大将の立場である。この両方面が兼ね備わつて完全なものとなるのであるが、芸術家としてとるべき態度は前者である。先生は後者の大将の立場をとつて広く物を見、常に芸術のポイントをつかんで居られた方であつた。

先生の書「名教自然」は必ずしも私の感心する所ではなかつたが、おなかりになる直前まで御寢室にかけられたその書にはいたく敬服した。お宅には格調の高い、そして激しい書風の権藤成郷氏のもの、近代書家の一人である徳富蘇峰氏の書とならんで、これはまことに老熟された心境を語る、愛情のあふれたものであつた。拝察するに身体が不自由になる前の八十才位の時のものが一番完成されたものではなからうか。おなくなりになつた後、反古同様になつた

もの二、三幅を発見して、博人さんが表装された。これは晩年のものでさきの名教自然の書のやうに実に見事である。かくお手許に少しも作品をのこさなかつた事も如何にも先生らしい。晩年の頃、お習ひになつてゐた古法帖をお知り合ひの皆さん達におくられたとか、如何にも括淡としたこだわらぬ御心境に達せられたやうに偲ばれて、ほほえまれずに居られない。渡辺華山も先生のお好きな画家の一人であつた。私の渡欧に際して、饒別に頂いた書に、「志拙なれば、画即ち醜なり。心浅ければ、画即ち俗なり。醜と俗の二病を去らんとせば、須らく当さに万巻の書を読み、千里の路を行くべし」と。華山の文でありまことに、芸術修業のポイントである。

又横浜の大豪商であり、日本美術の偉大な保護者であつた三溪、原富太郎さんと御親交を結ばれて居られた。その頃私自身は青臭い書生であり、芸術觀も幼くて、先生のおつしやる三溪氏との御交友の話は深く印象に残るものは少

い。然したしかに芸術観について、三溪氏と相互に影響し合つて居られたと想像されるのである。権藤、徳富両氏の場合にも同様であらう。かく芸術上の御交友の上でも、先生は恵まれて、増々いわる大将としての資質をみがかれ、核心をついて、芸術の深い理解者となられようとされたのではないかと拝察される。先生が建築の中村順平先生を非常に高く評価された事など思い合せると、芸術を見る目は、参謀のそれではなく、たしかに大将としての立場であつた。

書き来たつて先生の愛情を偲びつつ、晩年先生の祖国に対する熱情と、門弟に対する愛情を痛切に感じた事がある。煙洲会の席上、談たまたま終戦直後母校生徒が首相官邸を焼打した事件に及び、涙を浮べてその当時の青年達を話し、祖国の将来を語つた事であつた。九十才の老齡に及ぶ方の涙を見ようとは、私も思いも及ばぬ出来事であつた。

(建築五期 横浜工業高校)

## 煙洲先生の思い出の中から

河村 鋼 男

昨年八月二十九日突然先生の訃が報ぜられた。私は一瞬、先生が六年前お元気で当支部を訪問された時のにこやかなお姿が脳裡に浮び、今後永遠に接することのできない先生の温顔を懐しみかつ、悲しんだ。先生のある円満なお顔の中には、他のいかなる権力や圧力にも屈せず、所信を断行する激しい気魄と強い信念のひらめきが宿されていることは、先生に接した誰もが感じ取つたことであらう。

横浜高工開設当時、自由独立、無試験無処罰主義を提唱、実施された。あの当時としては、劃期的な教育方針であつた。もとより文部省その他識者の危惧

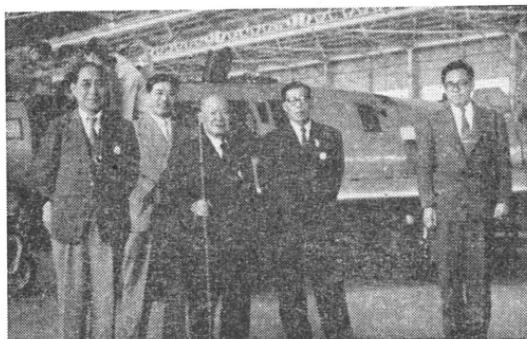
と反対に屈せず、強行されたことで、ここにも先生の御性格の一端が伺われるのである。

私は、先生が名古屋に御来訪されたときの一事が今でも、心の中に刻まれている。それは、宿所で長い階段を上つて部屋へ行くときのことであつた。近くに居た同窓の一人が手を取つてお助けしようとしたら、先生はその手を遮り、私はまだひとりで上ることができると。また、私はひとり気の向くままにやる方がいいんだと申されました。八十六才の高齢の先生になおかつ昔の気魄が感ぜられたのであつた。

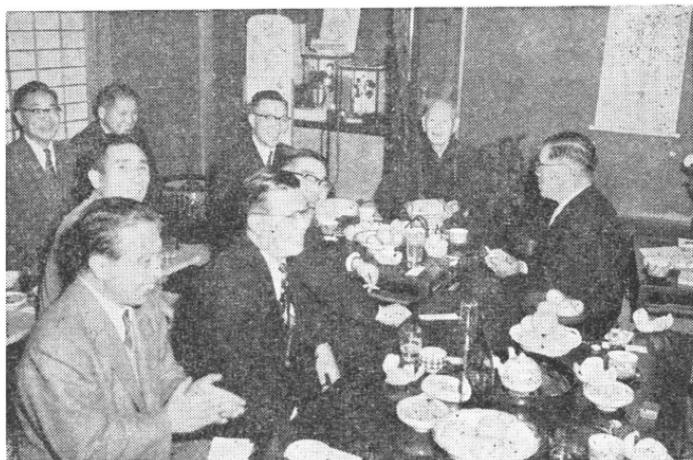
私は今でも、先生が御在世中、六ツ川のお宅に通ずる坂道をひとりコツコツと気の赴くままに、瞑想にふけりながら上つて行かれるお姿を、はつきりと臉の裏に画くことができるのである。

(横浜工業会東海支部長造船二期 河村産業社社長)

三菱重工業名古屋製作所にて  
昭和三〇・五・九



左より 山中直次郎氏、河村氏  
煙洲先生、阿部先生、上条勉氏



第二百回 煙洲会(於先生宅)

## 故煙洲先生を憶ふ

小 貫 隆 治

私が学生時代の大部分を過した磯子芝生町の下宿先が、かつて煙洲先生の御自宅の隣で、又先生とは特に心易く交際さしていただいていた家であつたことや、その家の下宿兼家庭教師的役目を申付けられたのも、多分に先生の御声ばかりであつたことなどで、私にとつての煙洲先生はなんとなく、身近な人のように感じられていました。

或る日数人の学友が学校の裏山に登り大いに浩然の氣を養つていたのはよいが、農家で丹精した畑を大分踏み荒したらしく、御百姓さんに大声で叱り飛ば

されその上名前まで聞かれた。止むなく私が姓名を云ふて放免されたことがあった。その後しばらくして校長室に呼ばれ、いろいろ雑談の後、畑の話になり、先生から「御百姓さんの立場も考えてやらねばなりません」と御叱りを受けましたものの、その当座は御叱りを受けたような気がしませんでした。

たまたま私が卒業記念写真の編集委員をやつて居りましたので、卒業間近になつて煙洲先生の御揮毫をいただきに参りましたところ、快く書いて下さつたのは「**自覚第一義**」と云ふ書でした。そのとき御伺ひした御話しの内容は明確に覚えて居りませんが、話しの途中ハツと思ひ当つたのが畑を荒したので校長室に呼ばれたときのことでした。多分一カ年半か二年程前の御言葉の真意が判つたような気がして恐縮したことがあります。

校長先生として講堂で御話しになる訓話にも少しの堅苦しいところがなく、日常ありふれたような話題を通して人間の本性にうつたえられるような御話が

多かつたようです。従つて学生時代よりは卒業した後、実社会に出てから時に  
応じて非常に印象深く思い出され、且役立つ事柄が多くありました。その内  
も特に私の心の寄りどころともして居りますのは、卒業記念にいただき今だに  
大切に保管して居ります「**自覚第一義**」の御言葉です。

煙洲先生の御薫陶を受けて以来約三十年になり、停年の話も人事でないよう  
な年令になりました現在でも、尚ほのぼのとした先生の御人柄を身近に感じら  
れて、つたない筆を取りました。

ここに謹んで煙洲先生の御冥福を御祈り致します。

(機械一二期 神奈川県工業試験所機械工作課長)

## 「煙洲先生と私」

吉原謙二郎

故鈴木煙洲先生と私との巡り合せは、先生が大正の初め横浜高工初代校長として赴任され、磯子区中根岸町に居を構えられた頃で、当時、私の家は先生のお宅の筋向いにありました。私が十才のとき、私の父が亡りましたが、そのとき私の母に「子供さんの教育について今後相談して下さい」との御話があつた由で、その御話から私は煙洲先生が校長をされて居つた神奈川県立商工実習学校（現・横浜国立大学）の電機科に入学することになりました。

商工実習で卒業期を間近に控えた昭和五年の二月頃の事でありました。昭和

五年と云へば景氣の悪い年でありまして、殆んど卒業生に就職がない、今考へて見ても考へられない時代で、将来への不安から悪童連が、事もあろうに神聖であるべき教室内で賭博を開帳し、このことは、学校始まつて以来の不祥事であり且つ教育上許されるべきでない、当時の横浜貿易新報の社会欄で大きく取り扱われ、県当局の方針は強硬で「関係者は全員卒業をさせることは出来な

い」との記事が出されて、私達、同級生は全く不安な氣持で卒業期を迎えました。この時、先生は毅然たる態度で事に當つておられたようで、特に横浜貿易新報に三日間に亘つてキリストのマタイ伝を引用され、「若し将来ある学生を退学させよとのことなれば、私の前でその是非を卒直に云つてもらいたい」との意味の声明文を契機として、強腰の当局も次第に折れて、一大不祥事件も若い将来ある青年を一人も傷つけることなく、先生の暖い抱擁の中に育まれて卒業することが出来たのは忘れ得ぬ思い出であります。先生は三無主義の信念を持

つて教育を進められ、御在世中に私共に残された数々の御薫育は、長い歳月を経た今でも、菊の香の香りの高きに似て、私共の心に残つているのであります。

昭和五年頃は非常に不況の年でありました。或る日、先生からお呼び出しを受けて、応接間にお待ちになつていた先生のところへ参りますと、

「横浜高工の教員養成所を受験してみないか」と言ふ相談がありました。私は家庭の事情から働くところのお世話をお願いしてみたところ先生は快く「東洋電機、日本ビクター、マツダランプ」等を紹介して下さいましたが、深刻な不況期であつた為に首切りこそあれ、就職の問題となると、担当者との面接すら叶いませんでした。その年の九月に入つて漸く蒲田のある工場に就職出来ましたが、その会社も翌年の十二月には解散、閉業と云うことになり、思案に暮れて先生に御相談致しましたところ、私が飛行機関係に進みたい希望に対し、横浜高工の造船科を受験したらどうだ、との御言葉で奮起して急ぎ受験準備に

掛つたのでありますが、意に適はず見事に落ちてしまいました。しかし一週間後補欠で入学が許されたことは、私の一生忘れ得ぬことであります。

昭和十年、無事卒業出来ましたので早速、先生のところへ御挨拶に伺つたところ、漸時して書齋から一枚の色紙を携えておいでになり、喜色を顔に一杯にしながら、私を祝福して下さると共に「人間自愛廻天力」としたためた色紙を下さつたのであります。以後これがどんなにか私を力づけてくれたことか、私の宝の一つになつております。

終戦後、飛行機関係の仕事が禁止されましたので、私は従業員と協同で、協同の事業として現在の岡村製作所を創立しましたが、以後、多くの困苦に遭遇する度に、六ッ川の先生のお宅にお伺いして御指導を得たことによつて、無より有を生んだ今日の岡村製作所が出来たのだと、私を始め古い従業員達は感謝致している次第です。毎年十月の会社創立記念日に元気な姿をお見せ下さり、

いろいろ有益なお話をして下さつたことが、今日どんなにか私共の心の糧になつたか、測り知れません。

昭和二十六年頃の事ですが、当社が未だ発祥の地、岡村町にあつた頃、隣りの岡村中学校の卒業式に列席された帰途、私達の工場に立ち寄られた事があります。そのとき私は「私は先生に学校に入れて頂いたから、今日の私があるのです。私は先生の教育の成果の一つとして、何とか横浜に永遠に栄える立派な事業を残したい」と申し上げた所、先生は私に、「君、心配することないよ、ワシの学校は、教授の子息は全部無試験で入れるんジャよ。親が勤めている学校でその息子が教育を受けると言ふことは良いことなんジャよ。そうすれば学校も良くなつて行くんジャ、学校で一番恐いのは火事ジャよ、教授も子供が入れば細い所まで気を配つて、学校の面倒を一層よくみるからな、だから教授の息子は無試験で入れるんジャよ、すると君はワッシャの子供だと思つているんだ。

からな」そう言つて笑つておられました。

私は胸に熱いものがこみ上げて、どうすることも出来ませんでした。

師の恩に報いる為に、必ず必ずこの横浜に立派な仕事を残してみせる、と強い衝動に駆られ、今日もなお、先生のお言葉が私の心の灯となつていっています。

この様な先生の御話から、私は困難な問題に直面すると、六ッ川のお宅に参りました。或る日、先生が私に一つの「書」を示され、そして困つた時はこの「書」を良く見たまゝと言はれました。

この「書」には「神知靈覚湧如泉不意用付自然」と書いてありました。之の詩は明治維新の勲臣、横井小楠の詩で、困つた時には作意を用いなくて自然に付すことによつて神の様な知恵と靈による覚りが湧いてくるものだ。と先生は説明されて処世の道を説いて下さいました。私は事業経営を続けている途上



で、幾度か静かにこの「書」と対面した事であります。

今日、先生の思い出を記すに当つて、最後に私の申し述べたい事は、教育の成果と言ふものはその結果にあり、と言はれて居りますが、子弟の一人として私の務めを全う致したいと存じて居ります。(造船四期 岡村製作所社長)

上 昭和二八・一・二五

岡村製作所に於いて挨拶される煙洲先生

## 煙 洲 会

小 汀 浩 一 郎

煙洲先生に関する思い出を書くとすると、煙洲会の幹事として先生に接した事である。煙洲会については、煙洲漫筆の（七七―八十頁）中に、

「川崎市の工場に勤務して居る高工出身者の有志が、一夕私を川崎大師附近の或料亭に招き、小集会を催し、懇談した事があつた。それは昭和十四年の六月二十九日であつた。その翌月から毎月同処で会合し、その度毎に私の些々たる感話をする事が恒例となつた。而していつの間にか、この会合が煙洲会と名付けられた。当時は菅要助君と広部俊十郎君が専ら世話役であつた。愈々煙洲

会が毎月正確に開催せらるる様になると、菅君が幹事長格で、安部元吾君が幹事として、専ら開催の準備に奔走せられた。阿部君が兵庫県へ転勤せらるる様になつた後は、平田義雄君が代つて今日に至つた。(中略)

煙洲会は本年(昭和二十五年)三月を以つて九十回に達した。毎月の例会には、多い時は十五、六名、少い時には六、七名の出席である。古い出身者が多かつたが、長い間には会員の移動が自然に生じ、特に終戦後は新しい出身者が著しく増加した。会員には別に入会の規定がなく、幹事が案内状を出すのみで、希望の同窓者は、幹事まで申出るのみである。例会には恒例として、私は何か一言感想を述べる事にして居る。適当な感想がない時は、私も多少当惑するが、兎に角今迄お茶を濁して来た。浅薄な感想でも私相應に多少の努力をしなければならぬ。それが又私をして酔生夢死の老境を鞭撻するものである。一方先輩後輩が少数であつても、一堂の下に相会し、お互に親密を加へ僅かの時間で

あつても、煩忙な平素の業務から離れ、心頭の轉換をすることは、処世上の一工作とも考へられるのであろう。他方我々の日常に心形を勞している業務上の連絡や、氣付かざる機智を、発見する機会もあろう。

兎に角何の会でも長い間継続すると、其所に何物か伝統と言う物が、自然に出来てくるものである。煙洲会も十数年続いて来た。文字にも言葉にも表はせないが、菅、広部、阿部、平田君等に依つて醸された、会の匂ひが出来て居る。時代と共に匂ひの移り変わる事もあるが、煙洲会の匂ひは、矢張り煙洲会の匂ひであろう。伝統は伝統を追うものである。私は今日最早や八十才の頽齡である。仮令長命であるとしても、間もなく老衰して、手足も不自由で、集会には出られなくなるであろう。その様な節にも、煙洲会の同人諸君は、十数年来育て上げた伝統を棄てず、相変らず時々でも会合して、お互の親睦を重ね、人生を楽しむ一つの機関として、存続せしめては如何なものであろうと私は提案し

たいのである。同じ十数年とは言え、終戦を前と後に置くこの十数年は我々国民生活に、又業務に、最悪の奈落に苦しんだもので、我々同人には更に一倍の思ひ出と親しみがある。特に老い行く保守頑迷の私に、新進気鋭の若き輸血をしてくれる煙洲会同人は、忘れ難き私一生の思ひ出である」と書いてあります。

煙洲会は、昭和十四年六月に第一回の会を催してから、先生逝去の前々月即ち昭和三十六年六月迄、満二十二年に亘り、二一九回の例会と別に、四回の先生誕生日の会とで、二二三回の会合を致しました。その間に、戦争中に一回（昭和十九年十一月）と、敗戦の年、昭和二十年一月を最後に、昭和二十二年十一月に再興する迄と、先生御病気の為昭和二十八年十一月より翌年三月迄四回休んただけで続けました。

私が幹事を引受けましたのは、昭和二十六年三月第一〇一回からで、前の幹事の平田義雄さんが山形県に転勤されてからであります。会を催します場所は、

第一〇一回以降は、横浜倶楽部、進交会館（横浜市大の倶楽部）、川崎の東芝本社、明治製菓、ニュー川崎で（ニュー川崎では、菅要助、佐藤興次両先輩の御援助により）夕食を共にして先生の御話しを御伺い致しました。

昭和三十三年七月第一八四回の例会からは、会場を先生の御宅に移して、夕刻茶菓子を共にして最終会迄御話しを伺い、又、三十二年九月十一日には、横浜ホテルニューグランドに先生を御招き致し、野村洋三社長にも御出席を頂き、誕生日の会を三回、御自宅にて一回催しました。

此の間、先生の御話の内容は歴史に関する事、時局に関する事、教育に関する事、学校経営の裏話、又、文学に関する事、古き友人の回顧談等に亘り、話の内容の豊富な点多岐に亘り、漢詩を宙に吟ぜられ、孔子、孟子、老子、莊子等の言を引かれ吾々に処世の大道を説かれ、特に戦後の混乱の時に於て、ともしれば、虚脱状態にあつた吾々に、痛烈な刺激を与へて頂いた事は忘れる事

が出来ません。

又、先生の御遺志でありました煙洲会を、先生亡き跡も続ける件につきましては、昭和三十六年十月四日、横浜ニューグランドにて鈴木家御招待の追悼会に於て、決定をみまして、先生の御子息鈴木博人氏を迎へて、引続き、会を重ねています。

鈴木博人氏は、容貌、身体つき共先生そっくりで、先生の温顔を偲ぶようですが、  
としています。

復活しました第一回、通算第二二一回の会合には、第二代校長の富山保先生をお迎へして、先生の追憶談を御聞きし、その後、毎回、母校の工学部長及び各科の代表の先生を御招き致し、学校の近況を御話し頂き、学校と卒業生とのつながりと、相互の親睦をはかっています。

次に個人としてこの思い出を述べて見たいと存じます。会の度に、先生の送

り迎へを致しましたが、幸い煙洲会は天候に恵まれて居ましたが、たまに雨の降る時は、六ッ川の坂道はぬかつて滑つて困りましたが、先生は、手を取つたりして老人扱いをされる事を嫌れ、特にお帰りの時、必ず坂の下にて帰る様言はれ、菅さんからは、御高齢であるから必ず御宅迄送る様言はれ、困つた記憶がございます。又、入学の時から先生に並々ならぬ御心配を頂きましたものがあります、会社の仕事がかまく行かない時、家庭的に困つた時等、唯だ先生の温顔に接しているだけで悩みが、解決致しました。

今も時々日野の墓地に先生を御訪ね致しますが、蘇峰先生の筆になる、煙洲鈴木達治之墓の碑の上に、松風のみで、先生の温顔に接する事が出来ないのは残念です。

(機械一〇期 東芝タンガロイKK取締役)

## 回 想

荒 井 文 治

昭和五年四月十日、この日私は始めて校長鈴木達治先生にお目にかかったのである。私が横浜高等学校機械工学科に合格し、その入学式のあつた日であつた。当日の式辞は今憶えていない。当時、修身の講義を鈴木校長が担当され機、応、電、建、造五学科の新生一八五名が、揃つてバラック講堂に会し拝聴した。最初の時間に学校便覧を一冊づつ全員に下され、学校の教職員の一人一人についての紹介から始まり、「自由教育」、「三無主義」に関するお話が一学期の間続いた。

さてこの修身は二学期からは大西友太先生に引き継がれ、三年の二学期まで担当されたが、三年の三学期で再び、毎週鈴木達治先生のお話を伺うことになった。この間には卒業後、社会に出てからの対人、対社会関係などの極めて卑近なお話をされた。

例えば人の家を訪問するときは約束の時刻よりわざと五分おくれて行くこと、これは訪問する家に準備をする余裕を与えるためだそうである。

玄関では帽子や上に着て居つたものを置き、奥の部屋まで持ち込まぬこと。

洋食に関してはパンの喰べ方から、肉につけ合せのジャガ芋はナイフで切ると鋼の味が付くのでナイフで割つてたべるもの、スープは音をさせずにすすめるものであるが、そば、うどんの類は大いに音をさせてすすることが、御馳走してくれた人に対する礼儀である、と云つたお話も食いしん坊の私には、つい先日伺つた話のように憶えている。

また当時は贈収賄の問題が新聞紙上を賑わしたものであつた。煙洲先生はこのことに関して、早速意見を講義され見解を明らかにされた。物を贈ることは人に対する好意の表われなので、それは分に應じてやればよいので、結論は程度の問題であると申された。

吾々学生には毎水曜日の夜、校長宅に伺い直接会談のできる時間が与えられた。私はこのチャンスを一度も使わなかつた。今にして大へん残念に思つてゐる。

私達の卒業式の二箇月前に煙洲先生は退官され、バトンを富山校長に渡された。併し式の当日煙洲先生は私達卒業生への祝詞に、明智光秀の生涯のことを織り込まれた大へん印象的なお話をされた。

「諸君の人生にも、光秀が立つたような逢坂に立つ時が何回かあるかも知れない。その時にです。思い邪なしで判断することである」。

これが人生を正しく歩む道であると説かれた。

このことばは今もことある毎に思い出し、人生航路の指針として道を踏み誤らぬよう心がけている。

私が最も煙洲先生に接近し、いろいろお話を伺うようになったのは卒業後であつた。旧制工專が学制改変で新制大学に移る折は頻繁で、特に研究テーマを選ぶに當つては学問の自由のこと、学は好んでやる可きものであることなど、心のより所としていろいろの揭示を与えて頂いた。

かくして当時教室主任のすすめた私には気の進まなかつたテーマを断わり、私がかねてから折あらば試みたいと望んでいたリヒテンベルク放電図形の研究に敢然と取り組んだ。十五カ年の集積の学位論文も皆さんの好意に支えられてまとめることができた。

このような結果をもたらした原因には私に精神的に相談できた良き師が居ら

れたことだ。

私に勇気を与え、好きな研究が続けられ、学を好んですることができたためであると考えている。だからこの間、学（研究）は苦しみではなくて全く、楽しみであった。

私は感謝の気持ちから折にふれ、先生をお訪ねしては論文の別刷ができ上げる度に持参しお好きな磚茶、碾茶を私の点前で差し上げた。

私の理博の学位授与の吉報を先生の存命中に捧げられなかつたことだけが、かえすがえすも残念でたまらない。併し先生の霊はどこかでほほえまれていることと私は信ずるのである。

（昭和三十七年六月三十日記）

（機械十三期 横浜国大助教授理博）

## 威あつて猛からず

阿 部 元 吾

「大きくなつたら僕は大将になる」「俺は総理大臣になる」

私達が幼い頃には良く人に聞かれると、こんな返事をしたものである。中には「電車の車掌さんになる」とか「自動車の運転手になる」等といふ無邪氣な望みも多かつたものである。

総じて青少年には何か、英雄偉人とでも云うか、一つの目標があつた様に記憶している。例えば、西郷さんとか、高峰博士とか或はハンニバル、ニュートンと云つた様な人達を尊敬し、心の支えとしたものである。

今の青少年は果してどんな考えをもっているのであろうかと思う。何か目標のない、手取早く金もうけをする様な事に先走つてしまふのではないのだろうか。

西郷さんが長島に代り、ニュートンが坂本の九ちゃんに取つて代つてしまつていゝるのではなからうかといふ気がする。

私の長男も今年高校二年になるが、誠にもつて呑気なものである。将来何になるんだと聞いてもはつきりせんし、ボクシングと野球と自動車については、実に詳しく知つてゐるが、どうも勉強の方は苦手らしい。私達のその頃は受験勉強でギューギュー云はされて、此の年になつても時折試験の夢を見て冷汗をかく事があるが、そんな目には会わせたくないと思ひ乍ら、親馬鹿チャンリで余り呑気なのを見ると、つい叱言も云ひたくなつてしまふ。

その長男も昨年辺りから、野口英世博士に関心を持つて来た様で、自分では

医者にも科学者にもなる心算はないらしく、唯ヒユーマニステックな憧れであるらしいが、親にしてみれば役者になるとか、歌手に憧れをもたれるよりは、気が安まると云うものである。

私は多感なる青年期に於て、高工に学び煙洲さんに指導され、以後も先生の言行に接していた事は誠に有難い事だつたと思う。先生も仲々意地張りな処もあつたのではないかと思はれるのだが、私達が接した頃はもう御年配でもあり所謂流水の心境とでも云うか、可成り淡々とした心境にあられた様に思はれる。偉い人と云う中にも近寄り難い「ユワイ」人と、すがりつける様な抱擁力のあるオヤヂ型の人がある様だが、先生は威あつて猛からず、といふ感じがしたものだ。気安く先生と話かけられる反面、後からついて行く時は、それこそ三尺下つて師の影をふまずといふ事が、自然に出来たものである。

私共の年になると、大抵は何人かの部下をもつている人達が多いと思うのだ

が、部下から信頼されて仕事をするには命令一本でも出来ず、さればと云つてオトナシ過ぎて事なかれでも、頼りにはされなくなる。

先生に教えられ、又先生を偲ぶ事によつて、早く威あつて猛からずの境地に達したいものだと思ふが、生来の不敏で仲々思う様には行かない。

此の頃の世相も変り、若い人達の考え方も變つて来ている様だし、又自分の子供がそろそろ大人になりかけて来る昨今は、先生に頂戴した「思無邪」の書を眺め、先生を偲ぶ事が多いのである。

(電化一五期 日本金属株式会社取締役)

# 思 無 邪 念

溝 口 哲 夫

我々は先生の教育を受けた最後の生徒である。

門扉のない門柱だけの校門を不思議な気持で入学した。一風変つた学校であつた。

卒業後、社会に出て間もなく、当時メロンの栽培に興味を持つて居られた頃のある日曜日の朝、山の上の先生宅をお訪ねした事があつた。

時間に遅れたので山を駆け登つた為、応接間でいつまでも息切れがする、汗が流れるので閉口した。先生は私の姿を見ると開口一番、「思ひ邪なしの念」

と云はれて次のお説教を頂戴に及んだ。

約束の時間におくれたからと云つて、かけ足で山を登る気持は判るが、左様なときはむしろ悠々と漢詩の一節でも吟じながら、山を登る位のゆとりを持ちなさい。時間におくれたからそれを取り戻さうとする焦りは見苦しいと。

生来、せつかちな性分の私には非常によい教訓で、今でも時々思ひ出す。

後日、親父の年忌で田舎のお寺に行つたとき、其処にはからずも「思無邪念」の額の掲げてあるのに気付き、独りで苦笑しました。

(電化一五期 東京工材株式会社専務取締役)

## 先生を偲びて

長谷川 光 次

煙洲先生の、米寿のお祝いがあつたのは、三十三年の七月のことだから、もう四年になる。あの日、県立音楽堂での祝典、それに引きつづいて催された、ニューグランドホテルでの祝宴における、先生の御元氣なお姿に接した者にとつては、次に予想される十年後の、白寿の祝典を確信こそすれ、それから僅か三年にして、御他界されようなどは、全く思いもよらぬことであつた。昨夏御永眠の報を受けたときも、六ッ川のお宅で、先生の御遺体に向つて合掌するまでは、私には本当のことのように思えず、悪い夢でも見ているような感じ

であつた。あれから既に一年、先生を憶えば、在りし日の面影が、矢張り生き生きとして、思い浮かぶのである。

米寿に際し、出版せられた隨筆集「煙洲殘筆」の原稿について、先生から御相談を受けたのは、三十二年の十二月中旬のこと、それから週に二回づつ、先生が私の学校まで、お出かけになつて口述せられるのを、私が筆記するといふことで始められたのであつたが、先生の時間厳守は実に徹底して居り、遅刻は勿論、早過ぎるといふこともなく、約束の午後二時には、かつきり御来校になるので、初めの頃は相当に窮屈な思いをしたものである。何かの都合で二、三分過ぎて学校へ駆けつけると、もう私の部屋からは、葉巻きの香りが流れていて、私は愈々慌てるという具合であつた。一体、先生は物堅いといふのか、几帳面とでもいふのか、そうしたものを多分にお持ちのようで、私が筆記するのに要する原稿用紙の類にいたるまで、わざわざ御持参になるといふふうであ

つたが、時間を守るに厳しいことも、先生のこうした姿の一つの現れなのでしようか。

年が改まると寒い日が多く、学校への行き来も、随分御苦労なことと思われ、又学校の貧弱な、ガスストーブでは、私でさえ耐え難い程のこともあり、お風邪でも召してはと、今後は私が六ッ川のお宅へ参上することを、再三申上げたのであつた。しかし、先生には学校まで歩くことは、恰好の運動であり、健康のためだから、とて仲々お聞き入れにならなかつたのであつたが、六ッ川のお庭のつつじが満開の頃には、いつとはなしに、先生のお宅で筆記するようになつていたのである。そうした日の、あるときは、ベランダのソファに凭つて、悠然と葉巻きを手に、暖かい日差しを硝子戸の中に受けながら、又或る日は、先生のお部屋で炬燵に足を暖めながら、口述をつづけられるのであつたが、それは長くても一時間足らずであつたし、先生の口述は私の筆記速度にぴつた

りで、しかしこれは、先生が私の筆記能力を逸早く見抜かれての思いやりから、無理のない速度で進められたらしいことは、十分感じとれるのであつたが、それはそれとして、この口述筆記は、無試験無採点であることには疑いの余地なく、私には実に気楽な、たのしいものであつた。

五月の初旬に、先生の口述も一応終つたので、一括して原稿の整理に移り、それが市大の山口さんの編集、春陽会の田辺さんの装幀、鈴木洋二さんの肝煎りで、「教え児たちは称える」の章を加え、煙洲残筆として上梓せられたとき、先生は如何にも御満足の御様子で、その頃のお顔色の冴えは、格別であつたと私は思つている。

その後も、時にはお手紙の代筆などの依頼があつたりして、六ツ川にお伺いしたのであつたが、昨年の春頃から、あれほど愛用せられた葉巻きを、手にされることの少ないことに気づき、いささか引つかかるものを感じたことはあつ

たが、その八月、御逝去を知つたときは、愕然とせざるを得なかつた。

しかし、先生は今度も、「疾きこと風の如く、静かなること林の如し」、出  
処進退は又かくあるべしと、あの温顔をほころばせて居られるように、私には  
思えるのである。

(昭九建卒 横浜工業高校校長)

## 不滅の名教自然

川 村 秀 義

私が工業専修学校に入学したのが、大正十五年四月、卒業が昭和五年でありましたが、更に応用化学専科に二年在学しました。その間に種々の想い出があるのでありますが、工業専修に入学したい希望があつたことは、何んと申しましても、横浜高等工業学校の教室と、実験設備で勉強したいからでありました。かような状態でありましたので、高工の先生方や、学生はさぞ御迷惑も多かつたことと思いますが、自ら高工の校長であられた煙洲先生は、敢えて勤労学生に勉学の門戸を開かれたのであります。

卒業以来三十余年、今でも明瞭に記憶されておりますことは、軍事教練が厳しくて逃げ出したこと、その後、菊地大尉が着任されてから、滲みでるような人柄に引きつけられて、教練にも興味をもつたこと、父親のように厳しいが、肉身のような愛情のある内燃機関の山下先生、朝顔の花型ラツパの蓄音機を教室に持込んで、歌手の身振り、手振りをしながら、発音を教えてくれた英語の水野先生、正課にない柔道を、放課後、有志を集めて教えられ、シーズンには、道場の畳の上で水泳の型を教えてくれた体操の本間先生、時計のように精密で正確な数学の安川先生、後に商工実習の校長になられた工材の村上先生、我が国冶金学の大家河合先生、河合先生には卒業後も、学校へお邪魔して御指導頂いておりました。或る時、硬度計のハンマーを、床に落とし先生と二人で、床上を這い廻つた記憶があり、戦争中は弊社の顧問として、おいで頂いておつた事があります。その他、沢山の先生がおられました。直接担任して頂いた

先生は、以上のような先生方でありました。記憶を辿りましても、敬慕の念や  
みがたい先生のみでありました。今にして考えられる事は、畢竟煙洲先生の御  
人徳の然らしむるところとの念を禁じ得ません。中でも鈴木京平先生の我々に  
与えた感化は誠に偉大なものがあります。煙洲先生は、高工、商工、工專の三  
校を、三位一体といわれ、有名な三無自由啓発主義で、退任後、名教自然の言  
葉を残されました。三校の校長として御多忙であられる関係から、生徒が煙洲  
校長にお会いできるのは、限られた日数で、従つて副校長である鈴木京平先生  
が、あの独特な風格、論調で常に煙洲先生の主義を説かれ、我々の進むべき方  
向を示されました。最近も御高令の、京平先生に御面接頂くことがあります  
が、その熱情と、論旨の一貫性に少しの変化もありません。京平先生の弁舌は  
談論風発、説き去り説き来り、自から申されるように、煙洲先生に心酔されて  
おられるが故に、煙洲先生の偉大さを語られるのでありますが、また、教育者

としての使命感と、情熱が、かく京平先生をして語らせるのではないかと拝察し、且つ皮膚から感ぜられるのであります。

煙洲先生から、私が直接うけた感銘、我が国教育界、工業界の偉大な足跡を語るとしても、尽せないことを識り、誠に失礼ではありますが、諸先生方、並に鈴木京平先生を通じて、煙洲先生の偉大さを申述べさせて頂きました。煙洲先生の亡き今でも、先生の教えは私の胸を強く押え、自己の微力を反省する時、胸の高鳴りがやみません。

(横浜工業専修機械五期 トーホト精機KK社長)

## 先生の思想を継承する系譜の一員として

田 中 三 郎

わたくしは昭和三年に入学し昭和八年に卒業した。第一次世界大戦後の恐慌不景気の真最中であつた。左右田銀行は取り付け騒ぎを引き起こし、横浜ドックは人員整理で大騒ぎをしており、失業者が街にあふれていた。ほとんどの会社工場が破産没落の寸前まで追い込まれて、青息吐息の状態であつた。商店街の日常の挨拶は「不景気ですね……」であつた。

わたくしはこうしたいわゆる景気循環説の典型的様相を約三十年前に味わっていたわけである。ごく最近知つたのであるが、同級生某君の父親がこの時、

人員整理の対象となつたため、某君は進学を断念しなければならなくなり、家庭不如意も加つて、以来社会主義の道をずっと歩き続けて来たということであつた。

商工実習の在學生は、ほとんどこうした苦しい家計の家から通つてゐる者たちであつた。今から考えれば、「親の心子知らず」で、親のこうした苦心をよそに、私や友人たちはよき時代を満喫して、毎日を送つていたのであつた。

入学当初は、自分たちの校長は非常に優れた人だそうだと噂話を耳にして、心の中では非常に誇りに思つてゐた。しかしわずかに月一回の月首講話の時に顔を見るだけで、どこがどんなふうに優れているのか、まだよくはわからなかつた。

三年生の時に、私の家も破産と等しい打撃を受けた。学校を中退しなければならぬという時に、幸せにも渾大防先生の家で書生をしながら通学させても

らう事になつた。この生活の変化は、わたくしをいろいろな意味で錬えてくれた。社会の実状は、観念的理想論よりも具体的現実論を重視すべきことを、腹の底から教えてくれた。こうした考え方の基盤を得た時に、渾大防先生から時にふれ事に応じて、鈴木煙洲先生の思想と事蹟をお聞きした。横浜市の発展にとつて切つても切れない恩人であり、また学校教育の進歩という点から見ても、けたはずれの優れた存在であるということも首肯できるようになつた。こんなことから、同期生の中では、より一層学校長鈴木先生の思想を理解していた一人であると、自認している。たとえば「三無主義」一つを取つてみても、私は四年生五年生ごろ、これを観念的理想論とは見ていなかった。具体的現実論として生かして行えば、非常にすばらしいものであると理解していた。そしてよく行はれた学友との討論会では、心から讃意を表していた。三十年後の今日、自分が教職にある関係から、一層よくわかるのであるが、この時に得た思想を

長年の間に強め發展させて、自分ながらの一つの信念、教育的理想論（観念的ではない）として成長させて来たつもりである。

私は昭和二十四年鈴木先生に近況をお伝えしたついでに、生意気にも次のように書いたことを覚えてゐる。

「先生の教育思想は少なくとも国語教育においては、鈴木達治——渾大防小平——鈴木義雄——田中三郎という系譜を持つて続いております」（注、鈴木義雄先生は当時の国漢の教員であつて、現在豊橋市石巻中学校長として優れた経綸の腕を振つていられる。愛知県内はもちろんのこと、広く他県にまで名声は伝つており、教育委員、学校長、教員の參觀のあとを断たないほどである。）

他に直伝優秀な方々も数多くいられるとは思ふが、一つの表現として以上のような言い表わし方をした。これに対して先生から早速「生きていて目出度い、祖国再興のため、しつかりやつてもらいたい」とご返事をいただいた。この外

にも、いろいろな分野で先生の系譜を継ぎ、また発展させている同窓が数多くいることはまことに喜ばしい次第である。

昭和十八年の冬、なん時召集を受けるか、わからないので、用意だけはしておきたいと思つて、当時島根師範学校に勤務していた関係で山陰の松江市に住んでいたが、日の丸の旗一枚を持参して横浜へ出て来て、最初に鈴木先生に筆を染めていただいたことがある。あるいはこれがお別れになるかも知れないとお互に考えていたので、話は尽きなかつた。その時先生が突然「応用化学科出身の西君（西文雄君）が米から簡単に水飴を作る方法を教えてくれたので、重宝しているよ」と話して下さつた。当時西文雄君は横浜切つての少壮実業家として鳴らしていた時だつた。「西君は科は違いますが、わたくしと同期の九期生です。私は最近西君の親類の娘と結婚しましたので、同期生ではあるが私の叔父という事になつてしまつたので、どうも頭が上らないようになりました。」

「それは面白い。おごつてもらふ時には、叔父さん叔父さんと言つて奉つておくんだけ。あつはつはつはつ……」とほればれするような童顔を輝かせて、何々大笑された。

わたくしはこの時の輝くような先生の童顔を、先生の一生のお顔として、何日までも忘れないでいる。それと同時に、煙洲鈴木達治先生の思想を継承する系譜の一員として、さらに次代の担い手の養成に専念していることを、深く頭をたれて御霊前にご報告する次第である。

(商九期 滋賀大学教授)

## 思ひ出すまゝ

村 松 四 郎

新聞部に入つてまもなくの頃、「おい山のオヤヂの処へ行こう」と云はれて、高工時報の六ッ川夜話の原稿をとり、航空科の田口大氏に連れて行かれたのが、先生にお目にかかつた最初だつた。いつ頃からか知らないが、当時煙洲先生のこととは学生間では山のオヤヂで通つていた。それから六ッ川夜話の筆記に屢々お伺いする様になり、又園芸クラブの連中と先生の畑に麦刈に行つたりした。高工の二年になると、何時しか新聞部の六ッ川行きは大半は私の係の様になつた。

その頃の六ッ川夜話で「馬と戦争」と題して先生が話された中に、「近代戦術の変化によつて、馬は国防の第一線から消え去り、弓道と同じく趣味或は体育として扱はるべきもので高度国防国家建設は考慮する所なく、機械化部隊に突入すべきで我々学校では自動車、オートバイの如き訓練にむしろ重点をおくべきだ」と云う意味の一文があり、当時高工では馬術班が急激に台頭してきた時で、時の配属将校始め、馬術班関係者から先生の一文に対して遺憾の意を私は伝えられた。併し此は自動車格納庫を馬小屋に改造した如き事を知つて、わざわざ先生が六ッ川夜話中に放つた項門の一針であつたのではないかと思う。

戦後の現在に至つてみれば先生の言ではないが、彼是我非や彼非我是や論を俟たぬ所である。その頃の六ッ川夜話は殆どが時局評で、其の外に時折、人物評、教育観、忠君論、故人追悼記等を混へられて、格調高いものでした。

先生の所へ伺つて六ッ川夜話を筆記し乍らお話の合間に静かに書齋に漂う葉

巻の匂いは今も忘れ得ぬ思い出です。

当時東京から通学していた私は六ツ川の丘を下り、汽車の中で其の日の話を繰返し考え乍ら、いつも夜更けの東京の町を我家に戻つたものでした。

そうしていつの間にか、自然に先生の思想にも感化されていつた様ですし、中学出たての何も知らない私にはブレイントラストだとかトーテンクロイツだとか耳新しい言葉も沢山ありました。

又何の折か忘れましたが、先生は若かりし頃は実業界に入るのが目的であつたが、遂に教育界に入つてそのまま一生過ぎてしまわれたとのお話でした。

実業界に入つて居られたら如何なるタイプの実業家として、盛名をはせて居られたか、想像するのも愉快なことですが、そうなれば所詮「名教自然」の横浜高工、煙洲鈴木達治先生は存在し得なかつた事でしょう。

此の点私共としては先生が生来の目的であつた実業界に身を投ぜられなかつ

たのが幸せであつたとも云えましよう。

先生の退官記念出版であつたと思うが、「名教自然」と題する六ッ川夜話集録の一冊を先生に乞ふて頂いたりした私は昭和十六年の秋、記念祭の頃、六ッ川夜話が百五〇回に達するのを考へて、この記念出版を思ひついた。先生にお許しを頂いてから東奔西走が始まつた。時に第二次大戦中のことで、用紙難其他ですつかり計画がおくれて、刊行されたのは翌昭和十七年八月になつてしまい、半年繰上げ卒業の私達に漸く間に合う有様でした。此の書の題名は先生のお宅にあつた東郷神社わきの四阿「入愚亭」の名をとられて「入愚亭独嘯」とされました。

当時は学生だつた事として日本カーボンの石川等さんや、旭日石綿の寺門徳太郎さんにお電話して百部づつ取りに来て戴いたり、随分今から考へると失礼な事ばかりして申訳もない次第です。

出版後、まもなく先生は慰勞のおつもりだつたんでせうか、ニューグランドホテルへ連れて行かれ、野村洋三さんと社長室と一緒に食事をして、お話を伺ひしたのは身に余る事でした。又戦後、何度か六ッ川のお宅にお伺ひした時も「入愚亭独嘯」の事に就ては、先生がいつも喜んで居られたのは、私にとつて無上の喜びでした。

学校を卒えてから、私は大垣さんが去られてその頃、電化八回の伊勢村富雄氏が課長をされていた大同製鋼熱田工場に就職しました。伊勢村氏始め、工員一人一人からも大垣さんの人となりを幾度か聞かされて、先輩の偉大さに至らぬ先輩は恐懼したものでした。又伊勢村氏には公私に亘り色々御世話に相成り、先輩の有難さを身にしみて感じたものです。戦後はすつかり御無沙汰して全く申訳もない次第で、今や独立経営に当られている伊勢村氏の御成功、御活躍を遙にお祈りして居ります。

大同製鋼に一年有余の勤務の後、現役兵として北支大同へ入営した時、先生からのお便りの中に

水辺楊柳緑如糸 止馬煩君折一枝

春風最似在相惜 慇懃偏向手中吹

水辺の楊柳緑糸の如し 馬を止め君を煩はし一枝を折る

春風最も相惜しむ在るに似たり 慇懃偏えに手中に向つて吹く

といふ別離の情をうたつた漢詩を頂いた。今此の一詩を私から先生の前に捧げねばならなくなつてしまつた。而も先生から頂いた私の場合、再び先生の前に戻る日も得られたが、今や先生は既に不帰の客となられて、その御元氣な姿に再びお目にかかる事もないのは、なんととても残念な事です。

戦後六ッ川に先生をお訪ねした私がふとした縁で、現在の青果業界にひつぱり込まれてしまった話をした所、先生は卒業生の中でも不景気の頃、炭屋とか下駄屋とか巡査になつた人が居るけど、青果業界に入つたのは高工の卒業生には恐らく居ないよ、と笑つておられた。その時の話で、下駄屋をした人は先生の所へ訪ねて来て、応接間のテーブルの上を下駄を並べて、先生にお見せしたので、「君、家だからいいが他所へ行つてテーブルの上へ下駄を並べたら買わんよ。」と云われた話とか、炭屋した人には高工や商工実習に納めさせた話、又国寶の送迎か何かで先生も街へ出られた時、尾上町あたりで巡査に敬礼されて声をかけられたのが卒業生であつたと云う話等され、併し此等の苦勞した人々は皆、現在県の技師とか、夫々立派な地位について居るよと云われた。

それに引きかえ、十年一日の如く変らぬ私の場合は、誠に先生にも申訳ない次第ですが、只八年前、私が当時の青果業界幹部の一千万円にのぼる目に余る横

領不正利得を追及し、其の結果新しく創つた協同組合は規模は未だしであるが、その内容に於ては日本一であると自他共に許せる事だけが、いくらか先生への申し開きになるかと自ら慰めている次第です。

昭和三十一年夏の一日、私の許に先生から大型の部厚い封書が届きました。何事かと思つて早速開封に及んだ処、何と先生の例の達筆で、一枚には忙裡初知閑気味の一句と、他の一枚には清風万里の四字が揮毫されてありました。思ひもよらぬ先生の書にかばかり感激したか判りません。早速表装して先生に箱書をお願いしに持つて参りました。先生には在学中にも両三幅書いて頂いてありますが、何といつても卒業の時、特にお願いして書いて頂いた名教自然の扁額は我々のクラスメートの羨望の的で、我家の宝です。

又先生のお宅へお伺ひした或時、先生が何か調べる事があつて古い高工時報を見ようと思つたが、大学にも全然ないし新聞部の製本も戦中戦後の混乱で

なくなつてしまつた様だと歎かれた。私が丁度新聞部にあつた旧号の二部以上あるのをもらつて、製本したのが三冊ありますからお持ちしましょうといった所、それはよかつた。恐らく他にはないと思ふから、大事にしておく様にと云はれた記憶があります。

又高工時報の事に就いても、先生は大学になつてから、商学部に学報の発行が移つてしまひ学生新聞界の雄であつた高工時報の自然消滅を非常に歎かれて居られたのは、今以て我々も全く同感です。

戦後、我々電化二十一回生のクラス会が横浜や東京で開かれ後、茲数年は熱海あたりで一泊で行はれる様になつて、河村先生や鶴岡先生にも時折出席を頂いて居りますが、私は此のクラス会の帰路、横浜で降りては六ツ川のお宅へお伺ひして、日常の御無沙汰お詫び旁々先生の御元氣な様子を拝見するのが楽しみでした。所がたまたま幹事多忙の爲か、昨年度はクラス会を行はず、遂に心

にかけながらも先生のお宅にお伺ひしませんで、御病状も知らず御臨終はおろか、お葬式に迄参上出来なかつたことは、かへすがへすも申訳もない次第で、後日六ッ川のお宅にお伺ひして、先生の居間の御遺影の前で流れる涙と共にその不孝をお詫び申上げました。

煙洲会には一度だけ、その百回記念で煙洲漫筆を出版された時、先生に連れられて出席させて頂きましたが、余り大先輩ばかりなのと、自分の多忙とに追われて、遂に其後出席致しませんで、小汀幹事にはすつかり御迷惑御厄介をおかけしまして相すみませんでした。

先生亡きあとには博人さんからの誘いもあり、毎月出席して今回の先生の想い出集の発刊にも協力させて頂き、御生前私が果し得なかつた先生への精神的負債を多少でもお返し申上げ度いと思ひます。

(電化二二期辰己青果協組専務理事)

## 葬儀前後の思い出

永 田 行 夫

昨年六月、今となつては先生をかこむ最後の煙洲会が六ツ川のお宅で行はれてから、暑さの加はるにつれて次第に先生の健康が思はしくなく、七月十日大変暑い日であつたが、この日から床につかれたままとなつた。なくなられる前四、五日は先生の気分も大変よろしそうにみうけられ、めづらしく好物の鰻とビールを少々あがるなどということもあり、家族の方もほつとした面持ちであつた。

八月二十八日国大で若し先生に万一のことがあつた場合工学部葬を取り行いたいので手筈を打合はせるとの連絡があり嗣子博人さんを中心にしてその相談

があつた。その時「かえつてなくなるあとのことを段取すると長生きするとのことだから先生も多分回復されて百才位まで生きるだろう」などと話も出た。

しかし天命か翌二十九日午前五時二十六分、先生は全く眠るが如き大往生を遂げられた。虫の知らせというか、丁度前日打合せをしてあつたので早速、学校卒業生の一部の方々、親戚一同へ博人さんから連絡をとり、東芝の菅さん岡村の吉原さんの御厚意により両社の方々も手つだいに見え、あれよあれよという間に受付の机からお通夜の天幕迄出来上つて、六ッ川の先生寓居は忽ちにして花と香煙につつまれてしまつた。二十九日先生が米寿の折の葉巻を手に、にこやかに笑つて居られる写真を中にして、午後七時からお通夜が行はれた。

明けて翌三十日午前十時から、各位から送られた花にうづもれて告別式、引きつづき、十一時から出棺、先生が生前口癖のやうに言はれていた「わしが死んだら棺は卒業生に担いでもらうんぢや」との言葉通り、富山先生、阿部先生、

菅要助さん山田功さん矢田部庄栄さん大輪勇さん其の他の卒業生の方々の肩にのせられて先生は、昭和四年から三十余年通いなれた坂道を下りて行かれた。

根岸の火葬場で立上る煙を仰いで菅さんが「あつ先生も本當の煙洲になつてしまはれたなあ」とつぶやかれた言葉が耳に残つてゐる。八月三十日から九月一日迄遺骨は先生の起居された西南八帖間に安置され、その間不なれな私共一同に代つて学校及卒業生の方々が新聞広告から自動車の手配迄あらゆる用件を取りしきつて下さつた。全く有難く感じると共に、これだけ皆の方に心をつくしてもらえて先生も満足されているだろうとつくづく思つた。

九月二日この日も秋に入つたとはいへ、晴れ渡つた暑い日であつた。煙洲会幹事として生前先生とごく近しくされていた東芝タンガロイの小汀さんが遺骨を迎えにみえ式場にうつされた。創和の吉原さんの着想による、名教自然碑を斜に巻いた黒布が大理石の肌にうつつて、はつと息をのむ程印象的であつた。



黒一色の祭壇正面に花束の中に遺骨と等身大の写真を飾つて、読み続く弔辞の中に工学部葬はとどこほりなく終了した。

喪主の博人さんに抱かれて遺骨は式場から車をつらねて日野の公園墓地へと、午後六時すぎ野辺の送りも終へて、再び六ツ川へと帰つて、もう二度とこういう葬儀に出あうことはないだろうとしみじみ思つた。

(航二期 岡村製作所製造部長)

## 出版に際して

鈴木博人

此の度亡父一周忌をむかえるに当り、煙洲会より「先生の思い出」の出版をいただき、厚く御礼申し上げます。

昨年暮に「入愚亭独嘯」の編輯者である村松四郎氏が墓参に見え、其の時「先生の追悼録を編輯してみたいので、其の旨煙洲会に話してみてくれないか」との申出があつたのが発端でした。

最初父が懇意にしていた方々から思い出でも書いていただき、百頁程のパンフレットでも一周忌に配布したいと思ひ、煙洲会に御支援をいただき計画を進

めて居りました。所が会員の皆様の御熱意と父の友人、卒業生の方々から沢山の追悼文をいただき、三百頁越すものとなり、立派な一冊の本が出来上り、感謝の外ありません。

故人も地下で驚き、且つ喜んでいる事と思います。

出版の御世話を全面的にさせていただきました煙洲会幹事小汀浩一郎氏、原稿の編輯、校正を一手に引き受けて下さいました村松四郎氏に、故人に代り感謝の意を表したいと思います。

## 一 年 前

父は昭和三十三年秋以後外出することなく、自宅で病気の養生をして居たが、昭和三十五年十一月二十日の衆議員選挙の時は数日來の悪天候もからりと晴れた秋晴れの暖い日であつたので、家族と共に南中学の投票所へ出掛けた。二年

ぶりの外出で心配して居たが、坂を下り、帰りも坂の途中まで一人でゆつくり歩いて帰つたが普通二十分位のところ一時間以上もかかつた。翌日も大した事はなく元気になつた事を喜んだが、これが最後の外出となつた。(前々頁の寫真はその時、私が撮つたもので、後列左端は永田行夫氏です。)

煙洲会は引続いて自宅で行はれたが、昭和三十六年の四月以降は家族のものがうしろから支えてでないと、歩行が困難であつた。

六月二十八日風雨の下で行はれた煙洲会が最後となつた。七月は予定されて居たが、七月上旬より異例の暑さのため病状が悪化し、神経痛による腰の痛みを訴えるようになり、七月十八日に幹事の小汀氏に電話して七月の煙洲会を中止してもらつた。今迄煙洲会には病氣の時でもかくして出掛けた位で、自分の方から取り止めたのは余程自信がなかつたものと思はれた。

八月十四日から容体が悪くなり、食事も充分とれず、この日から医者藤野

先生が毎日見えるようになり、卒業生の方々初め皆様より毎日の様に見舞を受けた。二十六日午前中ニューグランド会長の野村洋三氏が見舞に見えられた時は、大変喜んで居たが、午後からは、発熱もあり意識不明となり二十九日夜明け前、静かに眠る如く息を引きとつた。

二十八日午後、国大工学部より私に電話があり、至急来てくれと云うので出掛けると、工学部長室に学校側から岩崎工学部長、阿部教授、河村教授、卒業生側から菅要助氏、吉原氏、小汀氏外十数人が集まつて居た。阿部教授より「実は先生に万一の事があつた時の相談をして大体まとまつた所なので、あなたの承諾と細部の取りきめをしたい」との事であつた。この時先生が亡くなられたら工学部葬にする申し出があつた。

父は死ぬ前から、わしが死んだら葬儀委員長に菅要助氏になつてもらい、葬儀は簡単に行うと云つて居り、菅氏に直接たのんで居たようだつた。

この事を話すと、阿部教授より、昔先生に、若し先生が亡くなつたら学葬にしてもよいかと話して、許可はもらつてあると云はれた。

そこで菅氏はじめ出席された方々の賛同もあり、皆様の御厚意を受け入れ、万一の時は工学部葬を行う手筈を定めた。更に皆様の御骨折りで諸事万端、新聞広告、電話、電報に至る細部にまで打合せが行はれた。

二十九日は前日打合せが出来ていたため、早朝より卒業生の方々初め多くの参列者があり、特に阿部教授、菅氏、吉原氏の好意により学校、東芝、岡村製作所から数十人の方々が手伝いに来て、テント、机、椅子が持ち込まれ朝のうちから葬儀の準備が出来上り、死亡届、火葬場、お寺、車の手配、駐車場に至るまで総べての用意が完了し、草ぼうぼうの庭がきれいにそうじされ、テントが張られ、お通夜が行はれた。

三十日午前中、菅葬儀委員長の下で告別式が行はれ、十一時生前の希望通り

卒業生の有志に担れて、遺体は六ッ川の丘を下り根岸の火葬場に向つた。

当日は友引きであつたが、大勢の方々が見えて居り、長びくと御迷惑もかけるし、亡父もえんぎをかつぐ人でもなく、早い方がよいので、其の日に行う事にした。然し火葬場の方はこんな日に火葬する人もなく、休みであつた。

所が根岸の火葬場は商工実習の卒業生が経営して居り、しかも吉原謙二郎氏とは同級生でもあつたので、吉原氏からたのみ、休日を返上して特に火葬をしてもらつた。其のため火葬場は混雑せず、待合室も貸切り同然であつた。

九月二日午後の学部葬は、吉原慎一郎氏の室内装飾により工学部講堂で行はれた。学部葬に先だち煙洲会幹事小汀氏が遺骨を迎えに見えて、小汀氏にだかれて六ッ川の坂を下り、工学部へと向つた。小汀氏には煙洲会の幹事として毎月一回送り迎えを受け、この道は一月に一度連れだつて歩いた道であり、感慨無量であつた事と思う。

学部葬が終ると日野の墓地に向つた。日野の墓地は昭和十年に造り、徳富蘇峰先生の筆による「煙洲鈴木達治之墓」と刻まれ、中村順平先生の指導の下に建築科の当時の学生が設計したものであつた。

墓には先妻イヨ後妻芳子及び芳子の父母の四人の遺骨が納骨され、父の筆により四人の名前が記されてあつた。

遺体を卒業生の有志にかついてもらい、小汀氏に遺骨をだいてもらい、退職後二十六年を経た今日、卒業生はじめ皆様からこんな盛大な葬儀をしてもらい、墓場でどんなに感激して居た事でしょう。

葬儀の時、示された皆様の御好意、御援助については、どんなにお礼を申しても述べたりません。唯遺族一同感謝しているのみです。

特に菅氏は当時東芝の人事移動があり、部下の姫路工場長の交迭の為、二十九日に姫路に行く所を延期され、三十日の火葬が終つてから姫路へ行き、工学

部葬の当日朝夜行で上京された有様でした。

一周忌にあたり当時を回想し、改めて感謝の意を表したいと思います。

葬儀当時のやうなむし暑い毎日が続いて居ます。一年前の出来事がついこの間のように思えてなりません。

## 編輯後記

何とも申訳もない次第ですが、先生の御逝去を知らず、遅れて昨年十二月墓参に参上しました所、其の後御子息博人さんが私宅に煙洲先生の色紙「心虚即見神」を持参して下さい恐縮しました。

その折、知名人といふのではなく先生に近しくして居られた方々から「先生の想ひ出」を寄せて頂いて、煙洲会から出版して一周忌に皆様におくばりしたらいかでせうか。と申上げた所、早速二月の煙洲会の席上で相談があつて出版の話が決まりました。私をして生来の非才と日常の多忙とを顧みず、敢てお手伝いを引受けさせたものは矢張り煙洲先生への敬慕親愛の情と御逝去の際お伺ひ出来なかつたお詫びの心からでした。

皆様の原稿は博人さんが全部御自分で直接に或は御手紙によつて御依頼して各方面から

集めて下さいました。

徳富蘇峯先生、藤原銀次郎氏は故人でありますので、蘇峯先生のは入愚亭出版の際頂いた序文を、藤原銀次郎氏のは先生への書翰を夫々のせさせて頂きました。

ニューグランドホテルの野村さんは御高令御多忙中ではありましたが、特に菅さん小汀さんと対談して頂いて此を集録しました。又煙洲先生はずつと日記をつけて居られましたので、此の中一、二をお借りして巻頭に挟みました。

御写真も沢山ありますが、紙面の都合もありまして、博人さんと御相談して、米寿の祝の時と葬儀の模様、晩年の御孫さんとお写真、煙洲会其の他を区分して少しづつのせました。

工学部葬に於ける弔辞は沢山ありますが、紙面の都合で米田氏、山口氏、大須賀氏の三辞のをせさせて頂きました。

御多忙中にも拘らず玉稿をお寄せ頂きました皆様には紙面をお借りして、厚く御礼申し上げます。一読先生を彷彿とさせ、或は先生の知られざる一面を説き、今更乍ら先生の偉大なる精神と人格とを痛感させられるものがあります。原稿を読み返し乍ら何時の間にか、

先生と共に居る様な気配をさへ感じます。又文体仮名遣ひ其他はなるべく原文のまま集録致しましたが期日、活字、紙面の都合で多少変更させて頂きましたのもございますので、御了承の程お願いします。

特に渾大防先生からは原稿の外に、三七・五・二九銀座交詢ビルで行はれた「煙洲先生の思ひ出」座談会（渾大防小平先生、増田精家先生、栗原邦志先生、司会矢野信雄氏、柳下登久雄氏）の記録も寄せられましたが、残念乍ら紙面の都合で集録出来なかつた事を深くお詫び申し上げます。期日其の他の関係で玉稿をお願い出来なかつた方達も沢山居られますが、此の点もお詫び申上げると共に、又将来何かの機会に集録出来れば幸と存じます。

装幀は昭和十年先生退職記念に高工時報社より出版されました「名教自然」の装幀を、そのまま使はせて頂きました。昔、彼の書を手にした方は再び此の書によつて懐しい想ひ出を持たれる事でせう。表紙に使用されている印鑑は先生が名教碑揮毫の際、徳富蘇峯先生より贈られ落款として使用されたもので原寸は二〇糎平方の立派なものです。

又「先生の思ひ出 煙洲会」の背文字は富山保先生をお煩はして書いて頂きました。

此の書は追悼録といふ様な固いものでなく「先生の思ひ出」集として、皆様の書齋でも

会社でも或は車中でも気軽に読んで頂きたいと思つてまとめあげました。

終りに臨みまして、煙洲会をして今日迄あらゆる菅要助氏、出版に際し終始適切な御指導を頂きました小汀浩一郎氏、原稿集録を全部なさつて下さつた鈴木博人さん、編輯校正にすつかり御世話を願いました東芝タンガロイの橋森務氏に衷心から感謝の意を表します。

(昭・三七・八・四 村松 四郎)

# 煙洲会記録

回数	年 月 日	場 所	題 名	出席人員
第一	昭和十四年六月二十九日	川崎大師八百吉		
(第二回より三十八回迄記録銀行集会所進駐軍接收の際紛失のためなし)				
第三十九回	昭和十八年三月二十五日		必勝不敗	十七名
第四十回	四月二十二日		読破万卷書 下筆如至神	十四名
第四十一回	五月二十七日		千機万象帰一誠	十六名
第四十二回	六月二十四日		千里之志	十三名
第四十三回	七月二十九日		一億敢戦	二十一名
第四十四回	八月二十六日		天下多事	十四名
第四十五回	九月三十日		古今決戦知何地 万里春宵縹渺間	十三名
第四十六回	十月二十八日		友愛	十五名

第四十七回	十一月二十五日	現下英雄皆少年	十五名
第四十八回	十二月二十三日	光輝の歳晚	十一名
第四十九回	昭和十九年一月二十七日	文武不岐	十六名
第五十回	二月念四	聖戰忽忙將七年 何知世俗又徐遷 曉天街上踏霜列 勿笑一縷金鷄煙	十五名
第五十一回	三月三十日	不用作為付自然	十二名
第五十二回	四月二十七日	白髮昂然天地間	十三名
第五十三回	五月二十五日	壯心不已煙洲自贊	十二名
第五十四回	六月二十九日	報国丹心答聖明 渾心智略屠兇鯨	十三名
第五十五回	九月五日	無題	先生のみ
第五十六回	十月二日	紫蛮玉碎恨千秋 勇躍誰能報此讐 台閣諸公乏闔志 氣誨吞敵厲吾儔	十三名

第五十七回

十月二十七日

勝締兜之緒  
台湾及比島海空大  
戦果祝賀

十四名

十一月

都合ニテ休会

第五十八回

十二月二十七日

戦塵之余閑

八名

第五十九回 昭和二十年一月二十五日

戦友精神

九名

第六十二回 昭和二十二年十一月二十七日

煙洲会再興の初会  
横浜工業会館

天地自然の道

十二名

第六十三回

十二月十八日

六尺之孤百里之命

九名

第六十四回 昭和二十三年正月二十九日 高工工業会館

樹欲静風不止  
子欲養親不待

十三名

第六十五回

二月二十六日 高工工業会館

賢難愚難卒賢  
而入愚更難也

十名

第六十六回

三月二十五日 高工工業会館

人生者芸術也

七名

第六十七回

四月二十八日 川崎東芝

学而不思則罔

五名

第六十八回

五月二十七日

思而不学則殆

十八名

第六十九回	六月二十四日	朝日ビル 商工俱樂部	救国高材待此人	十二名
第七十回	七月二十九日	"	上下交征利 而国危矣	六名
第七十一回	八月二十六日	"	知之者不若好之者	九名
第七十二回	九月三十日	"	行有不後者 反求諸已	十名
第七十三回	十月二十一日	"	簞瓢食飲不嘆貧 六十余年漂泊人 衰髮不作名利客 童心猶未忘雙親	十一名
第七十四回	十一月十八日	"	顯官多是東部墻間 之人	十名
第七十五回	十二月十六日	"	無題	十名
第七十六回	昭和二十四年一月二十七日	"	林下空憶 憂国志	十四名
第七十七回	二月十七日	"	無題	十一名
第七十八回	三月十七日	"	相对成春	十二名

第七十九回	四月十四日	朝日ビル	無題	一八名
第八十回	五月二十六日	"	賢而財多則損其志	十六名
第八十一回	六月二十二日	"	愚而財多則益其禍	八名
第八十二回	七月二十二日	"	無題	十一名
第八十三回	八月三十日	"	無題	十三名
第八十四回	九月二十七日	"	無題	九名
第八十五回	十月二十六日	"	無題	十名
第八十六回	十一月二十二日	"	無題	十名
第八十七回	十二月二十一日	"	抑損知足	十名
第八十八回	昭和二十五年一月二十七日	"	合從連衡幾疊波 列強何日息千才 史編今古興亡裡 一脈平和縷々過 新年偶作煙洲	十六名
第八十九回	二月二十四日	"	知機	十五名
第九十回	三月二十九日	"	無題	十二名

第九十一回	四月二十六日	朝日ビル 横浜俱樂部	和敬清寂	十二名
第九十二回	五月二十六日	"	始終一貫	十三名
第九十三回	六月二十七日	"	人不知而不愠 不安君子乎	十五名
第九十四回	七月二十七日	"	無題	十二名
第九十五回	八月二十四日	"	真味淡至人常	十一名
第九十六回	九月二十八日	"	保守と進歩	十名
第九十七回	十月二十七日	"	江戸趣味	十二名
第九十八回	十一月二十二日	"	新島先生	十名
第九十九回	十二月二十日	"	行雲滿客	十三名
第一百回	昭和二十六年二月二十五日	南区三春台三喜 旅館	忙裏始知閑氣味 煙洲八十一叟	三十名
第一百一回	三月二十二日	朝日ビル	無題	二十名
第一百二回	四月二十六日	"	手島精一先生	十三名

第三百三回	五月二十四日	朝日ビル	伝統尊重	十四名
第三百四回	六月二十八日	"	漢字制限新仮名遣	十三名
第三百五回	七月二十五日	"	日本精神	十名
第三百六回	八月二十九日	"	情意疎通	十二名
第三百七回	九月二十六日	"	一国の危機	十一名
第三百八回	十月二十四日	"	孝道	十名
第三百九回	十一月二十八日	"	人道	十八名
第四百十回	十二月二十六日	"	協力	十名
第四百十一回	昭和二十七年一月二十九日	寒雨	平和	六名
第四百十二回	二月二十七日	晴暖	躰方	十七名
第四百十三回	三月二十六日	快晴	大学の自治 学問の自由	十一名
第四百十四回	四月二十三日	曇	英か米か	十二名
第四百十五回	五月二十八日	曇	妥協点	十六名

第一百十六回	六月二十五日	曇朝日ビル 横浜クラブ	政治力	八名
第一百十七回	七月二十三日	快晴	民族と文化	十一名
第一百十八回	八月二十七日	快晴苦熱	文質彬彬然後君子二十一	一名
第一百十九回	九月二十五日	晴天	力と正義	十名
第一百二十回	十月二十三日	快晴	不用作為付自然	十三名
第一百二十一回	十一月念六	快晴	京阪講演旅行	十二名
第一百二十二回	十二月十八日	快晴	無題	十三名
第一百二十三回	昭和二十八年一月二十二日	快晴	午と辰巳を中にて いがみ合い	十三名
第一百二十四回	二月二十六日	雨悪天氣	情報天皇に達せず	十二名
第一百二十五回	三月二十六日	快晴	知性と行動	十名
第一百二十六回	四月二十三日	快晴	選挙漫談	十一名
第一百二十七回	五月二十八日	曇	日本の行方	十一名
第一百二十八回	六月二十五日	晴	文化財産	十一名

第二百二十九回	七月三十日 快晴・極暑	組合明暗	九名
第二百三十回	八月二十七日 雨天	無題	十三名
第二百三十一回	九月二十四日 雨天	元米大使グルー	九名
第二百三十二回	十月二十九日 曇	山陰旅行山陽四国	十四名
第二百三十三回	昭和二十九年 三月 念七 於六ッ川丘上煙洲宅	善人たらんことを願ふ(漱石)	七名
第二百三十四回	曇	立岐路	十五名
第二百三十五回	晴	ヒロポン	十四名
第二百三十六回	六月二十四日 快晴	信仰	十五名
第二百三十七回	七月二十九日 快晴	自然と民主々義	十五名
第二百三十八回	八月二十六日 晴	東洋と西洋	十二名
第二百三十九回	九月三十日 晴	康熙大帝其他	十一名
第四百四十回	十月二十八日 晴	最も能く服従するものは自由人たり	十名

昨年十一月より煙洲病氣の為四回休会

第四百四十一回	十一月二十五日	雨天	郷思	十名
第四百四十二回	十二月二十三日	好天候入愚亭にて	智者楽水 山	仁者楽 十名
第四百四十三回	一月二十七日	於煙洲宅	東洋思想	六名
第四百四十四回	二月二十四日	快晴 於煙洲宅	横浜の今昔	十名
第四百四十五回	三月二十四日	悪天氣於横浜俱樂部	時局閑談	九名
第四百四十六回	四月二十八日		選挙漫談	五名
第四百四十七回	五月二十六日	快晴	綱紀頽廢	九名
第四百四十八回	六月三十日	曇	中央亞細亞の未来	七名
第四百四十九回	七月二十八日	快晴、猛暑、川崎東芝本社	世相漫談最近誘拐 児事件	十六名
第四百五十回	八月三十一日	於東芝本社	新生活運動	二十名
第四百五十一回	九月二十八日	台風二十二号虎視 耽々の日	日本の平和、 中国の文化	十五名

- 第二百五十二回 十月二十六日 悪天候於横浜相生 工業精神 町進交會 十二名  
 第二百五十三回 好天氣進交會 無題 十名  
 第二百五十四回 十二月十四日 快晴於ホテルニユ 幹事長菅氏慶祝 1 グランド 十九名  
 第二百五十五回 昭和三十年一月二十五日 天氣快晴於東芝本社 文学片鱗 十五名  
 第二百五十六回 二月二十二日 天氣快晴東芝本社 共存共栄 十七名  
 第二百五十七回 三月二十八日 曇 東芝本社 民主教育 十五名  
 第五十八回 四月二十五日 悪天候 川崎明治 戦前戦後の学者先生 十八名  
 第一百五十九回 五月二十二日 快晴 川崎市ニユ 我国生糸の運命 21 川崎 二十一名  
 第一百六十回 六月二十七日 晴 吉川英治著劍の四君子 十九名  
 第一百六十一回 八月二十九日 降雨 〃 サラリーマン漫談 二十名

昭和三十一年九月十一日於ニユーグランド 煙洲会同人有志  
ホテル 十名

余の誕生八十五回祝賀の為め

第百六十二回

九月二十六日

悪天候  
川崎

ニユー

政治家の今昔

十八名

第百六十三回

十月二十四日

降雨

〃

指導者

二十一名

第百六十四回

十一月二十八日

好天気

〃

出処進退

十七名

第百六十五回

十二月十九日

快晴

〃

石橋民自党總裁

二十二名

第百六十六回

昭和三十二年正月二十三日

快晴

〃

官僚

十七名

第百六十七回

二月二十七日

快晴

〃

白樂天と片山哲

十五名

第百六十八回

三月二十日

快晴

〃

神武以来の混乱

八名

第百六十九回

四月二十三日

雨天

〃

名教自然碑由来  
教育私見の断片の  
刊行

十八名

第百七十回

五月二十九日

曇天

〃

支那帝國

十八名

第七十一回	六月二十六日	梅雨の雨曇 ユ一川崎	於ニ	戦争と宗教	十八名
第七十二回	七月二十四日	曇天	"	吉田茂著回想十年	十五名
第七十三回	八月二十八日	快晴	"	商工実習と魔術女 王天勝	十五名
	昭和三十二年九月十一日	於横浜ホテルニユ 1 グランド		煙洲会有志の会合	十七名
第七十四回	九月二十五日	雨天 1 川崎	於川崎ニユ	吉田茂回想十年 第二	十三名
第七十五回	十月二十三日	快晴	"	詩聖タゴール	十六名
第七十六回	十一月二十七日	快晴	"	徳富先生	十七名
第七十七回	十二月十八日	快晴	"	永田鉄山	二十一名
第七十八回	昭和三十三年一月二十九日	快晴	"	一致協力	二十名
第七十九回	二月二十六日	快晴	"	智識人の感觸	十五名
第八十回	三月二十六日	降雨	"	社会的感染	十四名
第八十一回	四月二十三日	晴	"	再び吉田茂著回想 十年	二十二名

第百八十二回	五月二十八日	晴天 於川崎市ニ ユ一川崎	軍閥の是非	十七名
第百八十三回	六月二十五日	快晴	古典	十九名
第百八十四回	七月二十三日	台風11号 悪天気	国家末路の様々	十一名
第百八十五回	八月二十七日 九月十一日	快晴 猛暑於煙洲宅 快晴於ホテル ニユ 1グランド	支那の将来 煙洲米寿祝賀会	二十一 二十二名
第百八十六回	九月二十四日	雨天	煙洲宅 日教組と教育	九名
第百八十七回	十月二十九日	快晴	蘇峰先生回顧	十一名
第百八十八回	十一月二十一日	曇天	知人回顧	八名
第百八十九回	十二月十六日	晴天	現代世相	十名
第百九十回	昭和三十四年正月三十日	晴天	世界戦争回想	十七名
第百九十一回	二月二十五日	一昨日積雪未消去 天気快晴於煙洲宅	煙洲殘筆拾遺	十二名
第百九十二回	三月二十五日	晴	煙洲宅 文芸春秋と東条英 機	十一名

第百九十三回	四月二十二日 晴	煙洲宅	反動	十二名
第百九十四回	五月二十七日 晴	"	伊藤博文	十六名
第百九十五回	六月三十日 晴	"	権藤成郷先生	十名
第百九十六回	七月二十二日 晴	"	中央亜細亞 天皇と終戦	十二名
第百九十七回	八月二十六日 曇 九月十一日	"	昨是か今非か 煙洲八十九回誕生 日	十二名 十六名
第百九十八回	九月二十三日 曇天	"	往事回顧	七名
第百九十九回	十月二十八日 曇天	"	孔孟と老莊	八名
第一百回	十一月二十五日 雨天	"	回想	十四名
第二百一回	十二月二十三日 快晴	"	教育界の一面	十五名
第二百二回	昭和三十五年一月二十七日 快晴	"	山崎闇齋、佐藤直方 浅見闇齋、三宅直齋	十三名
第二百三回	二月二十四日 快晴	"	新井白石	十七名

第二百四回	三月二十三日 快晴	煙洲宅	漢の武帝	七名
第二百五回	四月二十七日 曇天	"	ヂンギスカン	十一名
第二百六回	五月二十五日 快晴	"	南洋諸国	九名
第二百七回	六月二十二日 晴天	"	第一次世界戦争に於ける化学工業調査会	十二名
第二百八回	七月二十七日 快晴	"	知人の今昔	八名
第二百九回	八月二十四日 晴	"	前回の続き	八名
第二百十回	九月十一日 曇	"	煙洲生誕祝賀会	二十三名
第二百十一回	十月二十七日 晴	"	文化の接触	十名
第二百十二回	十一月三十日 晴	"	成吉思汗	九名
第二百十三回	十二月二十二日 曇天	"	知り好み楽しむ	十一名
第二百十四回	昭和三十六年一月二十五日 快晴	"	温故知新	十二名
第二百十五回	二月二十二日 快晴	"	テロ事件	十一名

第二百十六回

三月二十九日 快晴 煙洲宅

煙洲殘筆に付荒木  
文相に進言

九名

第二百十七回

四月二十六日 快晴 ”

小学教育の昔と今

十名

第二百十八回

五月二十四日 曇 ”

石橋湛山先生

八名

第二百十九回

六月二十八日 台風六号 ”  
悪天候

ロータリアンに就て

九名

昭和三十七年八月二十五日印刷  
昭和三十七年八月二十九日発行

先生の思い出 (非売品)

編集者 村松 四郎

発行者 小汀 浩一郎

印刷者 大東印刷工業株式会社  
花崎 実

発行所 煙洲会

横浜市南区六ツ川町一三四